文化財サービス発掘調査報告書 第33集

室町殿跡・上京遺跡発掘調査報告書

２０２５

株式会社　文化財サービス

1．調査地遠景（調査地上空より東を望む）

2．調査地遠景（調査地上空より西を望む）

１．西区　溝405（東から）

２．東区　溝405（東から）

３．出土遺物

例　言

1　本書は、京都市上京区室町通上立売下る裏築地町69番・69番1・71番、同区上立売通室町東入上立売東町30番で実施した、室町殿跡・上京遺跡の発掘調査報告書である。
（京都市番号　23S425）

2　調査は、株式会社今井建設（代表取締役　今井　隆　以下、「今井建設」という）による共同住宅建設に伴い実施した。

3　現地調査は、今井建設より株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託され、大西晃靖、菅田　薫（文化財サービス）が担当した。

4　調査期間は令和6年5月27日～9月19日である。

5　調査面積は234.5㎡である。

6　本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高はＴ．Ｐ．（東京湾平均海面高度）である。

7　土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。

8　本書の執筆は大西が行い、編集は大西、興梠千春（文化財サービス）が行った。

9　現地での記録写真撮影は大西が行い、出土遺物の撮影は写房楠華堂（内田真紀子氏）に依頼した。

10　現地での重機掘削は、株式会社一誠建設に依頼した。

11　調査に係る資機材のリースおよび仮設工事は株式会社Soidに依頼した。

12　調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。

13　発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕　田中慎一、上田智也、吉岡創平、清須慶太、小林一浩、高橋　潔、中　優作（以上、文化財サービス）、作業員（株式会社京カンリ）

〔整理作業〕　望月麻佑、吉川絵里、場勝由紀菜、野地ますみ、興梠千春、神野いくみ、後藤佳菜、上野恵己、甲田春奈、西尾知子、田頭　香、北澤鈴子、下市沙耶香、内牧明彦、溝川珠樹（以上、文化財サービス）

14　出土遺物の年代観は、平尾政幸　「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年
日本中世土器研究会　『新版　概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　2022年
に依った。

15　現地調査、整理作業において、下記の方から御教示をいただいた。記して感謝いたします。
（敬称略）

鋤柄俊夫・浜中邦弘（同志社大学）、叶井　陽・公門杏実（同志社大学院生）、山田邦和（同志社女子大学）、南　孝雄・柏田有香（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所）、小野映介（駒澤大学）、中久保辰夫（京都橘大学）、佐藤亜聖（滋賀県立大学）

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯

1　調査に至る経緯…… 1
2　調査の経過…… 1
3　測量基準点の設置と地区割り…… 3
4　整理作業・報告書作成…… 3

第Ⅱ章　位置と環境

1　位置と環境…… 5
2　既往の調査…… 6

第Ⅲ章　調査成果

1　基本層序…… 16
2　検出遺構…… 16
（1）第１面の遺構 …… 16
（2）第２面の遺構 …… 22
（3）第３面の遺構 …… 28
（4）第４面の遺構 …… 32
（5）東西拡張区の遺構 …… 35
3　出土遺物…… 36
（1）土器・陶磁器類 …… 36
（2）瓦類 …… 50
（3）鋳造関連資料 …… 50
（4）金属製品 …… 50
（5）石製品 …… 50

第Ⅳ章　まとめ

1　遺跡の変遷…… 58
2　室町殿の範囲について…… 60

図版目次

巻頭図版１　１．調査地遠景（調査地上空より東を望む）
　　２．調査地遠景（調査地上空より西を望む）
巻頭図版２　１．西区　溝405（東から）
　　２．東区　溝405（東から）
　　３．出土遺物
図版 １　調査区北壁断面図（１：100）
図版 ２　調査区南壁断面図（１：100）
図版 ３　調査区西壁断面図（１：100）
図版 ４　調査区東壁断面図（１：100）
図版 ５　第１面平面図（１：100）
図版 ６　第２面平面図（１：100）
図版 ７　第３面平面図（１：100）
図版 ８　第４面平面図（１：100）
図版 ９　遺構　１．東区第１面全景（火災処理坑掘削前　東から）
　　２．東区第１面全景（火災処理坑掘削後　東から）
図版 10　遺構　１．西区第１面全景（東から）
　　２．西区第１面俯瞰写真（上が北）
図版 11　遺構　１．石組28（西から）
　　２．石組28枠内遺物出土状況（北から）
　　３．石組29（南から）
　　４．埋甕50（南から）
　　５．土坑56（西から）
　　６．土坑56断面（西から）
　　７．土坑56硬化面除去後石組検出状況（北西から）
　　８．土坑26（西から）
図版 12　遺構　１．地業201・202・262、塼列203（西区　南から）
　　２．地業201・202、塼列203（東区　南から）
　　３．地業201地覆石検出状況（西から）
　　４．地業201石組内充填土除去後（西から）
図版 13　遺構　１．地業201東面の状況（北東から）
　　２．地業201北西隅部の状況（西から）
　　３．地業201断面（調査区南壁　北から）
図版 14　遺構　１．地業202地覆石検出状況（東区　東から）
　　２．地業202石組内充填土掘削後（東区　北西から）
　　３．地業202検出状況（西区　東から）

図版 15　遺構　１．塼列203（東区　南西から）
２．塼列203、地業262（西区　東から）
３．塼列203、地業262南西隅部の状況（南から）
図版 16　遺構　１．西区第２面全景（東から）
２．東区第２面全景（東から）
図版 17　遺構　１．地業261（北から）
２．土坑236・237・238・251（南西から）
３．土坑235（西から）
図版 18　遺構　１．西区第３面全景（東から）
２．東区第３面全景（東から）
図版 19　遺構　１．石室324（北から）
２．土坑350遺物出土状況（東から）
図版 20　遺構　１．西区第４面全景（東から）
２．東区第４面全景（東から）
図版 21　遺構　１．整地401検出状況（西区　南から）
２．整地401掘削後（西区　南から）
図版 22　遺構　１．柱列429（東から）
２．溝405東セクション（東から）
３．溝405西セクション（東から）
図版 23　遺構　１．土坑425（南東から）
２．西拡張区全景（東から）
３．東拡張区全景（東から）
図版 24　遺物　１．出土遺物－１（土坑427）
２．出土遺物－２（土坑425・428）
図版 25　遺物　１．出土遺物－３（緑釉、山茶碗）
２．出土遺物－４（古瀬戸）
３．出土遺物－５（溝405）
図版 26　遺物　１．出土遺物－６（土坑403）
２．出土遺物－７（土坑350）
図版 27　遺物　１．出土遺物－８（土坑307）
２．出土遺物－９（瓦質土器）
図版 28　遺物　１．出土遺物－10（青磁）
２．出土遺物－11（焼締陶器）
図版 29　遺物　１．出土遺物－12（土坑10）
２．出土遺物－13（土坑49）
図版 30　遺物　１．出土遺物－14（織部、唐津）
２．出土遺物－15（瓦質土器）
図版 31　遺物　１．出土遺物－16（焼締陶器）

図版 32　遺物　１．出土遺物－17（石組28　土師器、土製品）
２．出土遺物－18（石組28　染付、施釉陶器、焼締陶器）
図版 33　遺物　１．出土遺物－19（軒瓦）
２．出土遺物－20（塼）
図版 34　遺物　１．出土遺物－21（土師器）
２．出土遺物－22（鋳造関連）
３．出土遺物－23（金属製品　蓋置）
４．出土遺物－24（金属製品　鉄砲玉）
５．出土遺物－25（銭貨）

挿図目次

図１　調査地位置図（１：2,500）…… 1
図２　調査経過写真 …… 2
図３　調査区割・基準点配置図（１：150）…… 4
図４　既往調査位置図（１：2,500）…… 9
図５　礎石列112平面断面図（１：40）…… 17
図６　礎石列110・111・116平面断面図（１：40）…… 18
図７　土坑56平面断面立面図（１：40）…… 20
図８　石組28・29、土坑26、埋甕50平面断面立面図（１：40）…… 21
図９　地業201平面断面図（１：50）…… 23
図10　地業202平面断面図（１：50）…… 24
図11　塼列203、地業262、土坑234・256平面断面図（１：50）…… 25
図12　地業261平面断面図（１：50）…… 26
図13　土坑235・225平面断面図（１：40）…… 27
図14　礎石列361平面断面図（１：40）…… 30
図15　石室324、土坑321・322・350平面断面立面図（１：40）…… 31
図16　溝405、土坑409、整地401断面図（１：40）…… 33
図17　柱列429平面断面図（１：50）…… 34
図18　土坑427・428断面図（１：40）…… 35
図19　出土遺物－１（１：４）…… 37
図20　出土遺物－２（１：４）…… 41
図21　出土遺物－３（１：４）…… 43
図22　出土遺物－４（１：４）…… 47
図23　出土遺物－５（１：４、１：８）…… 49
図24　出土遺物－６（１：４）…… 51
図25　出土遺物－７（１：２、１：４）…… 52
図26　室町殿主要遺構配置図（１：1,500）…… 61

表目次

表１　既往調査一覧表 …… 10
表２　遺構概要表 …… 17
表３　遺物概要表 …… 36
表４　遺物観察表 …… 53
表５　室町殿四至対応表 …… 60

第Ⅰ章　調査の経緯

１　調査に至る経緯（図１）

京都市上京区室町通上立売下る裏築地町69番・69番１・71番、同区上立売通室町東入上立売東町30番で株式会社今井建設（以下、「今井建設」という）による共同住宅が建設されることになった。開発予定地は室町殿跡・上京遺跡にあたることから、開発に先立ち京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が実施された。試掘調査の結果、中世～近世の遺構・遺物の存在が確認されたことから発掘調査が指導され、調査面積は220㎡に設定された。発掘調査は今井建設から文化財サービスに委託された。調査の進展に伴い調査区北側を２カ所拡張したため、最終的には234.5㎡となった。

２　調査の経過（図２）

調査は令和６年５月27日より開始し、資機材の搬入から行った。それと並行して調査区を設定し、文化財保護課による検査を受けた。掘削により発生した残土を敷地内に仮置きするため調査区を東西に２分し、東区より調査を開始した。

５月29日から東区の重機掘削を開始し、江戸時代前半の遺構面である第６層上面まで掘り下げ、以深は人力による掘削を行った。東区の調査は、第６層上面（江戸時代前半）、第７層上面（安土桃山～江戸時代前半）、第８層上面（室町時代後半）、地山上面（鎌倉～室町時代後半）の４面で実施し、各面で記録作業を実施した。東区の調査は７月29日まで実施し、その後重機により西区への反転作業を開始した。

図１　調査地位置図（１：2,500）

1．調査前（北東から）

2．東区重機掘削作業（南東から）

3．東区遺構掘削作業（東から）

4．西区重機掘削作業（南西から）

5．西区遺構掘削作業（東から）

6．東拡張区調査経過（北西から）

7．東区遺構測量（南東から）

8．調査終了後の状況（北東から）

図２　調査経過写真

西区の調査は、東区と同様に第６層上面まで重機で掘削し、以後は人力での作業を実施した。東区と同じく第６層上面、第７層上面、第８層上面、地山上面の４面で調査を実施し、各面で記録作業を行った。西区の調査時には、層間掘削時に重機も並行して使用した。西区の調査は９月13日まで実施した。

９月14日には、室町殿北辺の痕跡を確認するため、調査区北側の２カ所を拡張した。いずれの拡張区でも室町殿北辺の痕跡は確認できなかったが、地山上面で鎌倉時代初頭の土坑を検出し、土坑から土器類が出土した。

すべての記録作業終了後、調査区埋め戻しを行った。その後、資機材を撤収して９月19日に現地調査を終了した。

なお、写真撮影機材は、35㎜フルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35㎜白黒フィルムおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。

現地調査においては、適宜、文化財保護課の検査および指導を受けた。また、本調査の検証審査員である同志社大学教授浜中邦弘氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言を頂いた。

３　測量基準点の設置と地区割り（図３）

測量基準点は、VRS測量により調査地敷地内にＴ１、Ｔ２を設置し、その２点からトータルステーションによりＴ３を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

Ｔ１	X = -107,373.465 m	Y = -22,072.660 m	H = 57.293 m
Ｔ２	X = -107,372.602 m	Y = -22,083.929 m	H = 57.370 m
Ｔ３	X = -107,387.264 m	Y = -22,073.220 m	H = 56.982 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して３ｍグリッドを設定した。Ｙ軸にアラビア数字を西から東に、Ｘ軸にアルファベットを北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。地区名は、グリッドの北西角を基準とした。

４　整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した大西、編集作業は大西・興梠千春が担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。

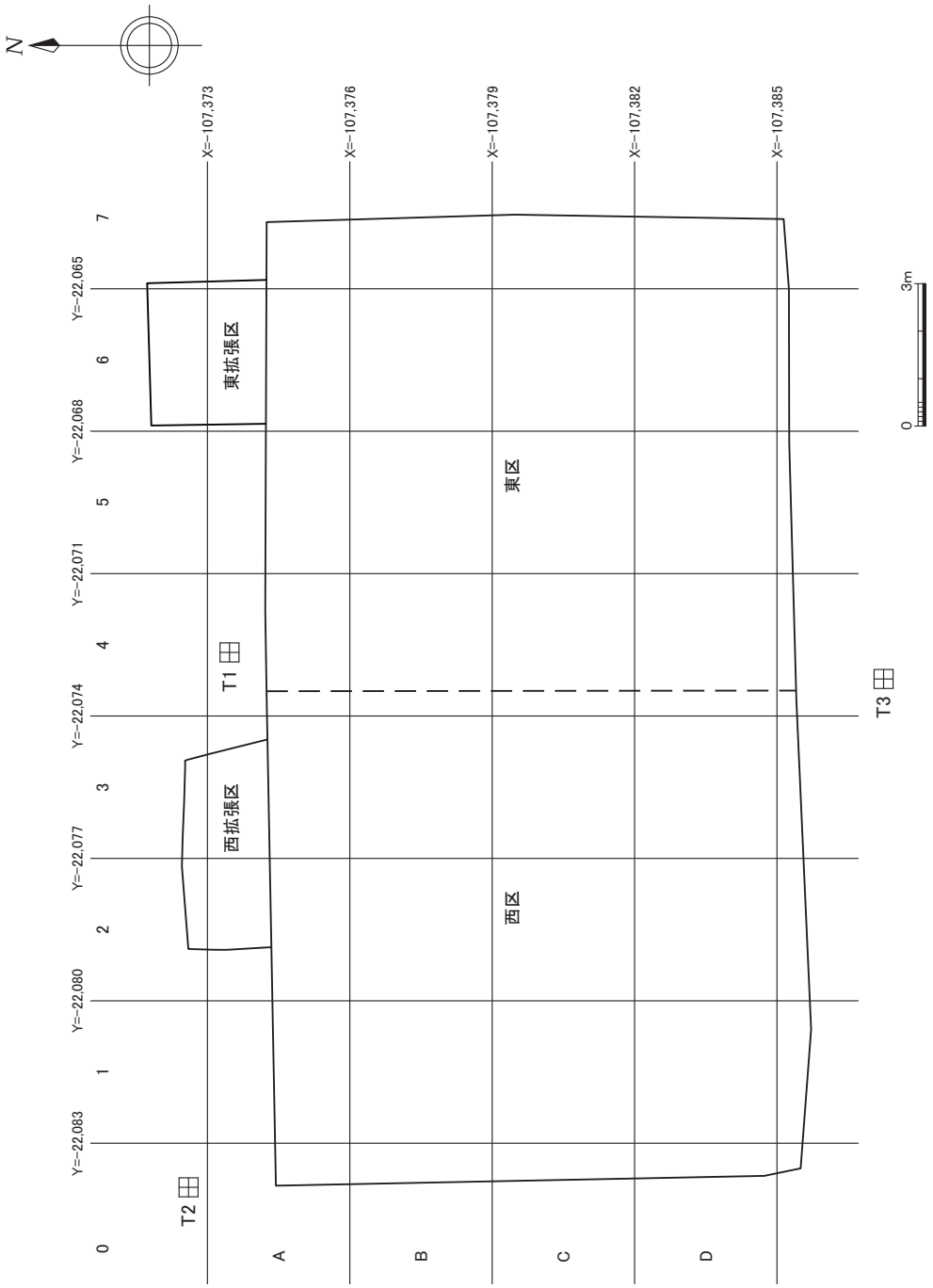


図３　調査区割・基準点配置図（１：150）

第Ⅱ章　位置と環境

１　位置と環境

調査地は上立売通と室町通の交差点南東に位置しており、足利将軍家の邸宅である室町殿の北西隅に比定される。また、室町時代に将軍や武家・公家の屋敷、寺院が集まることで形成された市街地遺跡である上京遺跡の中央付近にもあたる。

室町時代以前

調査地周辺は、古代から出雲氏などの集落が存在していたと推定されている。平安京北辺から約600ｍ北に位置するが、堀川以東の「一条北辺」地域は10世紀半ば～後半頃には土地開発が進む。康和年中（1099～1104）には藤原基頼の邸宅が建てられ、邸内に持仏堂を建立し持明院と名付けた。天治年中（1124～1126）には子の通基による拡張整備が行われ、堂号を安楽光院と改め、持明院を一家の号とした。後に、後深草系統の上皇は持明院殿を仙洞御所とし拠点としたことにより、後深草上皇の系統は持明院統と称された。その後、持明院統は北朝へとつながっていく。

鎌倉時代には、平安京左京域の南北路を北へ延長し、それを辻子と呼ばれる東西路でつなぐことにより街路が形成されていった。正安４年（1302）に後深草上皇の子である伏見上皇は、持明院に再び仙洞御所を設け、それに伴い東西路である持明院大路（毘沙門堂大路）が整備された。持明院大路は、現在の上立売通に比定される。街路の整備と共に公家の邸宅が増加していき、「今小路殿」、「常磐井殿」などの院御所や貴族の邸宅などが点在したことが『花園天皇宸記』などに記される。

室町時代

室町時代には、調査地周辺は足利家の邸宅である室町殿が造営され、本調査地はその北西隅にあたる。また、室町殿の西隣には、明徳三年（1392）に創建から10年を経て竣工した相国寺が位置し、周辺は武家・公家の邸宅や寺院が立ち並ぶ状況であった。

室町殿は、室町家の「花亭」と今出川家の「菊亭」を併せた敷地に造営された。室町通に正門を構えたことから室町殿と呼称され、足利氏による幕府が室町幕府と呼ばれることにつながっていく。邸宅は永和四年（1378）に造営が開始され、同年に菊亭部分が完成した後、３代将軍足利義満は三条坊門第から移り、将軍御所としている。邸宅内に造営された庭園には鴨川から水を引き、全国の守護大名から献上された花木が配されたことから「花の御所」と呼称された。永徳元年（1381）には、後円融天皇、関白二条師嗣らを招いて詩歌や蹴鞠の会が催されている。

４代将軍足利義持は、義満死後に三条坊門第を将軍御所としてそちらに移ったが、６代将軍足利義教は永享三年（1431）に再び室町殿へ移る。

８代将軍足利義政は、長禄二年（1458）に室町殿の大改築を開始し、改築の終了した同四年（1460）に烏丸第より移る。以後、応仁の乱の戦火により文明八年（1476）に焼失するまでの間、将軍御所となった。応仁の乱勃発時には、後花園上皇と後土御門天皇が戦火を避けて室町殿に避難している。

文明八年（1476）、周辺の土倉・酒屋が放火され類焼し、室町殿は全焼する（『実隆公記』文明八年十一月十三日条）。これ以降は再建を繰り返しており、文明十一年（1479）には諸国から上納金を集め寝殿を造るが、これは翌年に焼失してしまう（『在盛卿記』文明十一年二月十三日条）。文明十三年（1481）には周囲に築地塀を造作している（『在盛卿記』文明十三年六月五日条）。しかしながら、室町殿の再建はならず、長享二年（1488）には室町殿の跡地が夜盗の集会場となっている状況が問題視されている（『蔭涼軒日禄』長享二年二月十一日条）。

12代将軍足利義晴は、天文十一年（1542）に室町殿を再建したが、13代将軍足利義輝は永禄二年（1559）に二条御所を造営し移ったことにより、室町殿は廃されることとなった。

室町殿の範囲については、室町以東、烏丸以西、北小路以北、柳原以南とされる。現在の名称では、西が室町通、東が烏丸通、南が今出川通となるが、北面の柳原にあたる東西の通りは明確ではなく、高橋康夫氏は上立売通を柳原にあてている。規模については、『大乗院寺社雑事記』文明十一年（1479）三月六日条には、東西40丈（約120ｍ）、南北60丈（約180ｍ）と記されるが、同史料に応仁の乱以降は南北40丈に縮小したとある。敷地外となった南方20丈には小屋が建てられたと記されており、室町殿の規模縮小と周辺の町家化がみてとれる。

安土桃山～江戸時代

室町殿の廃絶後は、跡地は寺院、武家・公家の邸宅、町家が展開する状況となった。調査地周辺では、東方は引き続き相国寺が広大な敷地を占有し、西方では近衛家の本邸が移転した後も別邸が江戸時代を通じて存在し、この別邸は桜の御所と呼称された。

江戸時代前期に描かれた『洛中絵図　寛永後萬冶前 』（京都大学附属図書館蔵　中井家旧蔵）では、調査地は聖護院の西に展開する町家の北西隅にあたる。また、元禄九年（1696）に作成された『京大繪圖 : 新撰増補』では、聖護院御下屋敷は上立売通と室町通に面した状態で描かれ、調査地はその北西隅にあたる。時代が下り、嘉永五年（1852）に作成された『嘉永改正新選京繪圖』では、大聖寺宮が上立売通と室町通に面した状態で描かれ、調査地はその北西隅にあたる。

参考文献

山田邦和「足利将軍御所の変遷」『「武家拠点科研」大阪研究集会　中世後期から近世初頭における武家拠点形成の研究』「武家拠点科研」事務局　2022年

高橋康雄「足利義満の「王都」－大規模開発と地域空間形成」『海の「京都」』京都大学学術出版会　2015年

『京都の歴史３　近世の胎動』學藝書林　1968年

『京都の歴史10　年表・辞典』學藝書林　1976年

２　既往の調査（図４）

調査地周辺では発掘調査の他、試掘、立会調査を含めると、これまでに多くの調査が実施されている。中世以降の成果が中心であるが、飛鳥～平安時代の成果の他、縄文時代草創期の有舌尖頭器の出土例もある。以下に、主な調査成果を時代毎にみていくことにする。

縄文時代

周辺で当該期の遺構は現在のところ確認されていないが、調査38において、地山であるにぶい黄橙色粘質土層から縄文時代草創期とみられるチャート製の有舌尖頭器が出土した。その他、本調査地からやや離れるが、同志社女子大学図書館地点の調査において、後世の遺構などに混入する形で縄文時代後期の深鉢片や時期不明のチャート・安山岩製の石器が出土している。

弥生～古墳時代

調査地周辺では、ほぼ成果がみられない。上述した同志社女子大学図書館地点の調査で、古墳時代の須恵器甕が出土している。

飛鳥～奈良時代

調査地周辺では遺構の検出はみられず、調査７で奈良時代の遺物が少数出土している。調査地より約400ｍ東の相国寺旧境内、同志社大学、同志社女子大学・女子高校・女子中学校での調査では、７～８世紀の竪穴建物・掘立柱建物・溝が検出され、遺物の出土も多い。この付近は出雲郷と想定され、当該期の集落の中心であったとみられている。調査地周辺はその縁辺で、あまり活発な利用はされなかったと想定される。

平安時代

調査38において、遺構は検出されていないが、須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器と共に石帯が出土している。調査39では、被熱痕のある平安時代前期の瓦や面取りをした凝灰岩片が土坑から出土しており、瓦葺建物の存在が示唆される。

鎌倉時代

本調査地から西180ｍに位置する同志社大学新創館（旧育真館）地点で実施された調査24では、幅３～４ｍ、深さ約２ｍの排水溝とみられる東西溝が検出され、最下層から12世紀末～13世紀初頭の土師器皿が出土した。調査27では、溝で区画された相国寺創建以前の建物群・井戸・土坑などが検出されている。井戸から青磁・白磁の優品の破片が出土していることから、公家や上級武士などの階層が居住した屋敷地と想定されている。調査37では井戸や礎石を伴った柱穴が検出され、比較的規模の大きな邸宅の存在が想定されている。

室町時代

室町殿の範囲内でこれまでに実施された調査件数は、試掘・立会を含めると30件を超える。本調査地東の同志社大学寒梅館地点で実施された調査２では、上立売通より南に５ｍの地点で室町殿北端とみられる東西溝が検出され、その溝は14世紀に属すると想定されている。東西溝埋没後その上位に塀・建物の地業とみられる礫敷が検出され、これらは室町殿北面の土塀地業や敷地北東部に建てられた社の地業と考えられている。室町殿の範囲に関する遺構としては、調査20で東面とみられる南北溝、調査７・11で一時期の南面とみられる東西溝、調査10で西面とみられる濠が検出されている。洛中洛外図では、屋敷の南側に庭園が描かれている。この庭園に関する遺構は、調査５で巨大な石材を用いた景石と滝組、調査８で景石、調査４～８では池を検出している。調査５では庭園陸部の造成土から15世紀後半の土器が出土したことから、８代将軍義政による造営であるとみられる。調査７では15世紀前半の築山・景石を整地した後に16世紀前半の築山・景

石が構築されていることが確認された。

室町殿の東には14世紀末に相国寺が建立される。調査27では創建期の路面、室町時代後半は区画に伴う柵や溝、僧房の一部とみられる柱穴や井戸が検出された。室町時代末には区画溝の他に堀とみられる大規模な溝が２条検出され、戦国期には烏丸通の東に堅牢な備えを行っていたことが確認された。柵・石室・井戸・集石・土坑・柱穴など遺構数は激増しており、活発な土地利用が伺える。同志社中学校体育館地点で実施された調査30では、16世紀後半の石室・瓦溜・柱穴群・南北溝が検出され、南北溝は相国寺西辺を限るものと推定される。同志社大学今出川キャンパス整備に伴う第１～５次調査（調査29・134）では、相国寺創建時の南北水路・水路堤上の南北道路・石垣、室町時代末の礎石建物・南北方向の壕などが検出された。出土遺物に「鹿」の墨書がある瀬戸椀や「鹿苑衆寮」の墨書がある白磁皿、石標などがあり、調査地が相国寺塔頭「鹿苑院」にあたると判明した。

調査24では、鎌倉時代で取り上げた大型の東西溝が引き続き機能しており、この溝は16世紀前半～中頃まで存続している。16世紀代には調査区の全域に石組遺構や土坑などが分布している。15世紀後半には北に位置する持明院殿が焼失し、また近衛家の本邸が移されたことを契機として、東西溝を埋め新たな土地利用が始まったとみられている。

安土桃山時代～江戸時代前半

室町殿の跡地は、先述の通り聖護院・大聖寺などの寺院や町家が展開していく。調査３では２面の調査が実施され、17世紀代と18世紀代の遺構が検出されている。調査区東端で東西両側に面を持った南北方向の石積が検出され、これは洛中絵図に描かれた聖護院西面の敷地境界であるとされる。調査５では多数の石室が検出され、石室には平面形が円形のものと方形のものが存在している。調査８では建物、塼組遺構、石敷遺構、石組遺構、東西溝、土坑などが検出され、これらは洛中絵図にある盛方院に関するものと想定されている。調査10では15世紀後半の土取坑、16世紀以降の建物・柵・井戸・土坑などが検出され、15世紀後半以降に町家化が進行する状況が確認された。調査11では内部にカマドを持つ17世紀前半の建物が検出され、この建物は風呂もしくは鋳造・鍛冶を行った施設の可能性が想定されている。その他、鋳造関連遺物を多く含む廃棄土坑や18世紀代の南北方向の石垣などが検出されている。石垣は、洛中絵図によれば勧修寺家の屋敷地西端を画するものとみられている。

調査24は近衛家邸宅にあたり、本邸が烏丸今出川の南東部に移った後も「桜の御所」として別邸は江戸時代を通じて存続している。調査では16世紀末～17世紀初頭の土蔵とみられる塼列建物・石組土坑・土坑などが検出され、上立売に面して土蔵が立ち並ぶ状況であったとみられている。17世紀前半には井戸や石組土坑が増加し、調査地が町家化していく状況を示しているとされる。

相国寺旧境内にあたる調査27では、16世紀末～17世紀初頭には建物基礎・石室・井戸・集石・溝・土坑などが検出されるが、その数は室町時代に比べ減少し、遺物の出土も減少傾向にある。この頃には、調査地西部は墓地として利用されたと推定されている。17世紀後半は遺構・遺物共に激減し、これは元和六年（1620）に発生した上京大火が影響したものと考えられている。上京大火に関するとみられる成果として、調査37では大型の火災処理坑が複数検出された。処理坑から出土した遺物には織部・志野・唐津などの茶陶が多く含まれ、居住者の生活水準の高さが窺える。

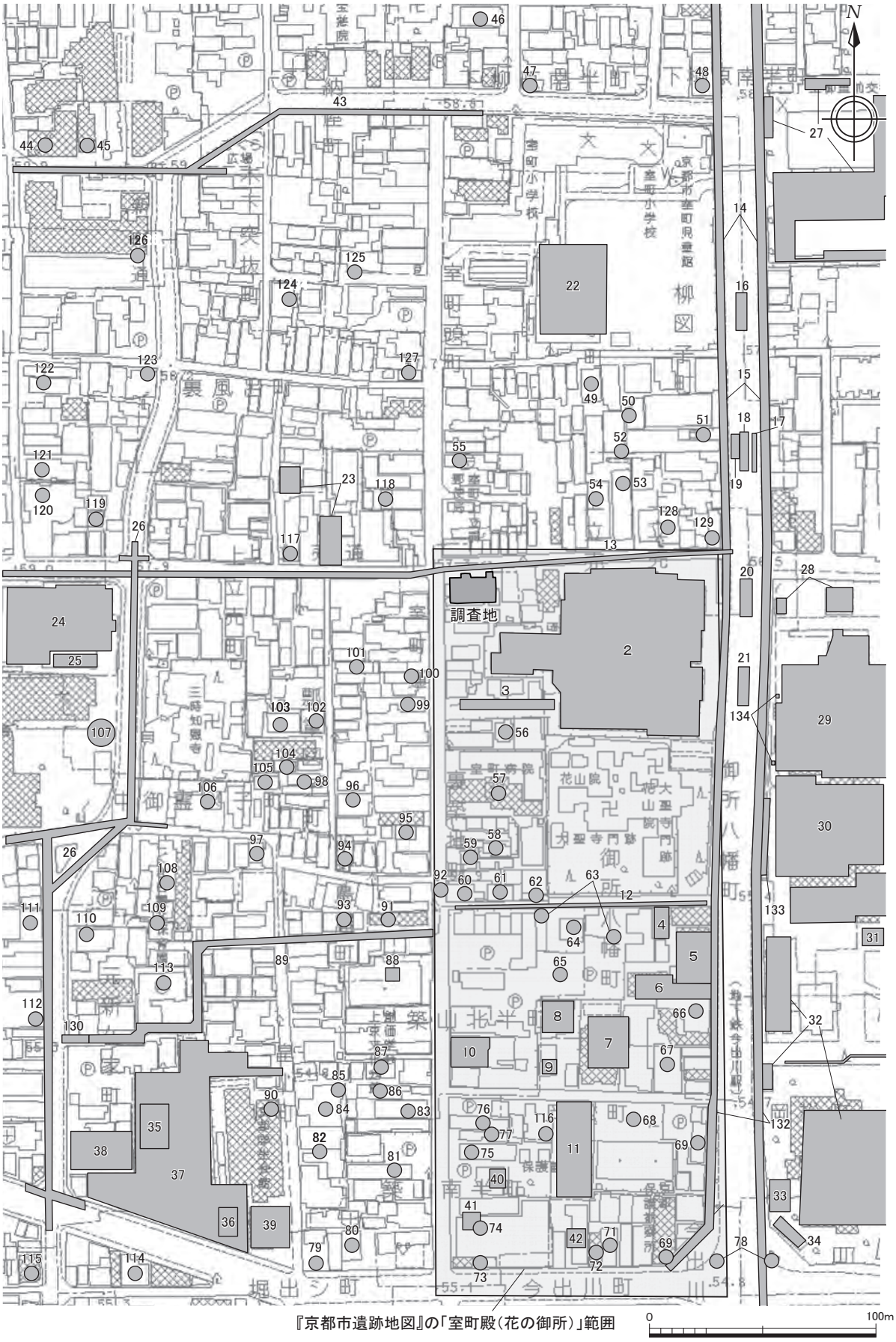


図４　既往調査位置図（１：2,500）

表１　既往調査一覧表

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	本調査地	発掘		
2	室町殿跡（寒梅館地点）	発掘	鎌倉時代後半の井戸、鎌倉時代の東西溝、室町時代の石敷遺構・石組水路・柱穴列・建物基礎、安土桃山時代の土坑、江戸時代後期の土坑・鋳造遺構など。	『学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書 同志社大学歴史資料館調査研究報告第４集』同志社大学歴史資料館　2005 年
3	室町殿跡（寒梅館（旧大学会館）地点）	発掘	江戸時代前期の土器溜・土坑・かまど状遺構、江戸時代後期の石組・土坑・瓦組遺構など。	『同志社大学旧学生会館（室町殿跡）第３期発掘調査報告 同志社大学構内遺跡発掘調査報告書（2003・2005 年度）同志社大学歴史資料館調査研究報告第７集』同志社大学歴史資料館　2007 年
4	室町殿跡	試掘	室町時代～江戸時代の石組遺構。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 61 年度』京都市文化観光局　1987 年
		発掘	室町時代の土坑・礫敷遺構・石組遺構。	『京都市埋蔵文化財調査概要 61』埋文研 1989 年
		立会	室町時代の包含層、時期不明の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 61 年度』京都市文化観光局　1987 年
5	室町殿跡	立会	盛土のみ。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 57 年度』京都市文化観光局　1983 年
		試掘	中世の遺構面３面を確認。	『京都市内遺跡試掘調査報告　令和元年度』京都市文化市民局　2020 年
		発掘	室町時代の庭園遺構（池部･陸部･滝石組･景石）・土坑、安土桃山時代～江戸時代の柱穴列・井戸・石室・土坑・集石土坑。	『室町殿跡・上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020- 1　埋文研　2020 年
		詳細分布	室町時代の庭園遺構（景石）。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和２年度』京都市文化市民局　2021 年
6	室町殿跡 No.79 地点	発掘	室町時代の土坑・落込み・池状遺構、江戸時代の井戸・土坑・落込み。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1981 年
7	室町殿跡	試掘	室町時代後期の整地層・集石遺構。発掘調査に切り替え。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』京都市文化観光局　1990 年
		発掘	室町時代の溝・石組遺構・築山・景石、江戸時代前期の建物跡・塼列・溝・土坑、石敷遺構・石組遺構など。	『京都市埋蔵文化財調査概要　平成元年度』埋文研　1994 年
8	室町殿跡	試掘・立会	室町時代と考えられる池の汀。庭石などを検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 60 年度』京都市文化観光局　1986 年
9	室町殿跡	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 25 年度』京都市文化市民局　2014 年
		試掘・立会	室町時代の庭石・池の汀、安土桃山～江戸時代後期の整地層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 60 年度』京都市文化観光局　1986 年
10	室町殿跡	発掘	室町時代の土坑・溝・柱穴・礎石・濠、室町時代末～江戸時代の井戸・溝・土坑・礎石・柱穴。	『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 30 年度』京都市文化市民局 2019 年
11	室町殿跡	発掘	室町時代の溝・土器溜・土坑・石室・柱穴・柱穴列・三和土・土取土坑、安土桃山～江戸時代の建物・井戸・土器溜・土坑・石室・柱穴列、集石・石垣・土取土坑。	『室町殿跡・上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020- 1　埋文研　2020 年
12	室町殿跡	詳細分布	近世包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 30 年度』京都市文化市民局　2019 年
13	上京遺跡・新町校地遺跡・室町殿跡・相国寺旧境内	詳細分布	室町時代の溝状堆積。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 21 年度』京都市文化市民局　2010 年
14	相国寺旧境内	立会	室町時代の土坑・包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成 15 年度』京都市文化市民局　2004 年
15	室町殿跡・相国寺旧境内	立会	室町時代の柱穴、室町時代後半の堀・石組井戸・石列・石敷き、江戸時代の土坑・堀状遺構・石組井戸・石積み遺構、江戸時代後期の土坑。	『京都市埋蔵文化財調査概要　平成 14 年度』埋文研　2004 年
16	相国寺旧境内 No.32 地点	発掘	室町時代末期の濠・石垣・落込み・土坑・溝、江戸時代後期の土坑、井戸。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1979 年
17	相国寺旧境内 立－16 地点	立会	室町時代後半の溝、桃山時代の溝、時期不明の土坑。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1980 年
18	相国寺旧境内 No.45 地点	発掘	室町時代末期の溝･土坑、桃山時代の土坑･石群、江戸時代後期の井戸・土坑・瓦溜。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1980 年

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
19	相国寺旧境内 X－3地点	発掘	室町時代後期の溝・落込み・井戸・土坑・ピット・石垣。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1980年
20	相国寺旧境内 No. 7地点	発掘	室町時代末期の土坑・礎石・溝。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1979年
21	相国寺旧境内 No.33地点	発掘	室町時代末期の溝・土坑。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1979年
22	相国寺旧境内	立会	発掘調査に移行。	『京都市埋蔵文化財調査概要　平成9年度』埋文研　1999年
23	上京遺跡	詳細分布	中世遺物包含層、室町時代の東西溝・柱穴・土坑、近世の井戸。	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成23年度』京都市文化市民局　2012年
24	上京遺跡・ 新町校地遺跡	発掘	室町時代の塼組遺構・礎石建物・柱列・溝・土坑、江戸時代の礎石建物・池・井戸・土坑・溝。	『上京遺跡・新町校地遺跡発掘調査報告書－同志社大学新創館（旧育真館）建替え工事に伴う発掘調査－ 同志社大学歴史資料館調査研究報告第20集』同志社大学歴史資料館 2024年
25	新町校地遺跡 （育真館地点）	発掘	室町時代後半の集石遺構（礎石か）・土坑、江戸時代前半の石組・土坑。	『上京・西大路町遺跡桜の御所跡地点の発掘－同志社大学育真館地点の発掘調査－ 同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.23』同志社大学校地学術調査委員会　1997年
26	新町校地遺跡・ 上京遺跡 （旧室町殿跡を含む）	立会	室町時代中期、末期の包含層	『京都市内遺跡立会調査概報　平成13年度』京都市文化市民局　2002年
27	相国寺旧境内・ 上京遺跡	発掘	鎌倉時代の溝・井戸、室町時代の溝・井戸・柱穴・掘立柱建物、戦国～安土桃山時代の溝・井戸・柱穴・掘立柱建物・石室・石組墓、江戸時代の溝・土坑・落込み・井戸	『相国寺旧境内・上京遺跡発掘調査報告書－同志社大学烏丸キャンパス建設に伴う発掘調査－ 同志社大学歴史資料館調査研究報告第12集』同志社大学歴史資料館　2024年
28	相国寺門前町 （今出川キャンパス整備第4次～第5次）	発掘	鎌倉時代の井戸・土坑・溝、南北朝～室町時代の礎石建物・濠・溝・井戸・土坑、室町時代末期の建物跡、江戸時代の溝・石室・土坑・溝などを検出。	『相国寺旧境内発掘調査報告書 今出川キャンパス整備に伴う発掘調査第4次～第6次 同志社大学歴史資料館調査研究報告第13集』同志社大学歴史資料館　2015年
29	相国寺門前町 （今出川キャンパス整備第4次～第5次）	発掘	鎌倉時代の井戸・土坑・溝、南北朝～室町時代の礎石建物・濠・溝・井戸・土坑、室町時代末期の建物跡、江戸時代の溝・石室・土坑・溝などを検出。	『相国寺旧境内発掘調査報告書 今出川キャンパス整備に伴う発掘調査第4次～第6次 同志社大学歴史資料館調査研究報告第13集』同志社大学歴史資料館　2015年
30	相国寺門前町629 （中学校体育館地点）	発掘	桃山時代の石室・石組遺構・井戸・集石・柱穴群・土坑・瓦溜・溝、江戸時代の井戸・石組遺構・集石などを検出。	『同志社中学校体育館建設予定地発掘調査概要 同志社大学校地学術調査委員会調査資料№10』同志社大学校地学術調査委員会　1977年
31	相国寺門前町629 （中学校新彰栄館北地点）	発掘	江戸時代の井戸・土坑・石列などを検出。	『同志社中学校々地内発掘調査概要　同志社大学校地学術調査委員会調査資料№4』同志社大学校地学術調査委員会　1975年
32	玄武町596・ 岡松町264 （大学図書館地点）	発掘	江戸時代後半の井戸・瓦溜・土坑・礫溜・火災整地層などを検出。	『同志社大学今出川校地発掘調査概報 同志社大学校地学術調査委員会調査資料№1』同志社大学校地学術調査委員会　1972年
	相国寺門前町 （今出川キャンパス整備第4次～第5次）	発掘	鎌倉時代の井戸・土坑・溝、南北朝～室町時代の礎石建物・濠・溝・井戸・土坑、室町時代末期の建物跡、江戸時代の溝・石室・土坑・溝などを検出。	『相国寺旧境内発掘調査報告書 今出川キャンパス整備に伴う発掘調査第4次～第6次 同志社大学歴史資料館調査研究報告第13集』同志社大学歴史資料館　2015年
33	玄武町 （図書館西地点）	発掘	室町時代末期～江戸時代の土坑・石組・溝・濠などを検出。	『同志社大学構内遺跡発掘調査報告書(2003・2005年度)同志社大学歴史資料館調査研究報告第7集』同志社大学歴史資料館　2007年
34	御所八幡町・玄武町 （地下鉄今出川駅地点）	発掘	奈良時代のピット、室町～江戸時代の井戸・土坑・溝・石列・礫敷などを検出。	『同志社構内地下鉄烏丸線今出川駅地点の発掘調査』同志社大学校地学術調査委員会 1981年
35	上京遺跡 （旧室町殿跡）	発掘	鎌倉時代の井戸、室町時代～桃山時代の溝・土坑・柱穴。	『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和54年度』埋文研　2012年
36	上京遺跡 （旧室町殿跡）	発掘	江戸時代の井戸・石室・土坑。	『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和53年度』埋文研　2011年
37	上京遺跡 （旧室町殿跡を含む）	発掘	鎌倉時代の土坑・柱穴、室町時代の土坑・布掘柱列・柱列・柱穴、桃山時代の土坑・溝・石室・柱列・柱穴、江戸時代の土坑・整地層。	『上京遺跡・室町殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2013-8　埋文研　2014年

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
38	上京遺跡	試掘	桃山時代、江戸時代初期の整地層。	『京都市内遺跡試掘調査報告　令和４年度』京都市文化市民局　2023 年
	上京遺跡	発掘	(縄文時代草創期の有舌尖頭器)、室町時代の土坑・井戸、桃山時代の土坑・井戸・石室・柱穴・柱穴列、江戸時代前期の土坑・井戸・石室、江戸時代中期以降の井戸・土坑。	『上京遺跡発掘調査報告書』安西工業株式会社　2023 年
39	上京遺跡 室町殿跡隣接地	試掘 発掘	平安時代前期の土坑、平安時代後期の土坑、室町時代の東西溝２条・柱穴・土坑。	『京都市埋蔵文化財調査概要　平成元年度』埋文研　1994 年
	上京遺跡 (旧室町殿跡)	試掘	室町時代の溝・土坑・柱穴。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成２年度』京都市文化市民局　1991 年
40	室町殿跡	試掘	室町～安土桃山時代の遺構。	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 24 年度』京都市文化市民局　2013 年
		詳細分布	試掘調査済みの地点、検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 24 年度』京都市文化市民局　2013 年
41	室町殿跡	試掘	幕末期の堆積層のみ。	『京都市内遺跡立会調査報告　平成 17 年度』京都市文化市民局　2006 年
42	室町殿跡	試掘	中世末の土坑、16 世紀初頭の整地層。	『京都市内遺跡立会調査報告　平成 17 年度』京都市文化市民局　2006 年
43	相国寺旧境内・ 上京遺跡	詳細分布	中世包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 29 年度』京都市文化市民局　2018 年
44	上京遺跡	詳細分布	室町時代の包含層、時期不明の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 22 年度』京都市文化市民局　2011 年
45	上京遺跡	立会	江戸時代末期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成 16 年度』京都市文化市民局　2005 年
46	相国寺旧境内	立会	江戸初期の包含層、江戸の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成 18 年度』京都市文化市民局　2007 年
47	相国寺旧境内	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和３年度』京都市文化市民局　2022 年
48	相国寺旧境内 (旧室町殿跡)	立会	検出なし。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成８年度』京都市文化市民局　1997 年
49	相国寺旧境内	立会	室町時代の土坑・包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 57 年度』京都市文化観光局　1983 年
50	相国寺旧境内	立会	室町後期の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 59 年度』京都市文化観光局　1985 年
51	相国寺旧境内	立会	室町時代後期、室町時代末期～桃山時代、江戸時代の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成 13 年度』京都市文化市民局　2002 年
52	相国寺旧境内	詳細分布	室町時代の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 24 年度』京都市文化市民局　2013 年
53	相国寺旧境内	立会	室町時代の土坑。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成３年度』京都市文化観光局　1992 年
54	相国寺旧境内	試掘	土坑・井戸。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　昭和 54 年度』京都市文化観光局　1980 年
55	相国寺旧境内	立会	盛土のみ。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 59 年度』京都市文化観光局　1985 年
56	室町殿跡	立会	検出なし。	『京都市内遺跡立会調査報告　平成 18 年度』京都市文化市民局　2007 年
57	室町殿跡	立会	検出なし。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 57 年度』京都市文化観光局　1983 年
58	室町殿跡	立会	中世の包含層、近世の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成 10 年度』京都市文化市民局　1999 年
		立会	江戸時代末期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査報告　平成 18 年度』京都市文化市民局　2007 年
59	室町殿跡	立会	検出なし。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　昭和 54 年度』京都市文化観光局　1980 年
60	室町殿跡	立会	江戸時代の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 58 年度』京都市文化観光局　1984 年
61	室町殿跡	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 30 年度』京都市文化市民局　2019 年
62	室町殿跡	立会	近世遺構の包含層。	『京都市内遺跡立会調査報告　平成 19 年度』京都市文化市民局　2008 年
63	室町殿跡	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和２年度』京都市文化市民局　2021 年
64	室町殿跡	立会	時期不明の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成３年度』京都市文化観光局　1992 年

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
65	室町殿跡・上京遺跡	詳細分布	中世の包含層、近世の土坑・石組・焼土層・包含層、時期不明の井戸・落込み・ピット・石列など。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成23年度』京都市文化市民局　2012年
66	室町殿跡	立会	室町時代後期の包含層、時期不明の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』京都市文化観光局　1985年
67	室町殿跡	立会	室町時代の庭石、包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成7年度』京都市文化観光局　1996年
68	室町殿跡	詳細分布	巡回時掘削終了。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和3年度』京都市文化市民局　2022年
		詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和3年度』京都市文化市民局　2022年
		試掘	江戸時代中期の遺構、石垣。	『京都市内遺跡試掘調査報告　令和3年度』京都市文化市民局　2022年
69	室町殿跡	詳細分布	時期不明の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成23年度』京都市文化市民局　2012年
70	室町殿跡	立会	江戸時代後期の包含層・石列（池状遺構か）。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成14年度』京都市文化市民局　2003年
71	室町殿跡	立会	検出なし。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報　昭和56年度』京都市文化観光局　1982年
72	室町殿跡	立会	室町時代の包含層、江戸時代の包含層。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　昭和55年度』埋文研　1981年
73	室町殿跡	立会	室町時代後期の包含層、時期不明の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』京都市文化観光局　1986年
74	室町殿跡・上京遺跡（旧室町殿跡を含む）	立会	江戸時代末期の整地層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成13年度』京都市文化市民局　2002年
75	室町殿跡	立会	盛土のみ。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成8年度』京都市文化市民局　1997年
76	室町殿跡	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成27年度』京都市文化市民局　2016年
77	室町殿跡	立会	江戸時代の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局　1987年
78	相国寺旧境内・室町殿跡	立会	焼土を含む江戸時代の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成16年度』京都市文化市民局　2005年
79	上京遺跡（旧室町殿跡）	詳細分布	室町時代の包含層、江戸時代前期の包含層、時期不明の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成22年度』京都市文化市民局　2011年
		詳細分布	中世の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和2年度』京都市文化市民局　2021年
80	上京遺跡（旧室町殿跡）	立会	平安時代末期の土坑。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成7年度』京都市文化観光局　1996年
81	上京遺跡（旧室町殿跡）	詳細分布	室町時代の包含層、時期不明の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成21年度』京都市文化市民局　2010年
		試掘	室町時代の整地層。	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成21年度』京都市文化市民局　2010年
82	上京遺跡（旧室町殿跡）	立会	近世の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成15年度』京都市文化市民局　2004年
83	上京遺跡（旧室町殿跡）	立会	検出なし。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』京都市文化観光局　1990年
84	上京遺跡（旧室町殿跡）	立会	江戸時代、室町時代の包含層。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報　昭和56年度』京都市文化観光局　1982年
85	上京遺跡（旧室町殿跡）	立会	掘削層現代層内にとどまる。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　昭和55年度』埋文研　1981年
86	上京遺跡（旧相国寺旧境内）	立会	江戸時代の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和58年度』京都市文化観光局　1984年
87	上京遺跡（旧室町殿跡）	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成29年度』京都市文化市民局　2018年
88	上京遺跡（旧室町殿跡）	試掘	時期不明の焼土層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』京都市文化観光局　1990年
89	上京遺跡	詳細分布	近世の包含層、時期不明の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和2年度』京都市文化市民局　2021年
90	上京遺跡（旧室町殿跡）	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成22年度』京都市文化市民局　2011年
91	上京遺跡	詳細分布	江戸時代の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成25年度』京都市文化市民局　2014年

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
92	室町殿跡	詳細分布	巡回時掘削終了。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 28 年度』京都市文化市民局　2017 年
93	上京遺跡 (旧室町殿跡)	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 24 年度』京都市文化市民局　2013 年
94	上京遺跡 (旧室町殿跡)	立会	江戸時代の包含層。	『京都市内遺跡立会調査報告　平成 20 年度』京都市文化市民局　2009 年
95	上京遺跡 (旧室町殿跡)	立会	室町時代の包含層、江戸時代の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 58 年度』京都市文化観光局　1984 年
96	上京遺跡 (旧室町殿跡)	立会	調査予定日以前に工事掘削及び基礎コンクリート終了にて調査不可能。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　昭和 55 年度』埋文研　1981 年
97	上京遺跡 (旧室町殿跡)	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 30 年度』京都市文化市民局　2019 年
98	上京遺跡 (旧室町殿跡)	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 30 年度』京都市文化市民局　2019 年
99	上京遺跡 (旧室町殿跡)	立会	室町時代中期、後期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成 13 年度』京都市文化市民局　2002 年
100	上京遺跡 (旧室町殿跡)	立会	検出なし。	『京都市内遺跡立会調査報告　平成 17 年度』京都市文化市民局　2006 年
101	上京遺跡 (旧室町殿跡)	立会	江戸時代の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 59 年度』京都市文化市民局　1985 年
102	上京遺跡 (旧室町殿跡)	立会	検出なし。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成 16 年度』京都市文化市民局　2005 年
103	上京遺跡 (旧室町殿跡)	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 30 年度』京都市文化市民局　2019 年
104	上京遺跡 (旧室町殿跡)	立会	時期不明の土坑。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成 2 年度』京都市文化市民局　1991 年
105	上京遺跡 (旧室町殿跡)	立会	近現代の土坑。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報　昭和 56 年度』京都市文化観光局　1982 年
106	上京遺跡 (旧室町殿跡)	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 30 年度』京都市文化市民局　2019 年
107	新町校地遺跡 (新町門衛所北部地点)	立会	詳細不明。	『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物 同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編Ⅱ』同志社大学校地学術調査委員会　1978 年
108	上京遺跡 (旧室町殿跡)	立会	近世遺構の包含層、江戸時代の包含層。	『京都市内遺跡立会調査報告　平成 19 年度』京都市文化市民局　2008 年
109	上京遺跡 (旧室町殿跡)	立会	検出なし。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成 16 年度』京都市文化市民局　2005 年
110	上京遺跡	立会	室町時代の包含層、江戸時代の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成 15 年度』京都市文化市民局　2004 年
111	本満寺の構え跡	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 25 年度』京都市文化市民局　2014 年
112	上京遺跡	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和 3 年度』京都市文化市民局　2022 年
113	上京遺跡 (旧室町殿跡)	詳細分布	室町時代の土坑、近世の包含層、時期不明の柱穴。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 27 年度』京都市文化市民局　2016 年
114	上京遺跡 (旧室町殿跡)	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 22 年度』京都市文化市民局　2011 年
115	上京遺跡	詳細分布	室町時代の落込み。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 29 年度』京都市文化市民局　2018 年
116	室町殿跡	試掘	室町時代の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 58 年度』京都市文化観光局　1984 年
117	上京遺跡	詳細分布	平安時代後期の包含層、室町時代の包含層、近世の包含層、時期不明の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 28 年度』京都市文化市民局　2017 年
		試掘	室町時代の溝状遺構の南肩、中世整地層。	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 28 年度』京都市文化市民局　2017 年
118	上京遺跡	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 22 年度』京都市文化市民局　2011 年
119	新町校地遺跡	立会	室町時代の包含層、時期不明の路面。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 63 年度』京都市文化観光局　1989 年
120	新町校地遺跡	立会	検出なし。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　昭和 54 年度』京都市文化観光局　1980 年
121	新町校地遺跡	立会	平安時代の包含層、中世の土坑。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成 7 年度』京都市文化市民局　1998 年
122	上京遺跡	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 25 年度』京都市文化市民局　2014 年

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
123	上京遺跡	立会	検出なし。	『京都市内遺跡立会調査報告　平成 19 年度』京都市文化市民局　2008 年
124	上京遺跡	詳細分布	近世以降の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 25 年度』京都市文化市民局　2014 年
125	上京遺跡 （旧相国寺旧境内）	立会	時期不明の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成 11 年度』京都市文化市民局　2000 年
126	上京遺跡	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 25 年度』京都市文化市民局　2014 年
127	上京遺跡 相国寺境内隣接地	立会	室町時代の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 57 年度』京都市文化観光局　1983 年
128	相国寺旧境内	立会	中世の遺物を含む池状堆積。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成 2 年度』京都市文化市民局　1991 年
129	相国寺旧境内	詳細分布	江戸時代後期・末期の包含層、時期不明の落込み。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 21 年度』京都市文化市民局　2010 年
130	上京遺跡	詳細分布	検出なし。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 30 年度』京都市文化市民局　2019 年
131	相国寺旧境内・ 室町殿跡	立会	室町時代中期の包含層、江戸前期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成 14 年度』京都市文化市民局　2003 年
132	相国寺旧境内・ 室町殿跡	立会	鎌倉時代の落込み、室町時代の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成 15 年度』京都市文化市民局　2004 年
133	御所八幡町・玄武町 （地下鉄今出川駅地点）	調査	奈良時代のピット、室町～江戸時代の井戸・土坑・溝・石列・礫敷などを検出。	『同志社構内地下鉄烏丸線今出川駅地点の発掘調査』同志社大学校地学術調査委員会 1981 年
134	相国寺門前町 （今出川キャンパス整備第1次～第3次）	調査	鎌倉時代の溝、室町～江戸時代の礎石建物・井戸・土坑・石敷などを検出。	『相国寺旧境内発掘調査報告書 今出川キャンパス整備に伴う発掘調査第 1 次～第 3 次 同志社大学歴史資料館調査研究報告第 10 集』同志社大学歴史資料館　2010 年

埋文研→財団法人京都市埋蔵文化財研究所（2013 年以降は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所）

第Ⅲ章　調査成果

１　基本層序（図版１～４）

基本層序は現代層を含めて上位から９層に区分した。

第１層　灰白色砂礫、にぶい黄褐色砂泥などによる現代整地層である。調査区北西部で最上位に堆積する灰白色砂礫は、調査直前に敷設されたものである。層厚0.2～0.4ｍで、調査区全域に分布する。

第２層　暗褐色砂泥、灰黄褐色泥砂、にぶい黄褐色泥砂、黒褐色泥砂などによる近代整地層である。層厚0.2ｍ前後で、調査区全域に分布する。

第３層　黒褐色・暗褐色砂泥などによる江戸時代後半の整地層である。層厚0.2ｍ前後で、調査区全域に分布する。本層上面から切り込む遺構には、幕末～明治初頭の遺物が含まれる。

第４層　暗褐色砂泥・泥砂、黒褐色砂泥などによる江戸時代の整地層である。本層上面から切り込む遺構には、18世紀後半の遺物が含まれる。層厚0.2ｍ前後で調査地ほぼ全域に分布する。

第５層　暗褐色砂泥、黒褐色砂泥、褐色砂泥などによる江戸時代の整地層である。層中に炭・焼土が含まれ、部分的に火災処理と思われる炭・焼土を敷き均した箇所がある。調査区西部では、上位に褐色シルトによる層厚0.1ｍ程で敷設された化粧土が残る。

第６層　黒褐色砂泥、暗褐色砂泥、褐色シルトなどによる江戸時代の整地土である。本層上面を第１面として調査を実施し、江戸時代前半の遺構を検出した。調査区西部を中心に、褐色シルトによる化粧土が残る。調査区南部では第７層との間に暗褐色砂泥による間層があり、それは第６ｂ層とした。第６層上面で成立する遺構は17世紀前半～中頃に属し、第６ｂ層上面で成立する遺構は17世紀前半に属する。

第７層　暗褐色砂泥、黒褐色砂泥による安土桃山～江戸時代初頭の整地層である。調査区のほぼ全域に分布するが、東半部は後世の遺構により多くが消失している。本層上面を第２面とし、室町時代末～江戸時代初頭（16世紀後半～17世紀初頭）の遺構を検出した。

第８層　黒褐色砂泥・泥砂、暗褐色砂泥による室町時代後半の整地層である。本層上面を第３面とし、室町時代後半（16世紀代）の遺構を検出した。

第９層　灰黄褐色砂泥、黒褐色砂泥、灰黄褐色粗砂、暗褐色粗砂、黒色シルトなどによる地山である。調査区の大部分は砂礫、粗砂層が分布するが、東区中央では黒色シルトが帯状に分布している。

２　検出遺構

今回の調査では第６層上面（第１面）、第７層上面（第２面）、第８層上面（第３面）、地山上面（第４面）の４面で調査を行い、平安時代末～江戸時代前半の遺構を検出した。検出した遺構数は、合計で200を超える。以下に、各面で検出した遺構について記述する。

（１）第１面の遺構（図版５）

礎石列、石組、埋甕、土坑を検出した。礎石列は調査区西部に集中し、調査区中央から東部は火

表２　遺構概要表

時代	遺構	備考
鎌倉時代	土坑 425・427・428	
室町時代	柱列 429、礎石列 361、溝 405、石室 324、井戸 402、礫敷 358、整地 326・401、土坑 321・322・325・350・403・409	
安土桃山～江戸時代	地業 201・202・261・262、塼列 203、礎石列 110 ～ 112、石組 28・29、埋甕 50、炉 56、土坑 10・26・234・235・236・237・238・251・252・256、土取坑 222・223・226、火災処理坑 42・44・47・49・58	

災処理坑や廃棄坑とみられる土坑が多くみられる。第１面で検出した遺構は17世紀前半～中頃に属するが、上位層である第４・５層から切り込む17世紀後半以降に属する遺構も同一面で検出している。

礎石列110（図６）

西区で検出した東西方向の礎石列である。検出長7.2ｍを測る。礎石86・87・89・104・90・91・92からなり、礎石間は1.0ｍ前後を測る。礎石には30㎝程の石が用いられ、平坦面を上面として据え置かれる。軸線は座標軸から北西－南東方向に1.4°振れる。礎石列110の東延長線上は地業202と塼列203の間であることから、町家の敷地境界に設けられた塀跡の可能性を考える。

礎石列111（図６）

西区で検出したＬ字状の礎石列である。礎石94・96～98が東西方向に並び、西端に配された礎石98から南に折れ礎石102・103が並ぶ。検出長は、東西5.0ｍ、南北2.2ｍである。礎石間は概ね0.9ｍであるが、礎石94・96及び98・102間は1.2ｍを測る。軸線は座標軸から北西－南東方向に1.5°程度振れる。

礎石列116（図６）

礎石列111東西列の同一線上で検出した礎石列である。礎石85・115・88からなる。検出長3.0ｍで、礎石85・115間は1.2ｍ、礎石115・88間は1.8ｍを測る。礎石には20㎝前後のやや小振りな石が用いられている。軸線は座標軸から約１°北西－南東方向に振れる。礎石列110と同様に町家の敷地境に設けられた塀跡の可能性を考える。

礎石列112（図５）

西区南西部で検出した東西方向の礎石列である。検出長2.4ｍを測る。礎石81～83からなり、礎石間は1.2ｍを測る。礎石83は花崗岩を加工した礎石が用いられる。礎

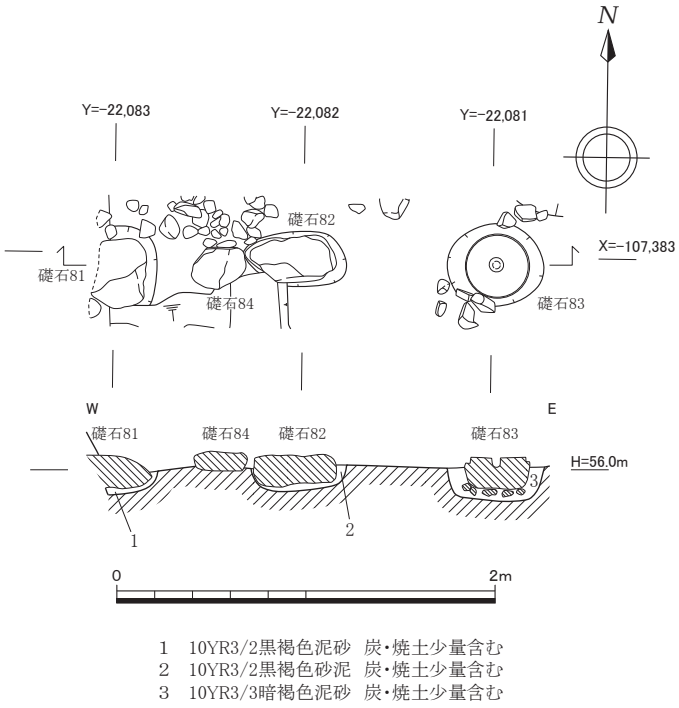


図５　礎石列112平面断面図（１：40）

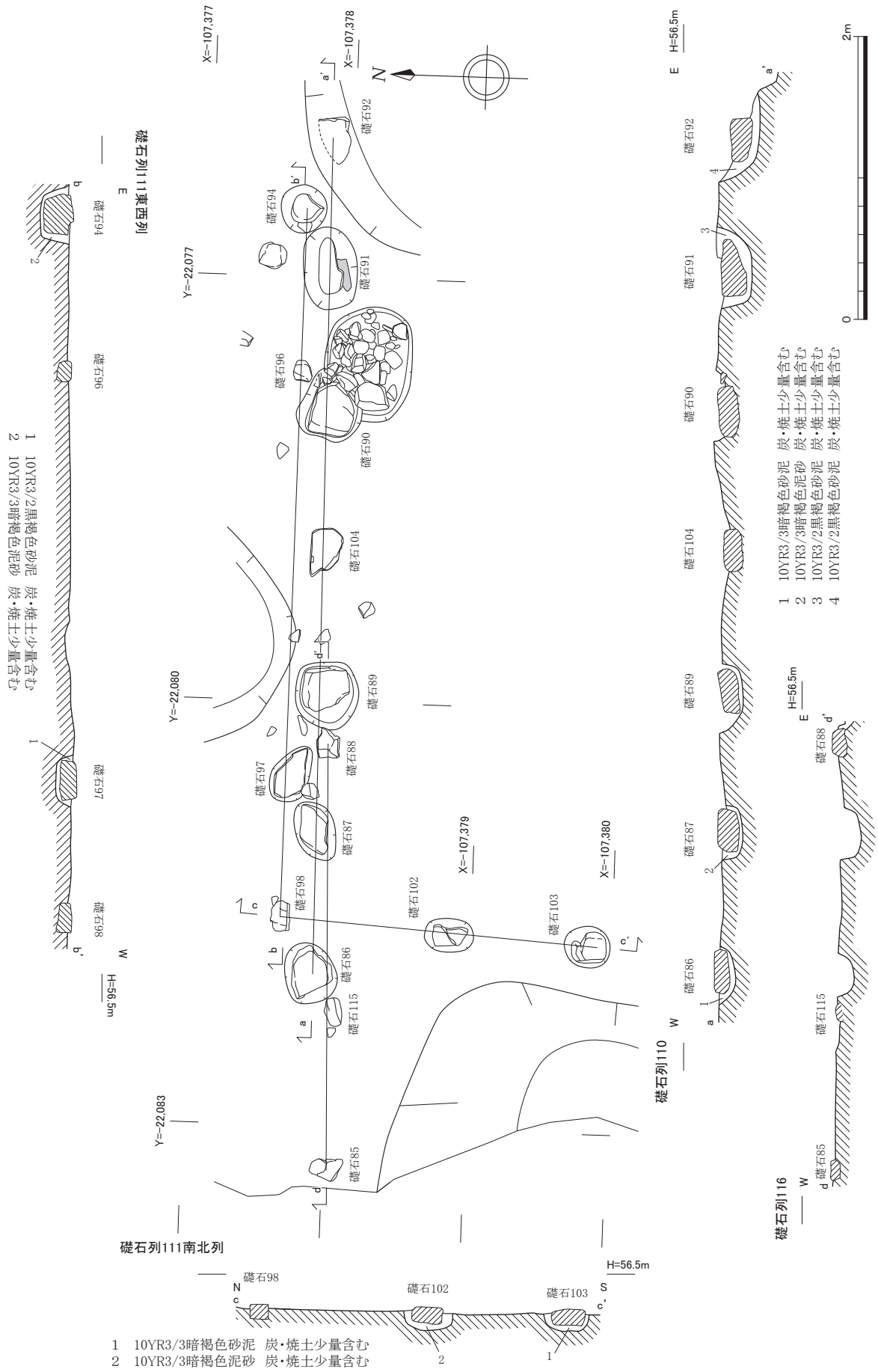


図6　礎石列110・111・116平面断面図（1：40）

石列の東延長線上は地業201と塼列203の間であることから、敷地境に設けられた塀跡の可能性が考えられる。

炉56（図７）

西区南部で検出した炉とみられる土坑状の遺構である。現代の井戸により西側が切られる。外周に石積を構築した後に須佐の混じる暗褐色泥砂を底面に敷設し、擂鉢状の炉を構築する。底面は硬化しており、これは被熱によるとみられるが、赤色化はほぼしていない。底面は炉の南半に残り、北半の大部分は削平を受け消失している。炉底面除去後に検出した石積は南面及び西面南部に残存し、他面は残存していない。南面には石積の外側に４枚の塼による塼列がみられるが、他面には存在しない。炉56の北・東側は大きな攪乱を受けていないことから、構築時に南面のみ塼列を設けたと考える。

石組28（図８）

東区南東部で検出した平面円形の石組である。現代井戸に西面、土坑に東面掘形を切られる。石組の内径は0.6ｍ前後、検出面からの深さは0.34ｍを測る。湧水層まで掘り込まれていないことから、井戸ではなく水溜などの施設と考えられる。石組は40㎝前後の石が用いられ、３段残存する。掘形は、平面円形を呈し、径1.26ｍを測る。石組内から12Ｂ段階の土師器皿Ｓが完形に近い状態で複数出土した。その他、施釉陶器、染付、焼締陶器、瓦、塼などが出土している。出土遺物の年代観から、本来は第４層もしくは第５層上面で成立する遺構と考えられる。

石組29（図８）

東区西部で検出した平面円形の石組である。埋甕50を切る。石組の内径は0.6ｍ前後、検出面からの深さは0.32ｍを測る。湧水層まで掘り込まれていないことから、井戸ではなく水溜などの施設と考えられる。石組には川原石が用いられ、２段残存する。遺物は18世紀代とみられる土師器、施釉陶器、染付、焼締陶器、瓦、焼けた壁土が出土している。出土遺物の年代観から、第４層もしくは第５層上面で成立する遺構と考えられる。

埋甕50（図８）

東区西部で検出した埋甕である。備前の大甕を埋設する。南東部を石組29に切られる。甕肩部まで残り、それより上位は壊され甕内に埋土と共に堆積していた。甕内埋土は暗褐色・黒褐色・にぶい黄褐色砂泥などである。埋土から甕口縁部の他に、時期不明の土師器が少数出土している。

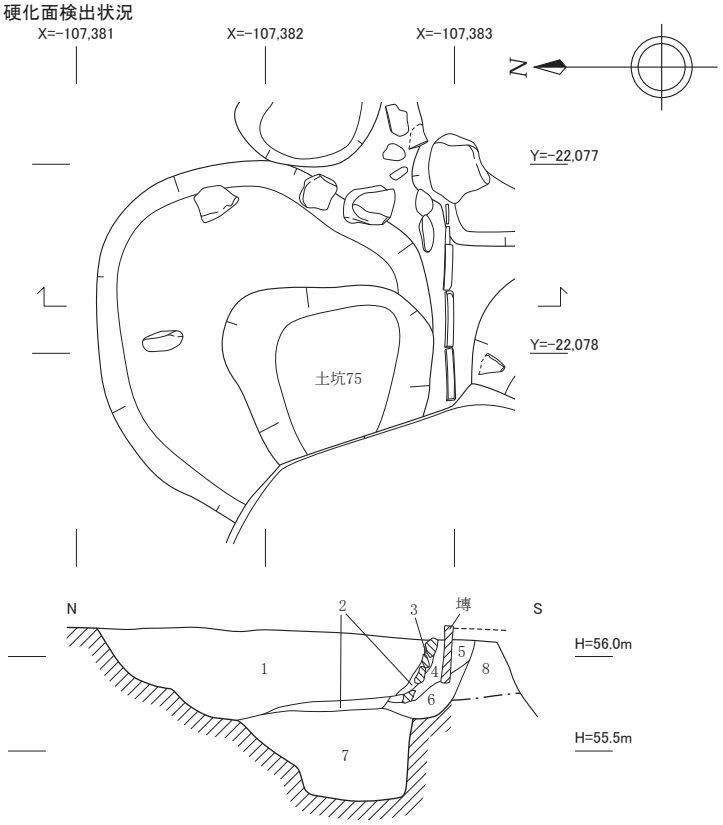
土坑45

Ｂ６・７区で検出した土坑である。土坑の西面を検出しており、大部分は調査区外に位置すると考えられる。平面形は不整円形を呈する。埋土は暗褐色・黒褐色砂泥で、炭・焼土を多く含む。遺物は11Ｂ段階の土師器と共に施釉陶器、染付、瓦質土器、瓦が出土している。

土坑22・42・44・47・49・58

調査区中央から東部にかけて、火災処理坑とみられる炭・焼土を多量に含む土坑を複数検出した。平面形は不整方形を呈するものが多く、肩口からほぼ垂直に掘り込まれる。検出面からの深さは0.5ｍ前後のものが大半であるが、土坑44は0.9～1.0ｍの深さがある。遺物は11Ｂ～Ｃ段階の時

硬化面検出状況



1　10YR2/3黒褐色砂泥　炭・焼土多量含む
2　10YR3/4暗褐色泥砂　焼けて硬化する　スサ混じる
3　10YR3/3暗褐色泥砂　炭・焼土多量含む
4　10YR4/4褐色シルト
5　10YR3/3暗褐色泥砂　炭・焼土少量含む
6　10YR4/4褐色シルト
7　10YR3/2黒褐色砂泥　10YR3/2黒褐色粗砂含む　炭少量含む［土坑75］
8　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭・焼土含む［第6層］

石組検出状況

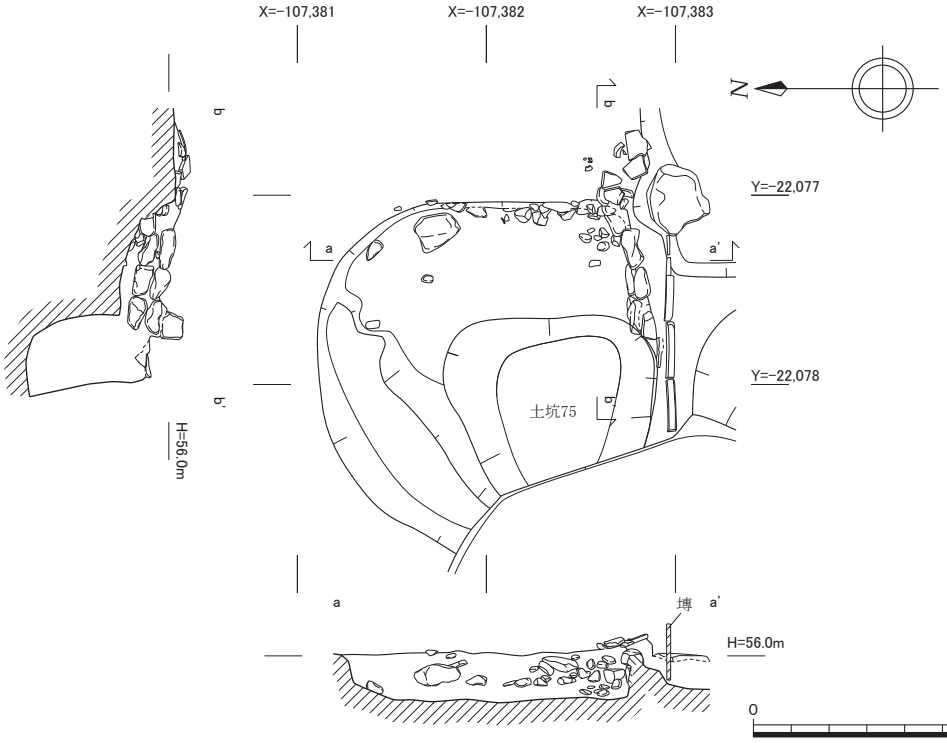
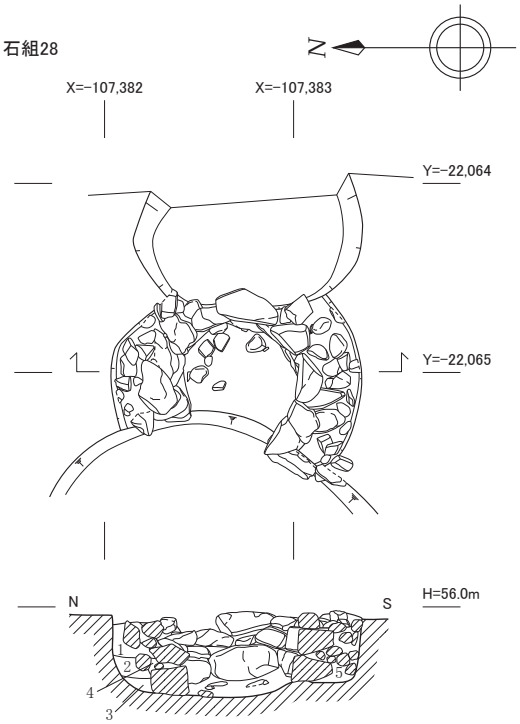


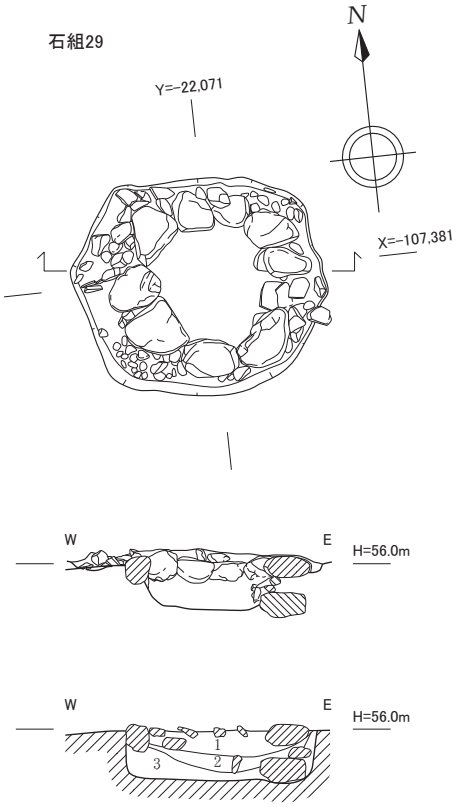
図７　土坑56平面断面立面図（１：40）

石組28



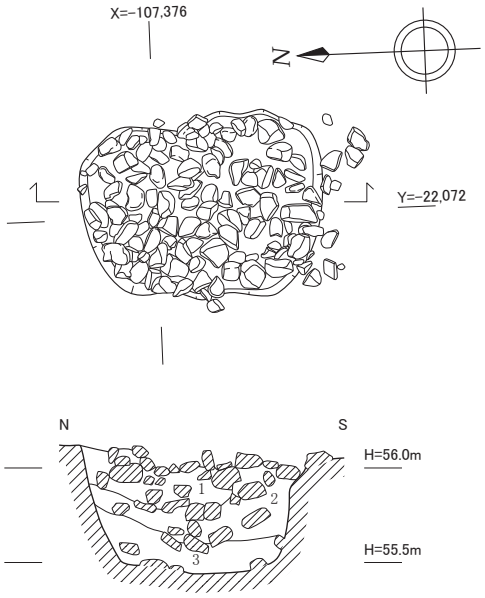
1　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土少量含む
2　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土含む
3　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土含む
4　10YR2/2黒褐色粘土
5　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土少量含む

石組29



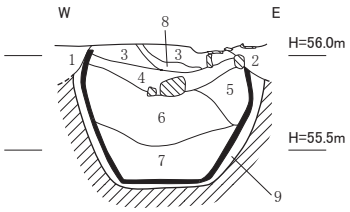
1　10YR3/2黒褐色泥砂　漆喰多量含む
2　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土少量含む
3　2.5Y5/4黄褐色シルト

土坑26



1　10YR3/3暗褐色泥砂　焼土・炭含む
2　2.5Y5/4黄褐色粘質土
3　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土　焼土・炭含む

埋甕50



1　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土粒含む［土坑51］
2　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土粒少量含む［石組29掘形］
3　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土多量含む
4　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土多量含む
5　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　粘性強い　炭少量含む
6　10YR4/4褐色シルト　炭少量含む
7　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　10YR4/2灰黄褐色砂泥含む
8　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥ブロック
9　10YR4/2灰黄褐色砂泥［埋甕50掘形］

図８　石組28・29、土坑26、埋甕50平面断面立面図（１：40）

期に属する遺物が大半で、土師器、施釉陶器（唐津、志野、織部）、焼締陶器、瓦質土器、土製品、瓦、塼、金属製品などが出土している。施釉陶器、焼締陶器については、茶陶関係の遺物も多い。

土坑10

東区東部で検出した東西方向に長い溝状を呈する土坑である。遺構の西端部は攪乱され、検出長2.8ｍ、幅1.0～1.1ｍを測る。底面は丸みを帯び、検出面からの深さは0.3ｍを測る。埋土は上位から黒褐色砂泥、暗褐色泥砂で、炭・焼土を含む。遺物は11Ｂ段階の土師器皿が多く出土し、その他に施釉陶器、瓦が出土している。

土坑26（図８）

東区北西部で検出した土坑である。平面方形を呈し、長軸1.25ｍ、短軸0.86ｍを測る。断面形は箱型を呈し、検出面からの深さは0.66ｍを測る。埋土は上位から暗褐色泥砂、黄褐色砂泥、にぶい黄褐色砂泥である。土坑の上位に径10～20㎝の礫が多量に含まれ、沈下防止のため充填されたものと考えられる。遺物は江戸時代前半とみられる土師器、焼締陶器、染付が出土している。

（２）第２面の遺構（図版６）

地業、塼列、土坑を検出した。地業、塼列は土蔵の基礎と考えられ、ほぼ同位置での切り合いも確認できる。調査区中央で南北に並んだ状態で検出した。調査区の全域で大小の土坑を検出しているが、炭・焼土を多く含む火災処理坑、土取坑、詳細不明なものなどがある。また、礫を多く含む土坑もみられる。

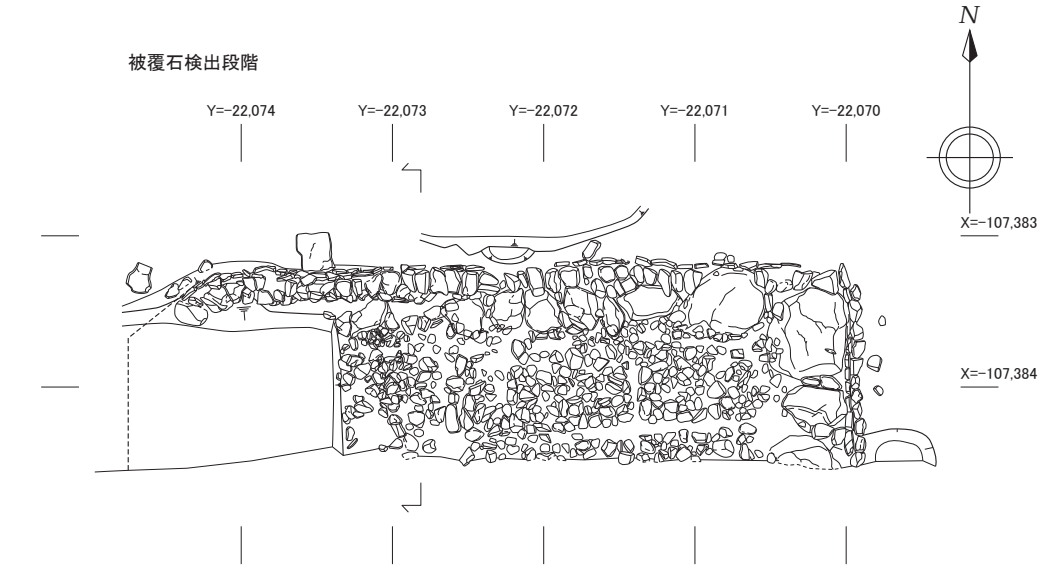
地業201（図９）

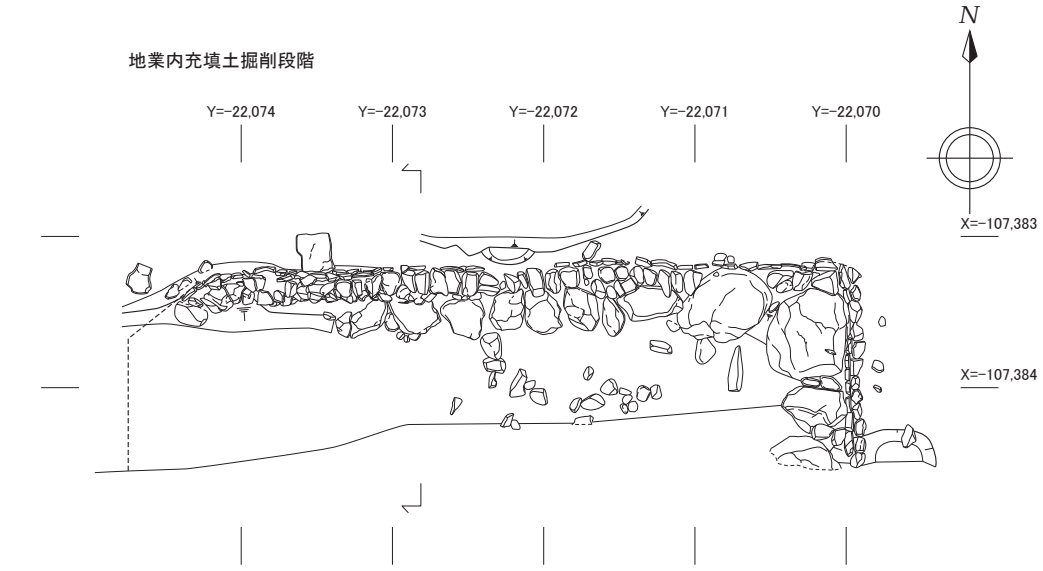
調査区中央の南壁付近で検出した石組地業である。南面は調査区外に位置し、西面は攪乱を受ける。平面形は方形を呈し、北西隅は斜めに隅切りをする。検出規模は東西4.8ｍ、南北1.4ｍを測る。

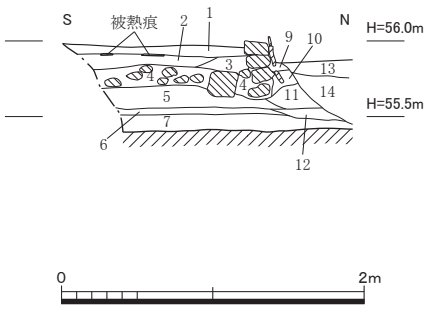
地業の構造は、外面に石組を方形に巡らせ、石組の外側には瓦・焼締陶器片を立て並べている。北東隅部では長さ50～60㎝、幅30～45㎝、厚さ40～50㎝の他より大きな石材が用いられている。地業の四隅は大きな石材を配置し、その間を20～30㎝大の礫を２列に並べることにより基底部を構築したと考えられる。基底部上面は第７層上面とほぼ一致しており、当初第７層上面で成立した土蔵の地業の上位に石積を設け、第６層による整地を行った際にも同位置に土蔵が建てられたと考えられる。石組内面には黒褐色砂泥・暗褐色泥砂を充填させ、10～20㎝大の礫が充填土上面に敷き詰められ、これは地覆石とみられる。礫敷には幅10cm程で直線的に礫の抜けている箇所があり、ここには転ばせ根太が配されていたと考えられる。地覆石の上位には湿気抜きとみられる炭化物層があり、その上位に褐色シルトによる土間が敷設される。土間の厚さは0.15ｍ前後であるが、２・３層に細分でき、各層上面に被熱痕や炭層が確認できることから、火災による焼失と再建が数回行われたと考えられる。

地業202（図10）

調査区中央の北壁付近で検出した石組地業である。平面方形を呈し、土蔵の地業と想定される。地業の北半は調査区外に位置し、東・西面は後世の土坑により攪乱される。調査区北壁で確認した







1　10YR5/6黄褐色シルト　炭・焼土含む
2　10YR5/4にぶい黄褐色シルト　炭・焼土多量含む
上面の一部に被熱痕
3　10YR3/4暗褐色砂泥　炭・焼土多量含む
［貼床］

4　10YR3/2黒褐色砂泥　炭含む
5　10YR3/3暗褐色泥砂
炭非常に多量含む　焼土粒含む
［地業内充填土］

6　10YR4/4褐色シルト
7　10YR3/3暗褐色砂泥　10YR3/3暗褐色粗砂少量含む
［第7b層］

8　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土粒少量含む
9　10YR4/4褐色泥砂　焼土多量含む
10　10YR4/4褐色シルト
焼土粒・10YR4/3にぶい黄褐色砂泥含む
11　10YR3/2黒褐色泥砂　炭含む
［地業201掘形］

12　10YR4/4褐色シルト　炭多量含む［第7b層］

13　10YR3/3暗褐色泥砂　炭・焼土多量含む
14　10YR3/4暗褐色砂泥　炭・焼土含む
［土坑218］

図９　地業201平面断面図（１：50）

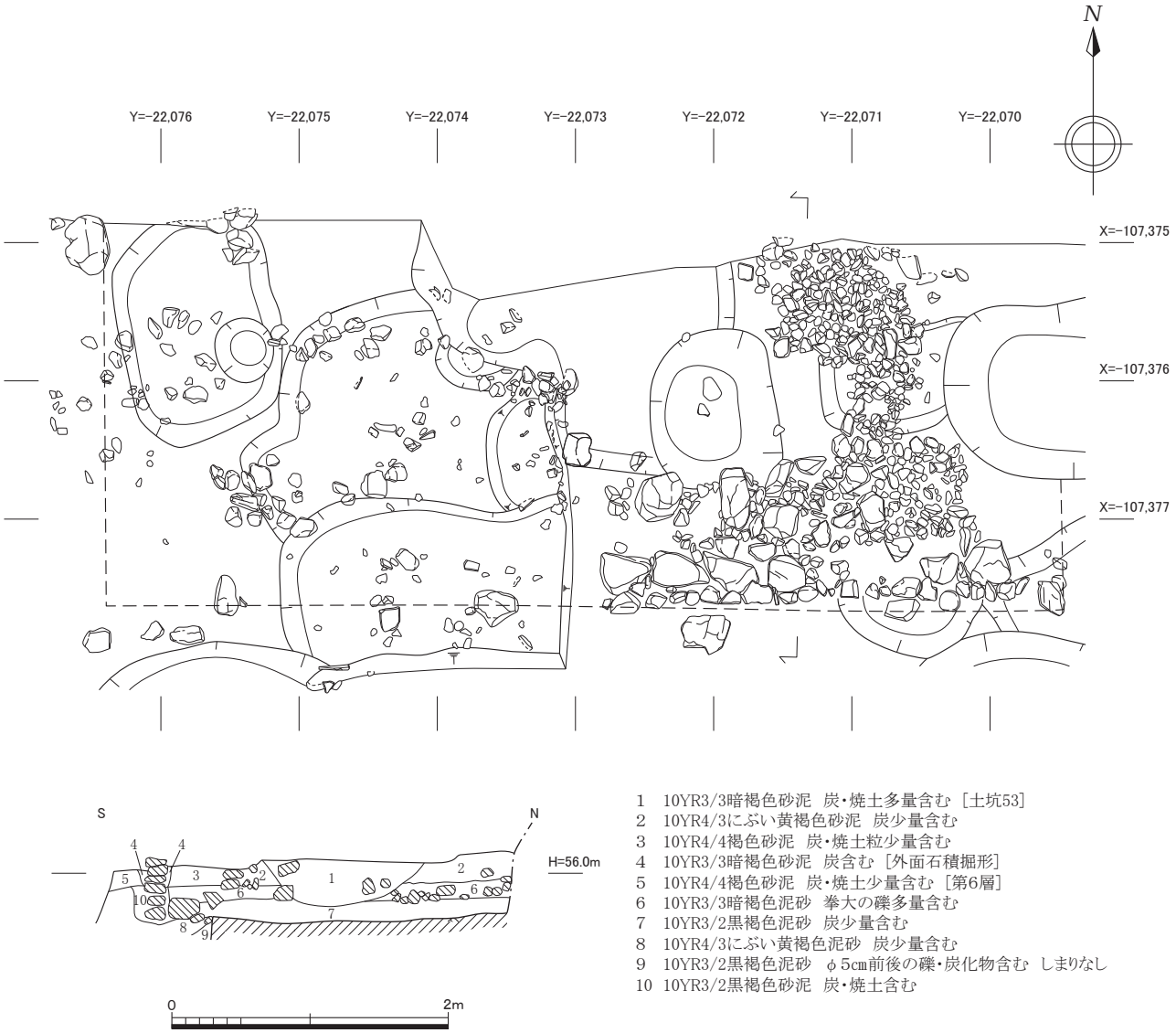
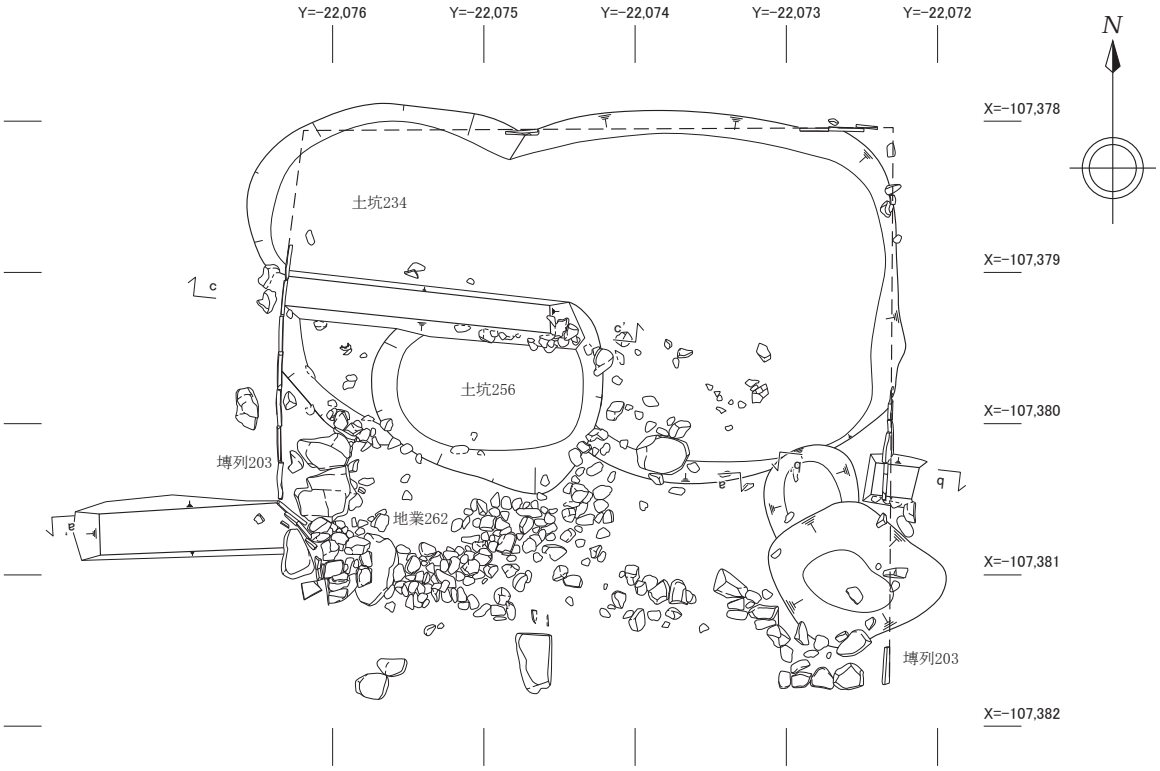


図10　地業202平面断面図（1：50）

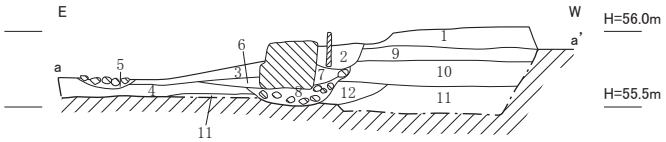
50～60㎝大の石は土蔵入口に据え置かれたものと考えられ、石東面に地業西面は接するものと考えられる。地業東面は、Y＝-22,069.5ｍ付近と思われ、地業201東面とほぼ面が揃うものと考える。また、東半部は石組・地覆石共に残りが比較的良好だが、西半は強く攪乱され礫が散らばった状況となっている。

地業の構造は、外面に15～20㎝の礫による５～６段の石積が廻り、石積内側の基底部に30～40㎝大の石を並べている。地業内側には束石の可能性がある30～40㎝大の石がいくつか残り、束柱もしくは転ばせ根太の基底になっていたと考えられる。地業内は黒褐色砂泥が充填され、その上位に地覆石とみられる10～20㎝大の礫による礫敷が存在する。礫敷の上位に、褐色・にぶい黄褐色砂泥による土間が敷設される。

セクションによる断面観察では、南外面石積掘形が上半部は第６層上面から、下半部は第７層上面から切り込むことが確認できることから、地業201と同じく第７層上面で建造された土蔵地業を第６層上面時においても利用していると考えられる。

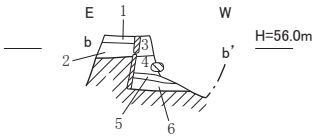


塼列203、地業262西面セクション（南）



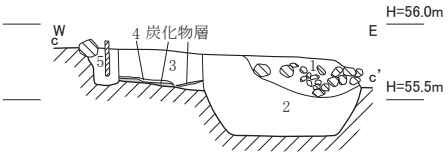
1　10YR3/3暗褐色泥砂　炭・焼土含む［第6b層］
2　10YR3/2黒褐色泥砂　炭・焼土少量含む　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂含む［塼列203掘形］
3　10YR3/2黒褐色泥砂　炭・焼土少量含む
4　10YR3/3暗褐色泥砂
5　10YR3/3暗褐色泥砂　φ5〜8cmの小石多量含む
6　10YR3/3暗褐色砂泥　10YR4/4褐色砂泥粒含む
［地業262石組内充填土］
7　10YR3/3暗褐色砂泥
8　10YR2/2黒褐色砂泥　φ3〜5cmの小石多量含む
［地業262石組掘形］
9　110YR3/3暗褐色泥砂　炭・焼土・10YR4/4褐色砂泥少量含む
10　10YR3/2黒褐色泥砂　炭・焼土・10YR4/4褐色砂泥含む
［第7層］
11　10YR3/2黒褐色泥砂　炭・焼土少量含む［第8層］
12　10YR2/2黒褐色砂泥

塼列203東セクション



1　10YR5/3にぶい黄褐色砂泥　炭・焼土粒少量含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭・焼土含む
［第6層］
3　10YR4/2灰黄褐色砂泥　炭・焼土少量含む
4　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土含む
5　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土多量含む
6　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土少量含む
［塼列203内充填土］

塼列203西面、土坑234・256セクション



1　10YR3/4暗褐色砂泥　炭・焼土含む　φ3〜15cmの小石含む
2　10YR3/3暗褐色泥砂　炭少量含む　焼土粒多量含む
［土坑256］
3　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土粒含む
4　5YR4/6赤褐色焼土
［土坑234］
5　10YR3/2黒褐色泥砂　10YR4/4褐色シルト含む［塼列203掘形］

図11　塼列203、地業262、土坑234・256平面断面図（1：50）

塼列203（図11）

調査区中央で検出した塼列である。一辺23～25㎝、厚さ３㎝前後の塼が用いられ、北・東・西の３面にコの字状に配される。南西隅部は一度内側に屈曲させており、その外側には束石とみられる石が据え置かれる。規模は、北面4.1ｍ、東面3.7ｍ、西面3.1ｍを測り、東西面の長さは一定では無い。後世の土坑により塼が抜き取られる箇所が多く、北面は東端と中央付近で僅かに残るのみである。東面中程は塼が２段となっていることから、構築当初は全ての面が２段であったと考えられるが、北・西面では１段のみ残存する。南西部は後述する地業262の外面に位置しており、調査段階では別遺構と考えていたが、地業262の外周に塼列を配した可能性も考えられ、地業262と同一遺構であるかもしれない。

地業261（図12）

調査区中央南壁沿いの地業201と重なる位置で検出した石組地業である。地業北面は地業201北面の北側に位置し、西面は地業201中央付近に位置する。南面は調査区外に位置し、東面は後世の土坑により消失する。20～40㎝大の石を帯状に並べ、石列の外面は焼締陶器片を立てて並べている。地業内から出土した遺物は９Ｃ～10Ａ段階に属するものが大半であるが、これらは下層遺構からの混入であると考えられる。

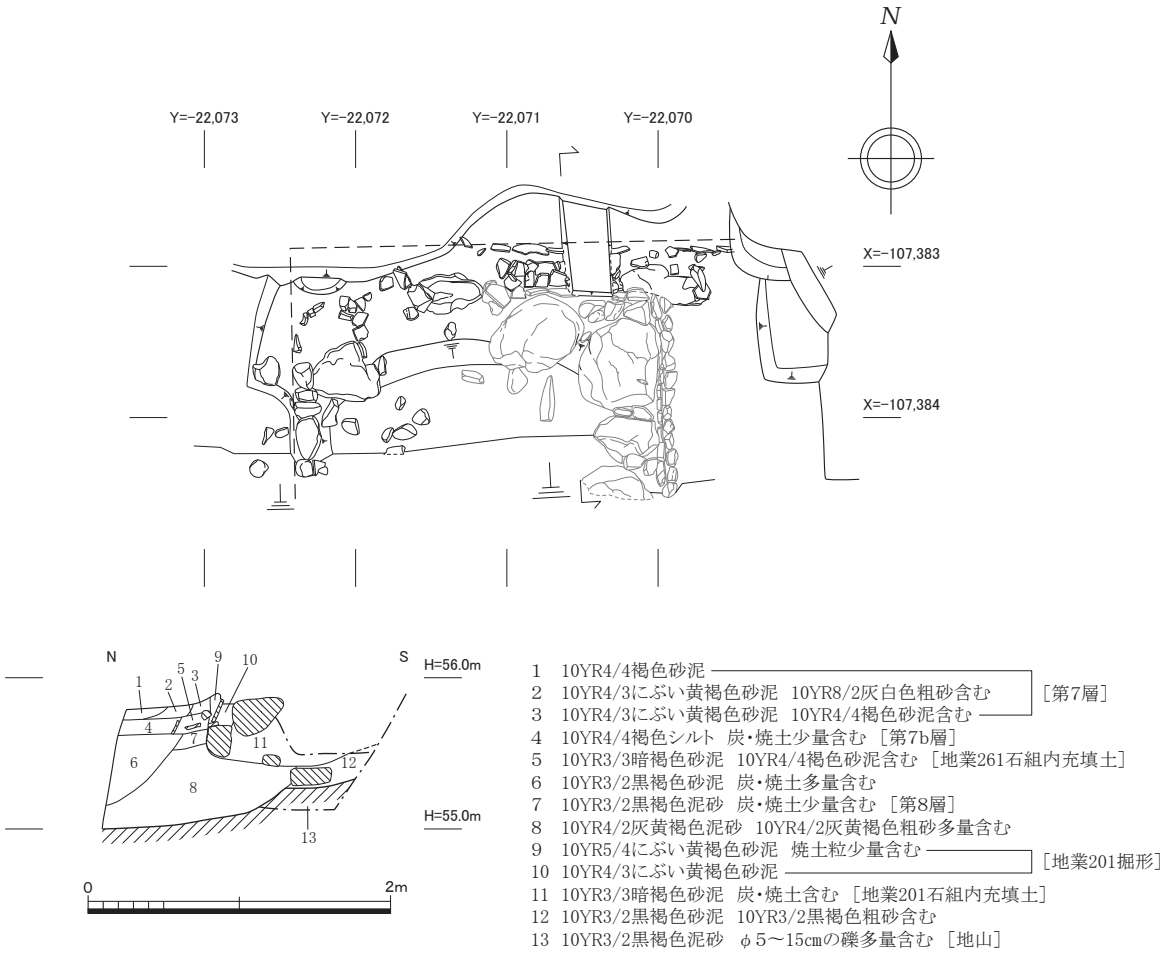


図12　地業261平面断面図（１：50）

地業262（図11）

塼列203の内側で検出した石組地業である。方形に廻る地業の南西部を検出したものと考えられ、大部分は後世の土坑により攪乱され消失している。南西隅部は30～40㎝大の比較的大きな石が用いられ、隅部には20～30㎝大の礫による石列が接続する。地業の内側には10～15㎝大の集石が上位にあり、この集石は地覆石と考えられる。塼列203でも記述したが、塼列203と地業262は同一建物の基礎である可能性もある。

土坑236・237・238・251

西区北西部で検出したピット状の土坑で各土坑の北半部は調査区外に位置する。径0.8～1.0ｍ、検出面からの深さは0.15～0.25ｍを測る。東西方向に直線的に並び、土坑236・237間は2.4ｍ、土坑237・251間は2.1ｍを測る。土坑238と251は切り合っており、238が251を切る。各土坑には10～20㎝大の礫が多く含まれており、礎石列の根固めの可能性も考えられる。

土坑225（図13）

東区東部で検出した土坑である。10～20㎝大の礫を多量に含む。平面形は丸みを帯びた方形を呈し、長軸1.2ｍ、短軸0.9ｍを測る。検出面からの深さは0.25ｍを測り、底面は丸みを帯びる。埋土は黒褐色砂泥で、炭を含む。遺物は11Ａ段階の土師器と共に瓦質土器、白磁が出土している。

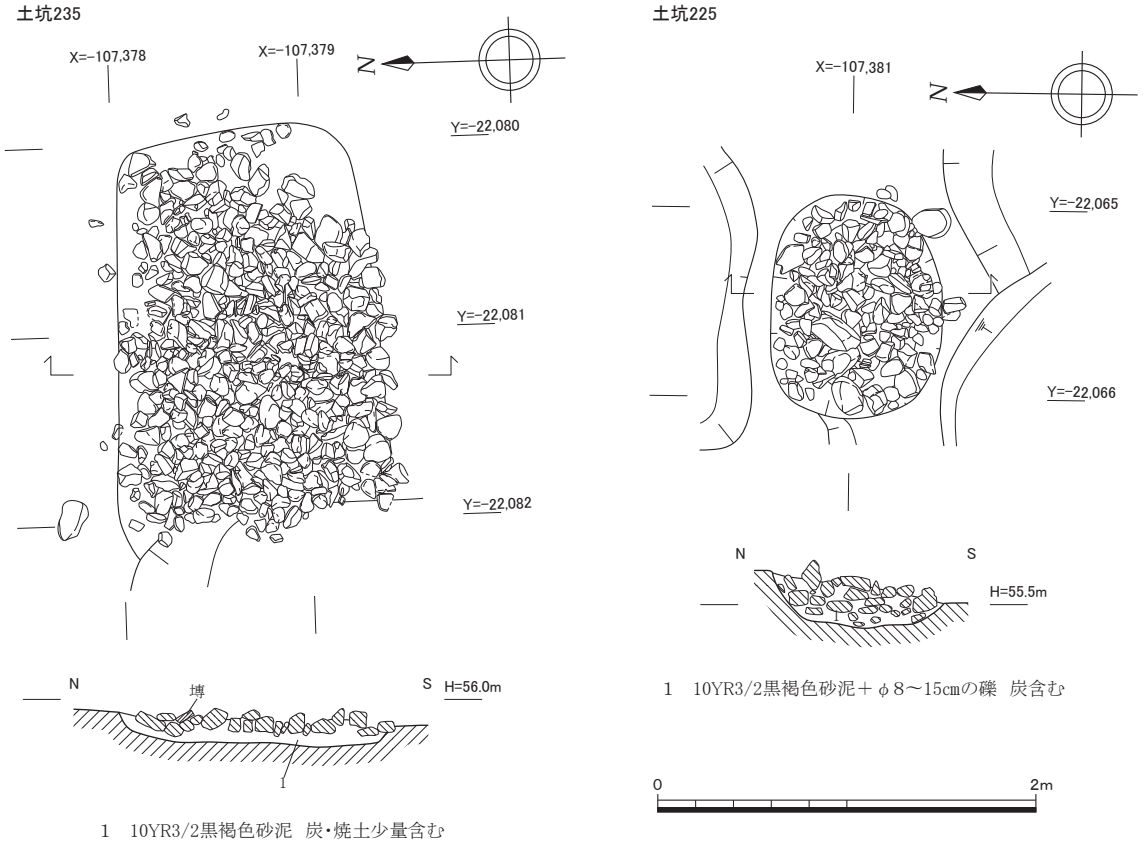


図13　土坑235・225平面断面図（1：40）

土坑235（図13）

西区西部で検出した平面方形を呈する土坑である。土坑の上位に10～20㎝大の礫が非常に多く含まれる。長軸2.2ｍ、短軸1.5ｍを測る。検出面からの深さは0.2ｍを測り、底面は平坦である。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。遺物は10Ｃ段階の土師器と共に瓦器、青磁、焼締陶器、施釉陶器、瓦、塼が出土している。

土坑227

東区中央付近で検出した平面不整円形を呈する土坑である。長軸1.75ｍ、短軸1.65ｍを測る。肩口からほぼ垂直に掘り込まれ、検出面からの深さは1.3ｍを測る。石組などは残っていないが、地山である砂礫層を掘りぬいていることから、井戸であった可能性も考えられる。埋土は灰黄褐色砂泥で、土坑の下位に10～20㎝大の礫が多く含まれる。遺物は11Ａ段階の土師器と共に、焼締陶器、瓦、塼が出土している。

土坑222・223・226・231・232

東区で検出した土坑群である。東区中央付近で地山が黒色シルトである地点に位置しており、土取坑と考えられる。平面形は不整方形を呈し、黒色シルト直下の砂礫層付近まで掘り込まれる。埋土は暗褐色・黒褐色砂泥で、炭・焼土を多く含む。遺物は10Ｃ～11Ａ段階の土師器と共に、瓦器、青磁、焼締陶器、施釉陶器、瓦、塼が出土している。

土坑218

東西区にかけて検出した平面不整形を呈する土坑である。詳細は不明であるが、埋土に炭・焼土が多く含まれることから、火災処理坑の可能性が考えられる。長軸4.37ｍ、短軸2.12ｍを測る。地業261を切る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは1.12ｍを測る。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を含む。11Ａ段階の土師器と共に染付、瓦が出土している。

土坑256

西区東部で検出した平面楕円形を呈する土坑である。長軸1.53ｍ、短軸1.21ｍを測る。肩口からやや傾斜をつけて掘り下げられ、底面は平坦である。埋土は暗褐色砂泥で、上位に３～15㎝大の礫を含み、下位に焼土を多く含む。埋土に焼土を多く含むことから、火災処理坑の可能性が考えられる。遺物は11Ａ段階の土師器と共に、焼締陶器、瓦器、瓦が出土している。

土坑234

西区東部で検出した平面不整円形を呈する土坑である。土坑東部は、第１面の土坑42に切られている。土坑の輪郭が残る南北長は2.21ｍを測る。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは0.3ｍ前後を測る。埋土は暗褐色砂泥で、底面付近に厚さ0.05ｍ程の炭層と焼土層が存在する。遺物は10Ｃ段階の土師器と共に、青磁、焼締陶器、瓦器、瓦質土器、瓦、焼けた壁土が出土している。

（３）第３面の遺構（図版７）

礎石列、溝、石室、礫敷、土坑を検出した。礎石列、石室、礫敷は東区に位置し、西区では土坑のみ検出した。西区では小規模な土坑を複数検出しているが、性格が不明なものが多い。

礎石列361（図14）

東区北部で検出した東西方向の礎石列である。検出長6.2ｍで、軸線は座標軸から南西－北東方向に2.9°振れる。西から礎石360・359・330・329・328・326・333が0.6～1.5ｍの間隔で並ぶ。礎石は30～40㎝大のものや20㎝前後のものなどがあり、同一箇所で作り替えがあったものと考えられる。

溝335

西区南部で検出した東西溝である。後世の土坑に切られるため、東区では検出していない。第３面で検出したが、11Ａ段階の遺物が出土することから、第２面の遺構であった可能性が高い。幅0.5ｍ前後を測り、軸線はほぼ座標軸と同様である。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.35ｍを測る。埋土は黒褐色泥砂で、炭・焼土を多く含む。遺物は11Ａ段階の土師器と共に、焼締陶器、瓦質土器、瓦、塼が出土している。

石室324（図15）

東区北部で検出した平面方形を呈する石室である。北面が土坑321・322に切られるため南北方向の長さは不明であるが、東西方向は掘形の幅1.38ｍ、石組内法1.05ｍを測る。石組は２～３段残存し、検出面からの深さ0.32ｍを測る。遺物は掘形から10Ａとみられる土師器と共に瓦質土器、塼が出土し、石組内埋土からは10Ａ段階の土師器と共に、白磁、焼締陶器、瓦質土器が出土している。

礫敷358

東区で検出した径5～10㎝大の小礫による礫敷である。土坑322に北側を切られ、検出規模は東西1.2ｍ、南北0.6ｍである。周囲には30～50㎝大の礎石とみられる石が据えられており、建物などの周囲に敷設されたものと考えられる。

土坑321（図15）

東区北壁沿いで検出した土坑である。遺構の北側は、調査区外に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、肩口から斜めに掘り込まれる。拳大の礫により埋め戻され、沈下を防止するためと考えられる。遺物は10Ｂ段階の土師器と共に焼締陶器、瓦質土器、瓦、焼けた壁土などが出土している。

土坑325

東区北東隅部で検出した土坑である。遺構の北・東面は調査区外に位置するが、平面形は方形を呈すると考えられる。肩口からほぼ垂直に掘り下げられ、底面は平坦である。埋土は暗褐色砂泥で、10～15㎝大の礫を多く含む。遺物は10Ｂ段階の土師器と共に焼締陶器、瓦質土器、白磁が出土している。

土坑307

東区西部で検出した土坑である。大部分を他の遺構に切られているが平面形は方形を呈すると考えられ、長軸2.4ｍ、短軸1.2ｍを測る。肩口からほぼ垂直に掘り下げられ、底面は平坦である。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を多く含む。遺物は10Ａ段階の土師器と共に、青磁、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、瓦、坩堝が出土している。

土坑350（図15）

西区北部で検出した土坑である。平面形は東西に長い楕円形を呈し、長軸1.28ｍ、短軸0.88ｍを

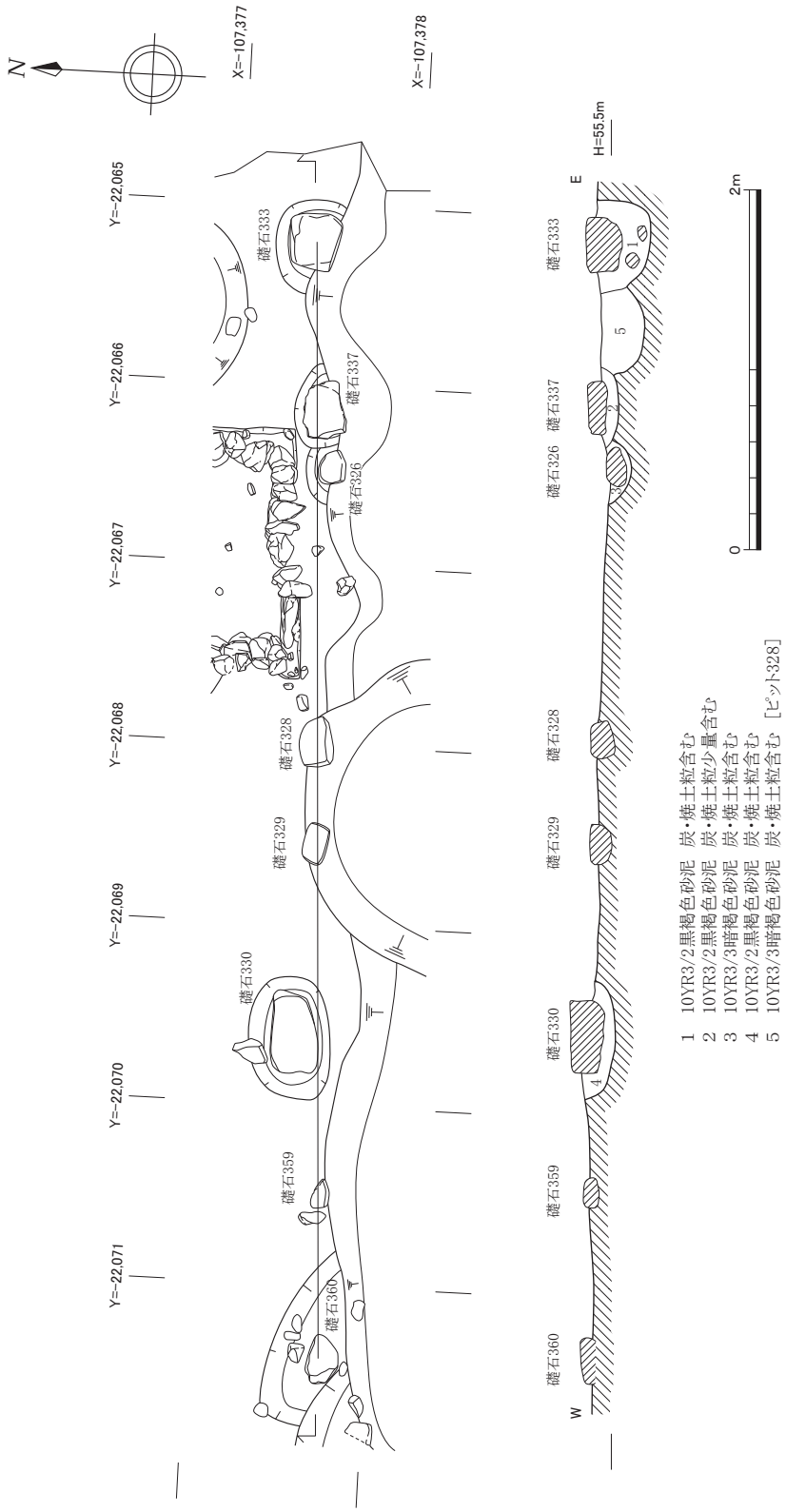
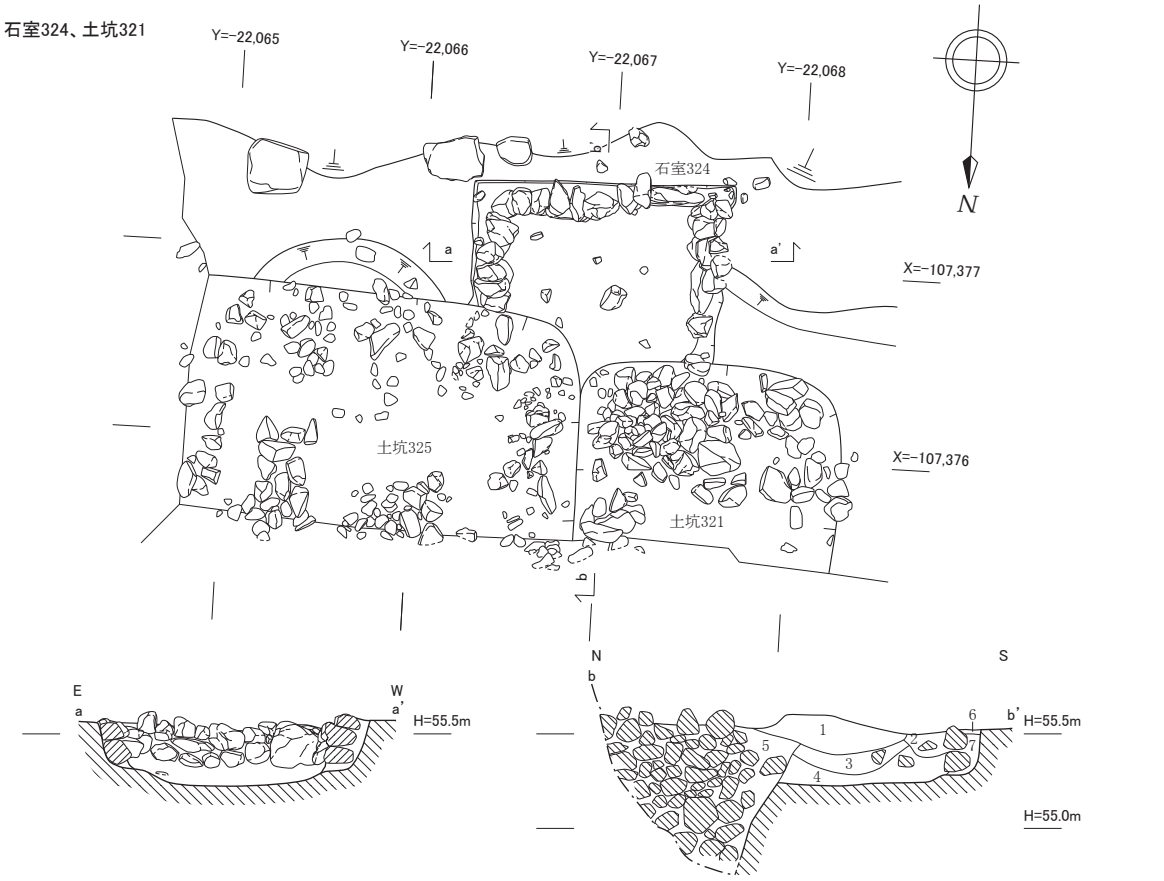
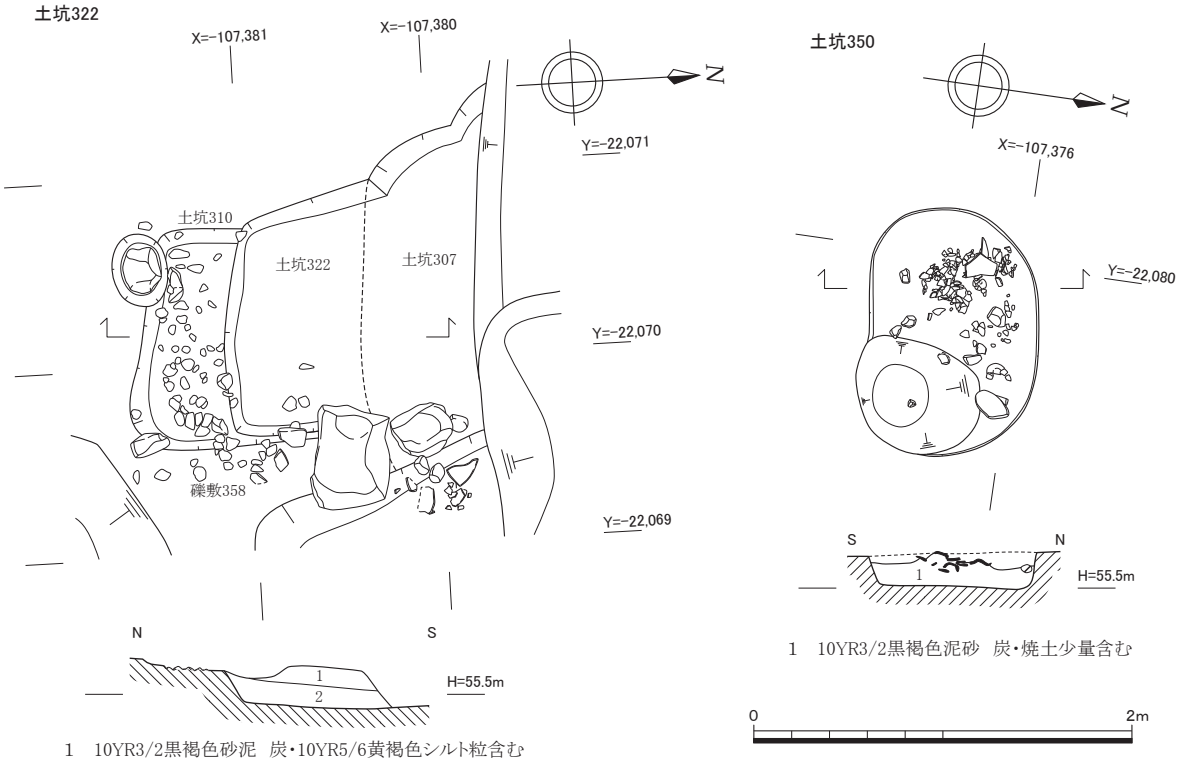


図14　礎石列361平面断面図（1：40）



1　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土粒含む［土坑313］
2　10YR2/2黒褐色泥砂　炭・焼土粒含む
3　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭・焼土粒・10YR3/2黒褐色砂泥粒含む　［石室324］
4　10YR4/2灰黄褐色砂泥　炭少量含む
5　10YR3/3暗褐色砂泥＋拳大の礫［土坑321］
6　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土粒多量含む
7　10YR4/2灰黄褐色砂泥　［石室324掘形］



1　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土粒含む
2　10YR2/2黒褐色砂泥　炭・10YR5/6黄褐色シルト粒含む

1　10YR3/2黒褐色泥砂　炭・焼土少量含む

図15　石室324、土坑321・322・350平面断面立面図（1：40）

測る。断面形は箱型を呈し、検出面からの深さは0.2ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。埋土の上位から10Ａ段階の土師器皿を中心とした遺物がまとまって出土した。

土坑322（図15）

東区西部で検出した土坑である。遺構の北面を土坑307に切られ、南面の上位を土坑310に切られる。平面形は不整方形を呈し、南北幅は土坑307に切られるため不明であるが、東西幅1.26ｍを測る。肩口から斜めに掘り下げられ、底面は平坦である。埋土は黒褐色砂泥で、炭・黄褐色シルト粒を含む。遺物は10Ａ段階の土師器と共に、瓦質土器が出土した。

（４）第４面の遺構（図版８）

溝、柱列、井戸、整地、土坑、柱穴を検出した。東区では、上層の遺構による攪乱のため遺構面が消失している箇所が多く、西区－東区西半に遺構は集中する。室町時代後半（15世紀後半）に属するものが大半であるが、西区北部では平安時代末～鎌倉時代初頭（12世紀後半）の土坑を検出した。

溝405（図16）

調査区北壁付近で検出した東西溝である。幅1.0ｍ前後を測り、座標軸にほぼ並行して調査区東壁から西壁まで一直線に延びる。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.3～0.6ｍを測る。Ｙ＝-22,068ｍの東西で底面レベルが異なり、東側が54.80ｍ、西側が55.15ｍと約0.3ｍの差がある。埋土は黒褐色砂泥・泥砂である。遺物は９Ｃ段階の土師器と共に、焼締陶器、瓦が出土している。

溝405は室町殿北端を限る溝の可能性も考えられ、本調査地より東側で実施された同志社大学寒梅館の調査（第Ⅱ章の調査２）では上立売通から約５ｍ南の位置に溝405とほぼ同規模の溝13・14・15が検出されている。溝405はこれらの延長であることも考えられるが、溝13～15の延長線から溝405は溝１条分南にずれる。また、溝13～15が14世紀代と想定されるのに対し、溝405は15世紀後半と時期に開きがあり、溝13～15との関係については検討の必要がある。

柱列429（図17）

西区南部で検出した東西方向の柱列である。柱穴416～422からなり、柱穴417・418間は攪乱により柱穴が３基程度消失していると思われる。検出長7.0ｍで、柱間は0.6～0.9ｍを測る。座標軸から北東－南西方向に約1.7°振れる。

井戸402

東区で検出した井戸である。井戸枠は残存しないが、検出面より約1.5ｍ掘り下げた段階でも底面を検出していないことから、井戸であると判断した。検出面から0.6ｍ下位までは炭・焼土・径５㎝前後の小礫が混ざる黒褐色砂泥が堆積し、以深は径10～20㎝大の礫が充填され、黒褐色泥砂が少量含まれる。遺物は９Ｃ段階の土師器と共に青磁・施釉陶器・焼締陶器・瓦質土器・瓦・塼が出土している。

整地401（図16）

調査区北壁及び西壁沿いで検出した整地である。暗褐色・黒褐色砂泥により、３～20㎝大の礫を多く含む。断面の観察では、第８層を0.2ｍ程度掘り下げ、礫を多く含む暗褐色・黒褐色砂泥によ

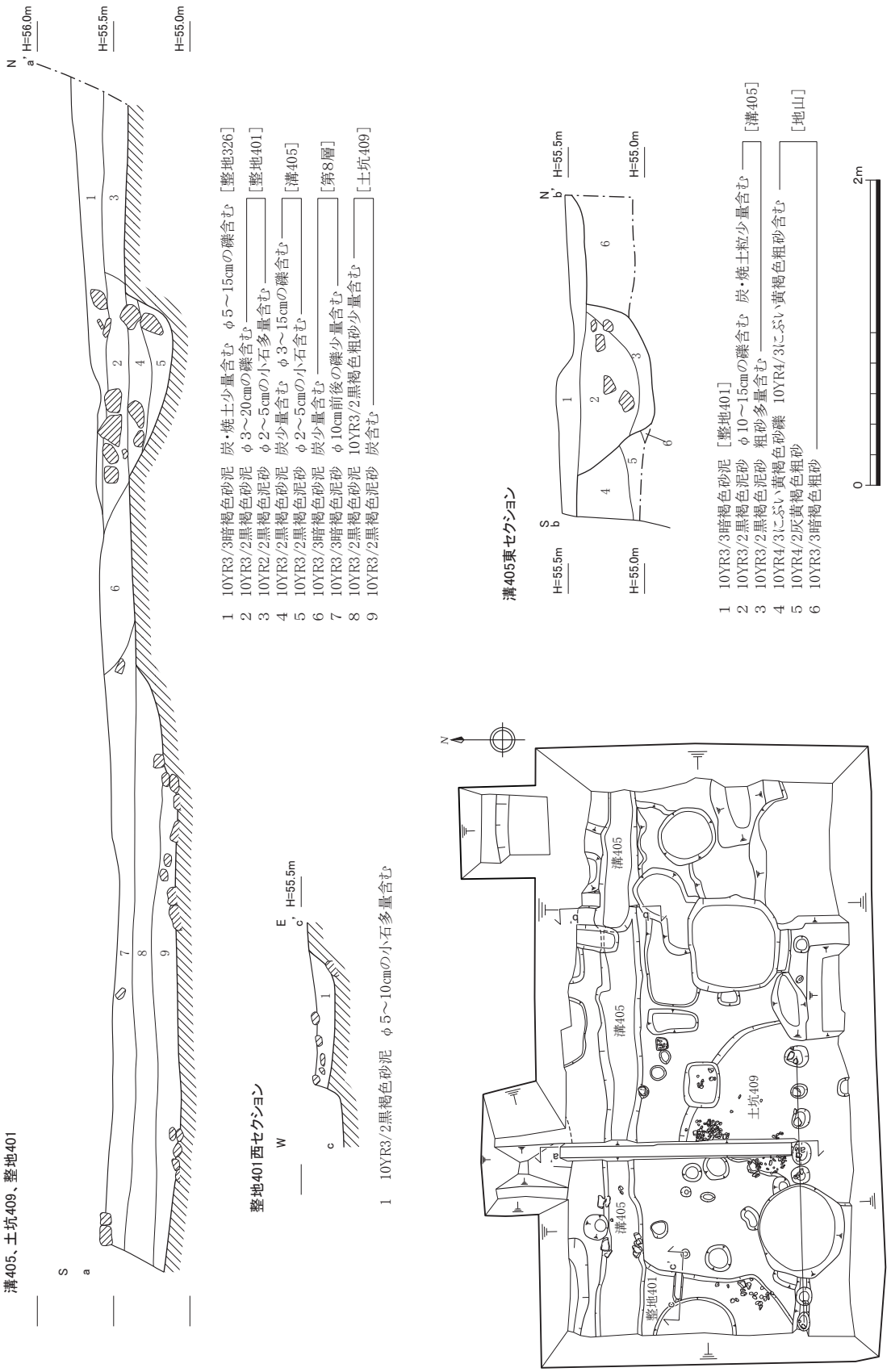


図16　溝405、土坑409、整地401断面図（1：40）

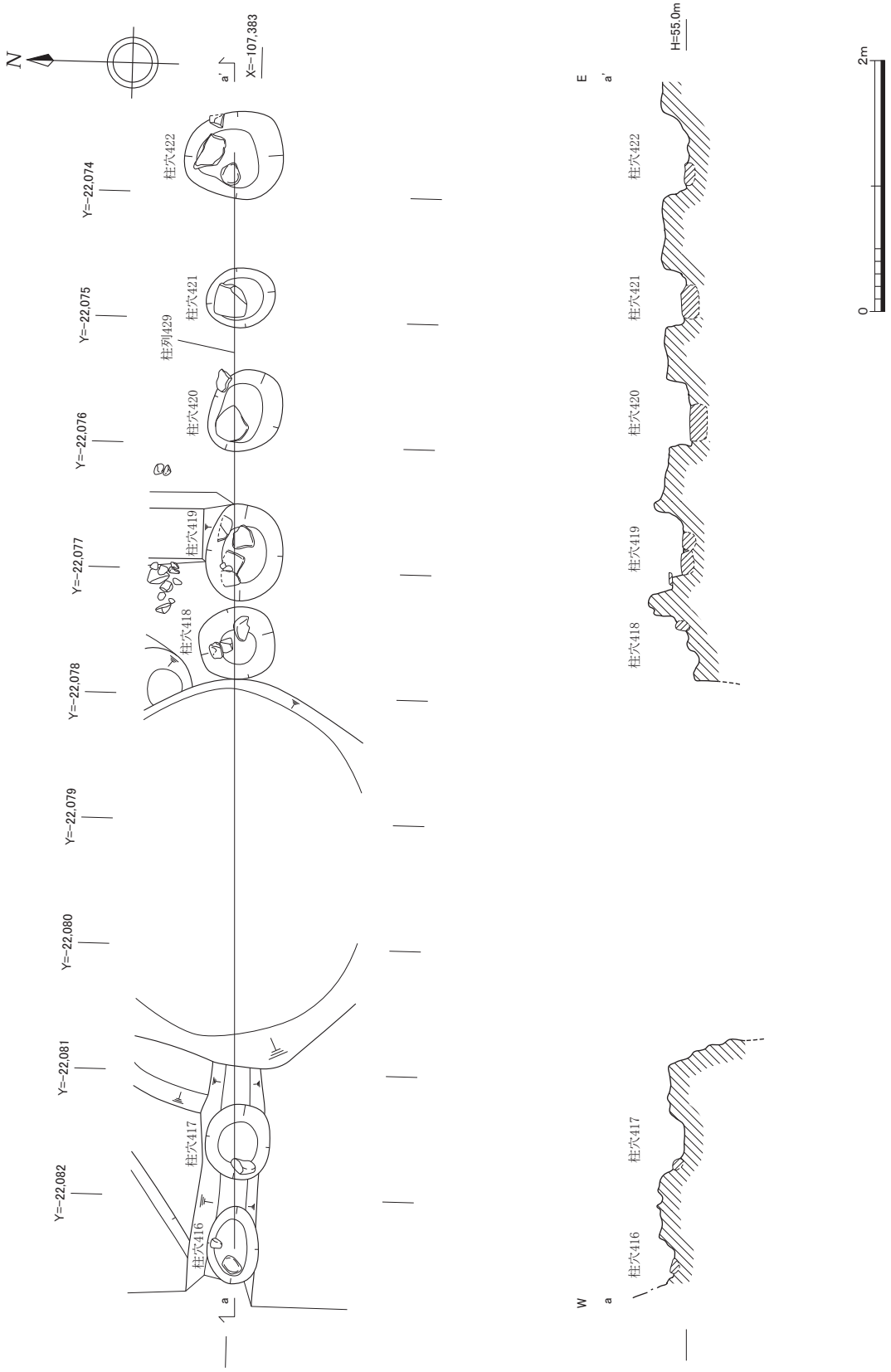


図17　柱列429平面断面図（1：50）

る整地を行ったと考えられる。本整地土は、溝405埋没後その上位に堆積している。検出段階では本調査地の東で実施された同志社大学寒梅館調査（調査２）で検出された築地塀地業と同様のものの可能性を考えたが、調査２で検出された地業と比べ礫の密度が低く、塀地業とすることは難しいと考えたことから整地であると判断した。整地401からは10Ａ段階の土師器と共に焼締陶器、瓦質土器、染付、瓦などが出土していることから、16世紀前半に行われた整地と考えられる。

土坑403

東区北部で検出した平面不整方形を呈する土坑である。南北に長い長方形を呈し、遺構北端部は調査区外に位置する。検出長1.4ｍ、幅0.8ｍを測る。検出面からの深さは0.25ｍを測り、底面はやや丸みを帯びる。溝405北肩の一部を切っており、溝405埋没後に成立したと考えられる。遺物は10Ａ段階の土師器と共に、青磁、白磁、染付、施釉陶器、焼締陶器、瓦、塼が出土している。

土坑425

西区北西隅部で検出した土坑である。遺構の南肩ラインのみ検出しており、全体の平面形や規模は不明である。断面形は調査区外へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色砂泥で、炭を含む。遺物は６Ａ段階の土師器が出土している。

柱穴

西区の溝405以南で複数の柱穴を検出したが建物や柵としてはまとまらなかった。柱穴は径0.3ｍ前後で深さ0.2ｍ前後を測る。埋土は黒褐色砂泥である。

（５）東西拡張区の遺構（図版８）

調査の最終段階で、室町殿北辺の塀地業や溝などの有無を確認するため、北側の２箇所を拡張した。それぞれ地山上面まで掘り下げ遺構検出を行った結果、室町殿に関する遺構は検出できなかったが、平安時代末～鎌倉時代初頭の土坑を検出した。

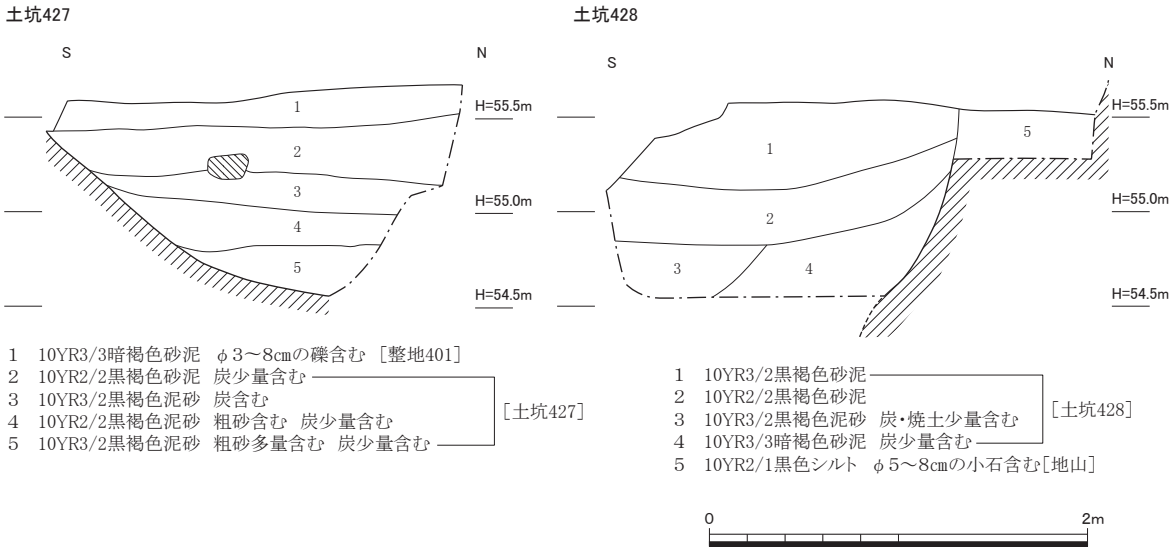


図18　土坑427・428断面図（１：40）

土坑427（図18）

西拡張区で検出した土坑である。土坑の南肩を検出しており、その他は調査区外に位置する。肩ラインから斜めに掘り下げられ、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは0.9ｍを測る。埋土は、上位が黒褐色砂泥、下位は黒褐色泥砂である。遺物は６Ａ段階の土師器、瓦器が出土している。

土坑428（図18）

東拡張区で検出した土坑である。遺構の北肩は検出したが、南肩については検出位置まで上位堆積土を掘り下げることができなかった。拡張前の東区内では南肩を検出していないので、未掘削となった箇所に位置するものと考えられる。肩ラインからほぼ垂直に掘り下げられ、検出面から1.0ｍ程度掘り下げたが底面は確認できず、安全面からそれ以上掘り下げることはできなかった。遺物は６Ａ段階の土師器が出土している。

３　出土遺物

遺物はコンテナ62箱出土している。遺物の時期は、室町時代後半、安土桃山～江戸時代前半に属するものが大半で、平安時代末～鎌倉時代初頭に属するものが少数存在する。遺構に伴う遺物ではないが、平安時代の遺物がごく僅かに存在する。

表３　遺物概要表

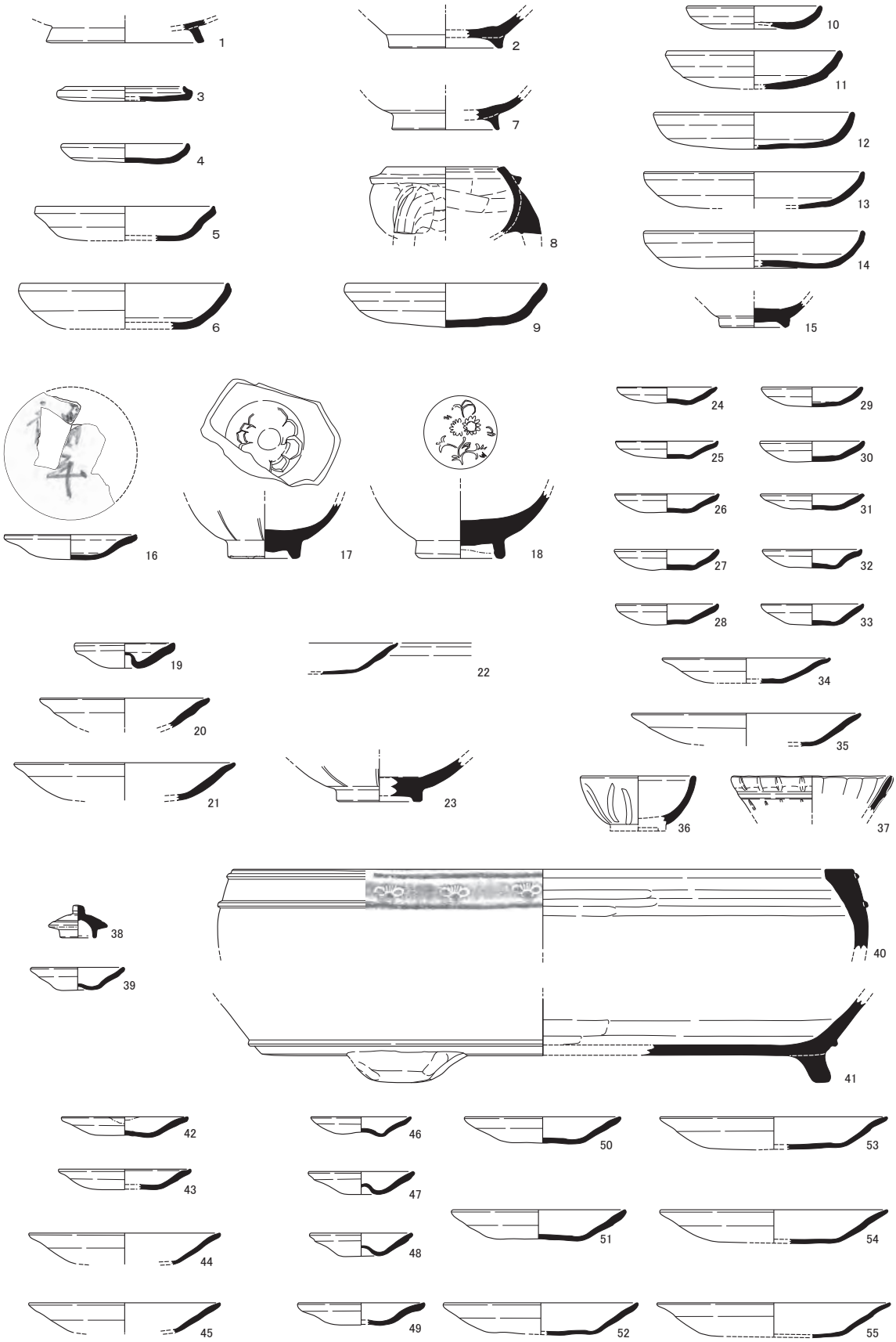
時代	内容	コンテナ数	Ａランク点数	Ｂランク点数	Ｃランク箱数
平安時代	緑釉陶器、山茶碗、軒平瓦		緑釉陶器１点、山茶碗１点、軒平瓦２点		
鎌倉時代	土師器、瓦器、山茶碗		土師器10点、瓦器１点、山茶碗２点		
室町時代	土師器、青磁、白磁、染付、焼締陶器、瓦質土器、土製品、銭貨		土師器46点、青磁13点、染付１点、施釉陶器２点、瓦器１点、瓦質土器８点、焼締陶器３点、軒丸瓦２点、軒平瓦３点、銭貨４点、金属製品１点		
安土桃山～江戸時代前半	土師器、施釉陶器、染付、瓦質土器、焼締陶器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼、土製品、金属製品、石製品		土師器38点、施釉陶器13点、白磁１点、染付６点、瓦質土器１点、焼締陶器５点、土製品２点、塼１点、鋳造関連２点、金属製品１点、石製品１点		
合計		62箱	172点（７箱）	０点	55箱

（１）土器・陶磁器類

（ａ）平安時代（図19）

平安時代の遺物は後世の遺構や整地層から極少量が出土した。

１は緑釉陶器椀もしくは皿の底部。外下方に張り出す幅の狭い輪高台を貼り付ける。胎土はにぶい黄橙色で硬質。オリーブ灰色の釉薬を全面に施す。２は山茶碗の底部。外下方に張り出す断面逆三角形の高台を貼り付ける。12世紀の所産。



1:土坑230　2:土坑317　3～8:土坑428　9:土坑425　10～15:土坑427
16～18:土坑409　19～23:溝405　24～37:土坑403　38～41:土坑351
42～45:石室324　46～55:土坑350

図19　出土遺物－1（1：4）

（ｂ）平安時代末～鎌倉時代（図19）

土坑428（３～８）

土師器（３～６）、山茶碗（７）、瓦器（８）がある。

土師器は皿ＡＣ（３）と皿Ｎ（４～６）がある。皿ＡＣ（３）は口径8.0㎝、器高1.0㎝。口縁部を内側に強く折り込む。皿Ｎは小型皿（４）と大型皿（５・６）がある。４は口径8.4㎝、器高1.4㎝。口縁部は緩く湾曲し、端部は上方で丸くおさめる。５は口径12.0㎝、器高2.3㎝。口縁部はナデにより屈曲気味に外反し、端部は上方に尖り気味に立ち上がる。６は14.0㎝、器高3.1㎝。口縁部は緩く湾曲して外上方に立ち上がり、端部は尖り気味に上方に立ち上がる。

７は山茶碗の底部である。外下方に張り出す断面逆三角形の高台を貼り付ける。高台径7.0㎝。

８は瓦器のミニチュア三足羽釜。口径8.0㎝。体部は丸みを持ち、上半は内傾する。口縁端部は面を持ち、口縁部下方に断面三角形の鍔を貼り付ける。

土坑428出土遺物は、土師器皿が６Ａ段階にあてられ、12世紀後半～末に属する。

土坑425（９）

９は土師器皿Ｎである。口径13.2㎝、器高3.0㎝の大型皿。口縁部はナデにより屈曲気味に外上方に立ち上がり、端部は尖り気味に上方に立ち上がる。６Ａ段階にあてられ、12世紀後半～末に属する。

土坑427（10～15）

土師器（10～14）、山茶碗（15）がある。

土師器は皿Ｎで、小型皿（10）と大型皿（11～14）がある。10は口径8.9㎝、器高1.6㎝。口縁部は緩く湾曲して上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。11～14は口径11.6～14.7㎝、器高2.5～2.6㎝の大型皿。11は口径11.6㎝、器高2.6㎝。歪みがあるため、口径の復元精度は劣る。口縁部は２段ナデを施し、端部は上方で尖り気味になる。12は口径13.7㎝、器高2.5㎝。口縁部は緩く湾曲して立ち上がり、端部は上方で丸くおさめる。13は口径14.8㎝、器高2.5㎝。口縁部は緩く湾曲して立ち上がり、端部は上方で丸くおさめるが、わずかに外側に向く。14は口径14.7㎝、器高2.5㎝。口縁部は緩く湾曲して立ち上がり、端部は上方にわずかに突出する。

15は山茶碗の高台。断面逆三角形の高台を貼り付ける。高台径4.4㎝。底部外面に糸切痕が残る。

土坑427出土遺物は、11の口縁部に施される２段ナデや、口縁端部の突出がやや緩いことなど古い段階の特徴がみられるが、６Ａ段階にあてられると考え、12世紀後半～末に属すると考えられる。

（ｃ）室町時代（図19～21）

土坑409（16～18）

土師器（16）、青磁（17・18）がある。16は土師器皿Ｓｂ。口径8.8㎝、器高1.7㎝。底部は平坦で、口縁部は屈曲気味に外反する。口縁端部は僅かに上方へ突出する。内面に「○平」の２文字があるが、１文字目は破片が無く判読できない。９Ｃ段階にあてられる。17・18は青磁椀。いずれも龍泉窯産と考えられ、17は背の低い輪高台、18は17より高い輪高台を削り出す。高台径は17が4.6㎝、18が5.6㎝。いずれも見込みに印花文があり、17の外面には蓮弁とみられる線刻が施される。いずれも胎土は灰白色を呈し、明オリーブ灰色の釉薬を施す。15世紀中頃の所産と考えられる。

溝405（19～23）

土師器（19～22）、青磁（23）がある。また、図示していないが焼締陶器甕の体部、瀬戸とみられる施釉陶器などが出土している。

土師器は皿Ｓｈ（19）、Ｓｂ（20）、Ｓ（21・22）がある。19は口径6.6㎝、器高1.7㎝。底部を１㎝程内側に突出させる。口縁部は僅かに外反し、端部は外上方に突出気味におさめる。20は口径11.3㎝。口縁部は緩く外反し、端部はナデにより僅かに外上方に突出する。21・22は口縁部が外反し、端部は僅かに外上方に突出するもの。21は口径14.8㎝、器高2.5㎝、22は口縁部の依存状態が悪く、口径を復元できなかった。22は器壁が２～３㎜と薄い。

23は青磁椀底部。背の低い輪高台を削り出し、高台径5.4㎝。体部外面に蓮弁とみられる線刻が施される。胎土は灰白色を呈し、青みがかる灰白色の釉薬が底部外面を除き施される。

溝405出土遺物は９Ｃ段階にあてられ、15世紀後半～末に属する。

土坑403（24～37）

土師器（24～35）、青磁（36・37）がある。土師器は皿Ｎ（24～33）、Ｓ（34・35）がある。皿Ｎとした24～33は、口径6.5～7.0㎝、器高1.1～1.4㎝。口縁部は外反し、端部は外上方に突出気味になるものが大半である。法量や形態から皿Ｎに分類しているが、胎土はいずれも灰白色やそれに近い色調を呈している。皿Ｓは口径11.3㎝、器高1.7㎝のもの（34）と口径15.4㎝、器高2.2㎝の大型のもの（35）がある。口縁部は外反し、端部は外上方に僅かに突出する。これら土師器皿は10Ａ段階にあてられ、16世紀前半に属する。

青磁は小椀（36）と小鉢（37）がある。36は口径7.7㎝。体部は丸みを持って上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。体部外面に外部を縁取った蓮弁を施す。37は口径10.6㎝。体部内外面に鎬を設け、外面にはタガ状の胎土を貼り付ける。胎土は灰白色を呈し、オリーブ灰色の釉薬を施す。これらの青磁は、36の蓮弁の造作から、15世紀中頃の所産と考えられる。

土坑351（38～41）

土師器（39）、施釉陶器（38）、瓦質土器（40・41）がある。

39は土師器皿Ｓｈ。口径6.2㎝、器高1.5㎝。底部を内側に３㎜程突出させる。口縁部は外反し、端部は外上方に丸くおさめる。

38は施釉陶器蓋。ミニチュア壺の蓋か。瀬戸美濃窯産とみられる。天井部にボタン状のつまみを貼り付ける。天井部は丸みを持ち、かえりは下方に延びる。つまみ及び天井部外面に灰白色の釉薬を施す。

40・41は瓦質土器火鉢。いわゆる奈良火鉢と呼ばれるものである。40は口縁部、41は底部で、直接接合しないが同一個体の可能性がある。40は円形を呈し、口径41.9㎝。口縁部は内傾し、端部は内側に肥厚し、上位に面を持つ。口縁部外面に区画された文様帯を持つ。41は底部端に逆台形を呈する背の低い脚を貼り付ける。いずれも胎土は暗灰色を呈し、精良である。

土坑351出土遺物は９Ｃ段階にあてられ、15世紀後半に属する。

石室324（42～45）

土師器皿Ｓｂ（42・43）、Ｓ（44・45）がある。皿Ｓｂは口径9.0㎝前後、器高1.4㎝で、口縁部

が外反し、端部は外上方に僅かに突出する。42は口縁部に煤が付着し、燈明皿の可能性がある。皿Ｓは口径13.0㎝、器高2.0～2.1㎝。口縁部は緩く外反し、口縁端部は外上方に僅かに突出する。これら土師器皿は10Ａ段階にあてられ、16世紀前半に属する。

土坑350（46～55）

土師器皿Ｎ（46）、Ｓｈ（47・48）、Ｓｂ（49）、Ｓ（50～55）がある。皿Ｎ（46）は口径6.7㎝、器高1.3㎝。底部は内側に凹み、口縁部の立ち上がりは屈曲する。口縁部は外反し、端部は上方に立ち上がる。皿Ｓｈ（47・48）は口径7.0㎝前後、器高1.6㎝。底部は５～６㎜内側に突出する。口縁部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり、端部は内側がナデにより僅かに窪む。皿Ｓｂ（49）は口径8.5㎝、器高1.5㎝。口縁部は外反し、端部は上方に僅かに突出する。皿Ｓは口径10.5～13.1㎝、器高2.0㎝前後のもの（50～52）と、口径15㎝台、器高2.3㎝前後のもの（53～55）がある。前者は口縁部がほぼ直線的に外上方に延び、端部は丸くおさめる。後者は口縁部が外反し、端部は外上方に僅かに突出する。いずれも口縁部の立ち上がりは屈曲気味である。

土坑350出土遺物は10Ａ段階にあてられ、16世紀前半に属する。

整地401（56～60）

土師器（56～58）、青磁（59）、染付（60）がある。

土師器は皿Ｎ（56）、Ｓ（57・58）がある。皿Ｎ（56）は口径6.5㎝、器高1.1㎝。底部が３㎜程内側に凹む。口縁部は外反し、端部は上方に丸くおさめる。皿Ｓは57が口径10.5㎝、器高1.7㎝で、58が口径11.0㎝、器高1.8㎝。口縁部は直線的に外上方に延び、端部付近で外反気味に開く。

59は青磁椀底部。背の低い輪高台を削り出し、高台径3.3㎝。見込みに唐草のような印花文を施す。胎土は灰白色を呈し、明オリーブ灰色の釉薬を施す。

60は染付椀もしくは皿の底部で輸入品とみられる。断面逆三角形の高台を削り出し、高台径8.0㎝。見込みに草花文を呉須で描く。

整地401出土遺物は10Ａ段階にあてられ、16世紀前半に属する。

土坑307（61～73）

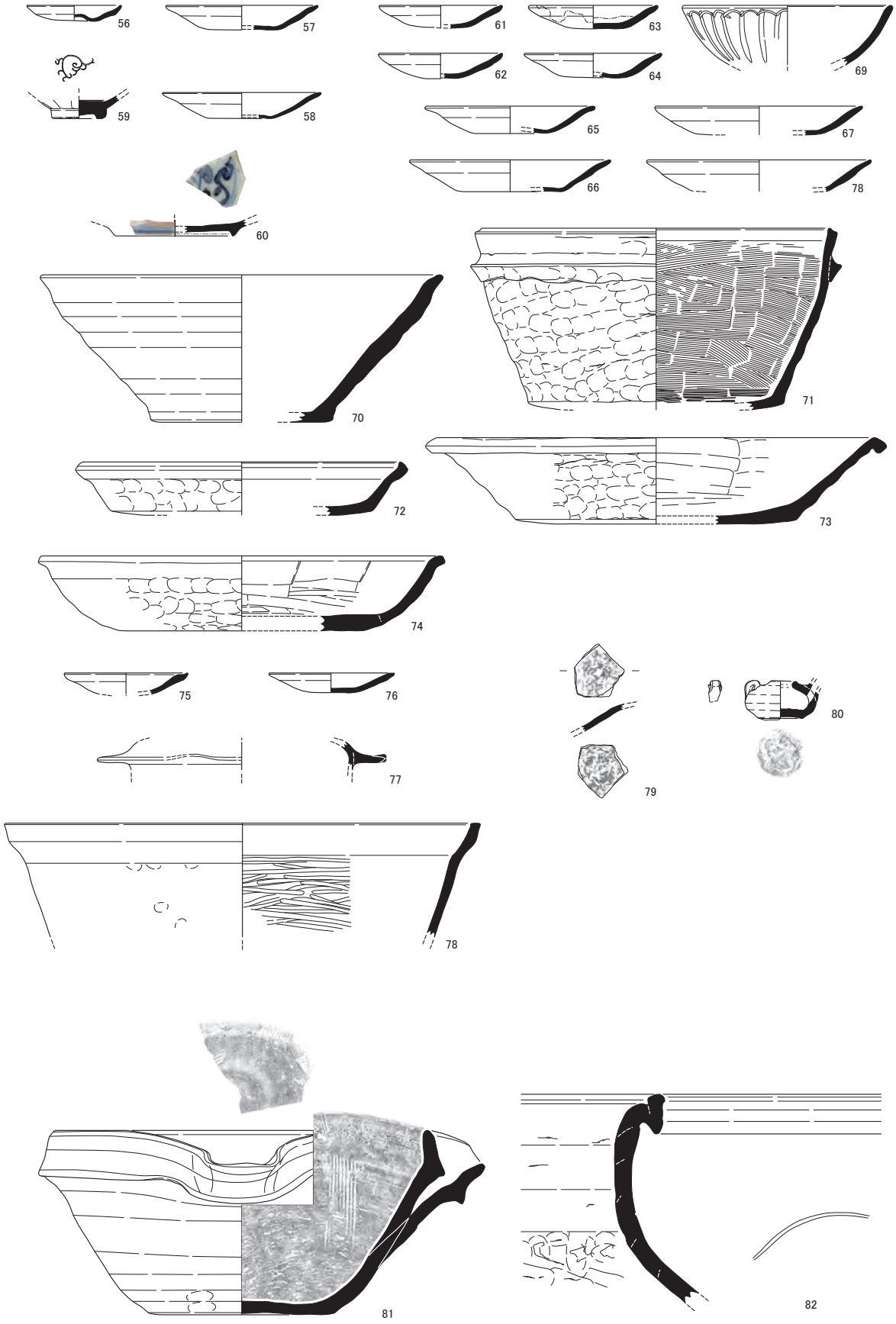
土師器（61～68）、青磁（69）、焼締陶器（70）、瓦器（71）、瓦質土器（72・73）がある。

土師器は皿Ｓｂ（61～64）、Ｓ（65～68）がある。皿Ｓｂは口径8.4～9.4㎝、器高1.6～1.8㎝。口縁部の立ち上がりはやや丸みを持つ。口縁部は緩く外反し、端部は丸くおさめる。63は口縁部に煤が付着し、燈明皿の可能性がある。皿Ｓは口径11.6～15.4㎝、器高1.9～2.2㎝と口径にややばらつきがある。口縁部は屈曲気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反し、端部は丸くおさめる。

69は青磁椀。口径14.3㎝。体部外面に線刻による蓮弁を描く。蓮弁は縦方向に線刻した後、上端部を線刻する。

70は信楽の擂鉢。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は外側に尖り気味に拡張し、上位に面を持つ。内面に４条単位の摺目を施す。胎土は浅黄橙色を呈し、長石粒を含む。

71は瓦器の羽釜。口径24.0㎝、器高17.8㎝。上位に断面三角形の鍔を貼り付ける。底部は平坦で、体部の立ち上がりは屈曲する。体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり、鍔付近で僅かに内側に傾



56～60:整地401　61～73:土坑307　74:土坑254　75～78:井戸402
79:第7層上面精査時　80:第8層上面精査時　81:土坑346　82:地業201

図20　出土遺物－２（１：４）

く。口縁端部は内側が上方に突出する。体部外面は、鍔より下位にはオサエの指頭痕が横方向に残り、鍔より上位はナデが施される。内面はハケ調整が施される。

72・73は瓦質土器の鉢。72は口径22.0㎝、器高3.7㎝。底部は平坦で、体部の立ち上がりは屈曲する。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は外反して端部は内上方に肥厚する。体部外面は指頭痕が残り、内面及び口縁部はナデを施す。73は口径30.0㎝、器高6.0㎝。底部は平坦で、体部の立ち上がりは屈曲気味である。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は外下方に折り曲げる。体部外面は指頭痕が残り、口縁部はナデを施す。内面はヘラ調整が施される。

土坑307出土遺物は、69の青磁など15世紀後半のものもみられるが、土師器皿は10Ａ段階にあてられ16世紀前半に属する土器群と考える。

土坑254（74）

74は瓦質土器鉢。口径27.6㎝、器高5.2㎝。底部は平坦で、体部の立ち上がりは丸みを帯びる。体部は湾曲して外上方に立ち上がり、口縁部は外反するが、73ほど強くは折り曲げられていない。体部外面は指頭痕が残り、口縁部はナデ調整を施す。内面はヘラ調整が施される。16世紀前半の所産か。

井戸402（75～78）

土師器（75・76）、青磁（77）、瓦質土器（78）がある。その他に図示していないが焼締陶器甕体部や瓦片が出土している。

75・76は土師器皿Ｓｂ。75は口径8.5㎝、器高1.5㎝。口縁部は緩く外反し、端部は外上方に僅かに突出する。76は口径8.6㎝、器高1.4㎝。底部は平坦で、口縁部は直線的に外上方に開き、端部は外上方で丸くおさめる。

77は青磁壺蓋。酒会壺蓋の鍔部分とみられる。残存率が良くないため、法量の復元精度は劣る。龍泉窯産。鍔端部は部分的に上方に持ち上げられる。胎土は灰白色を呈し、内面及び外面上位に明緑灰色の釉薬を施す。

78は瓦質土器鍋である。口径32.8㎝。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は受口状に屈曲する。体部内面はナデの後横方向のヘラミガキを施し、体部外面は指頭痕が残る。口縁部はナデ調整を施す。平成28年度に奈良県橿原市で実施された石川土城遺跡の調査において類例があるが[(1)]、それに比べて口縁内側の受口状のエッジが緩くなっている。石川土城遺跡出土の瓦質土器鍋は15世紀前半の年代が与えられているが、78はそれより時代が下るものと考える。

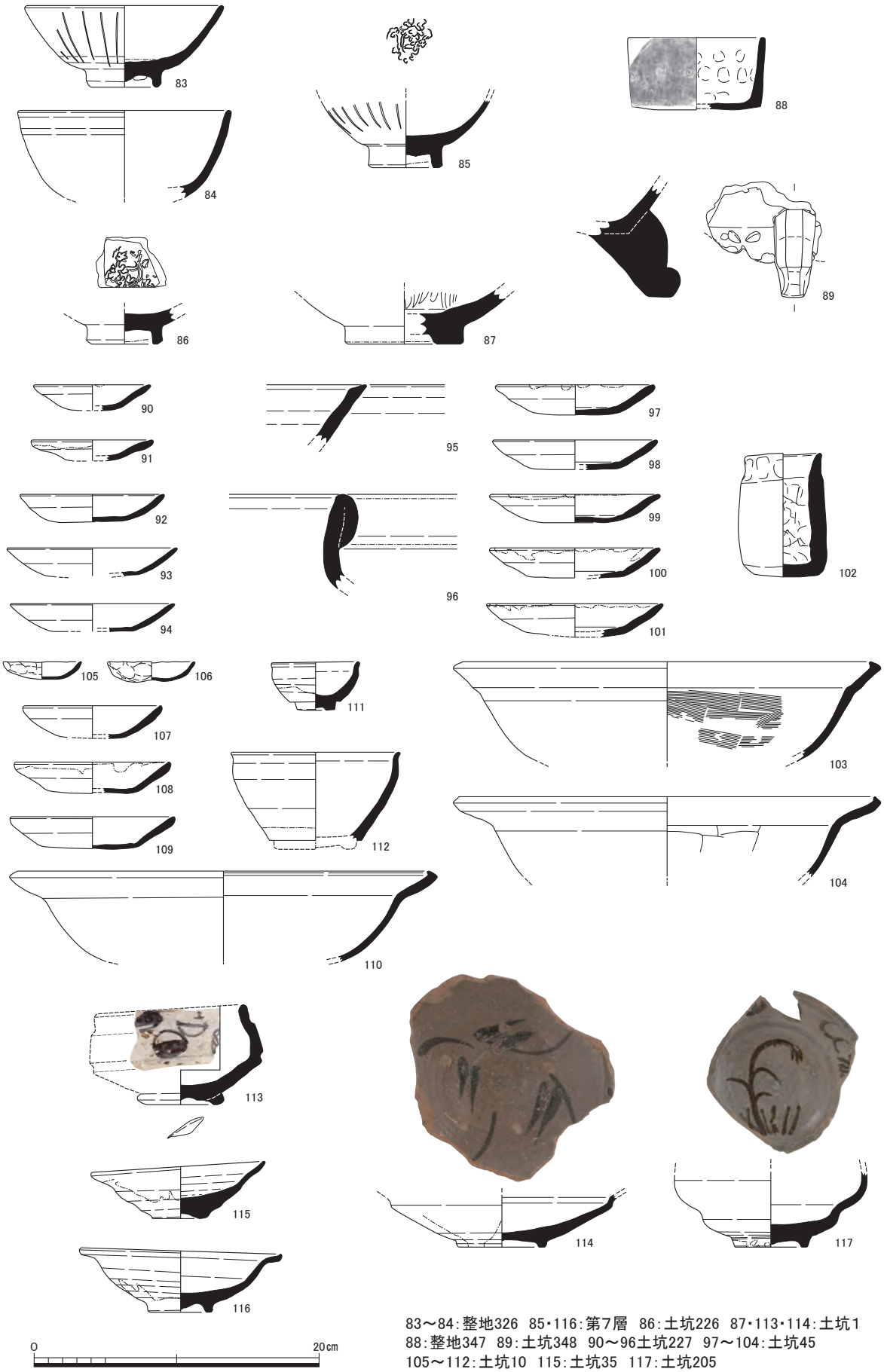
井戸402出土遺物は、77の青磁壺蓋は14世紀代の所産と考えられるが、その他の遺物は９Ｃ段階にあてられ、15世紀後半～末に属すると考える。

第７層上面精査時（79）

79は土師器皿Ｓ口縁部片。内外面に金箔を貼る。口縁端部が欠損しており、口径や時期の詳細は不明であるが、口縁部が外反する状況から室町時代後半～末頃に属すると考える。平成23年に実施された相国寺旧境内・上京遺跡の調査（調査27）においても16世紀中頃～後半の土器群と共に金箔土師器が出土しており[(2)]、79も同様の時期に属すると考えられる。

第８層上面精査時（80）

80は施釉陶器ミニチュア水注。瀬戸産と考えられる。注口は先端が欠損し、反対側には環状の取手が



83～84:整地326　85･116:第7層　86:土坑226　87･113･114:土坑1
88:整地347　89:土坑348　90～96土坑227　97～104:土坑45
105～112:土坑10　115:土坑35　117:土坑205

図21　出土遺物－３（１：４）

貼り付けられる。ロクロで成形され、底部に糸切痕が残る。表面に灰釉が施される。15世紀の所産か。

土坑346（81）

81は備前擂鉢。口径25.6㎝、器高12.8㎝。底部は平坦で、体部の立ち上がりはやや丸みを持つ。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は上方に大きく拡張する。内面に９条単位の摺目が施され、使用により表面は滑らかになる。15世紀後半～16世紀初頭の所産。

地業201（82）

82は常滑甕。口径は復元できなかった。頸部は上方に立ち上がり、口縁部は外側に屈曲して折り曲げ、端部は上方に拡張する。13世紀後半の所産。

整地326（83・84）

83・84は青磁椀。83は口径13.7㎝、高台径4.7㎝、器高5.7㎝。体部外面に縦方向の線刻を施す。胎土は灰白色を呈し、オリーブ灰色の釉薬を施す。見込みは釉剥ぎがされ、高台の内側は重ね焼き時の胎土目が残る。84は椀の体部から口縁部。口径14.8㎝。胎土は灰白色で、オリーブ灰色の釉薬を施す。いずれも16世紀中頃の所産。

第７層（85）

85は青磁椀。高台径4.6㎝。外面に縦方向の線刻、見込みに印花文を施す。胎土は灰色を呈し、オリーブ灰色の釉薬を高台内側を除き施す。16世紀中頃の所産。

土坑226（86）

86は青磁椀。高台径4.7㎝。見込みに印花文を施す。胎土は灰白色を呈し、オリーブ灰色の釉薬を施す。15世紀中頃～後半の所産。

土坑１（87）

87は青磁皿。高台径8.0㎝。幅広で背の低い高台を削り出す。内面に文様を陰刻する。胎土は灰白色を呈し、明緑灰色の釉薬を高台接地面を除き全面に施す。15世紀の所産か。

整地347（88）

88は瓦質土器香炉。口径9.4㎝、器高5.1㎝。底部は平坦で体部は直線的に上方に立ち上がる。体部外面はミガキを施し、径４㎜の渦巻文をスタンプ押しする。体部内面はナデを施すが、成型時の指頭痕が残る。15世紀の所産。

土坑348（89）

89は瓦質土器火鉢の脚部。面取りされた獣脚を底部端に貼り付ける。15世紀の所産。

（ｄ）安土桃山～江戸時代（図21～23）

土坑227（90～96）

土師器（90～94）、焼締陶器（95・96）がある。

土師器は皿Ｓｂ（90・91）、Ｓ（92～94）がある。皿Ｓｂは口径８㎝台、器高1.5～1.8㎝。口縁部が外反し、端部は丸くおさめる。皿Ｓは口径10㎝台のもの（92）と11㎝台のもの（93・94）がある。口縁部は、92が丸みを持って立ち上がり、端部は丸くおさめる。93・94は直線的に外上方に開き、端部は尖り気味におさめる。93・94は底部内面に圏状凹線が廻る。

焼締陶器は信楽（95）、備前（96）がある。95は信楽擂鉢。口径は復元できなかった。直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は突出気味に外上方に延び上部に面を持つ。摺目は残存していない。96は備前甕の口縁部。口径は復元できなかった。口縁部は外側に折り曲げ玉縁とする。

土坑227は11Ａ段階にあてられ、16世紀末～17世紀前半に属する。

土坑45（97～104）

土師器がある。97～101は皿Ｓ。口径11.0～12.2㎝、器高2.0～2.3㎝。底部は平坦で、口縁部は97・98・100・101が直線的に外上方に立ち上がり、99は外反する。口縁端部はいずれも丸くおさめる。底部内面に圏状凹線が廻る。97・99～101は口縁部に煤が付着し、燈明皿の可能性がある。102は焼塩壺。103・104は鍋。口径はいずれも29㎝程度で、底部から体部は丸みを持ち、口縁部は外反して、端部は内上方に突出する。104は103より口縁部の外反が強い。調整は103が口縁部内外面及び外面がナデ、体部及び底部内面はハケ調整を施し、104が口縁部内外面及び外面をナデ、体部及び底部内面は板ナデを施す。

土坑45出土遺物は、11Ｂ段階にあてられ、17世紀前半に属する。

土坑10（105～112）

土師器（105～110）、施釉陶器（111・112）がある。

土師器は皿Ｎ（105・106）、皿Ｓｂ（107）、皿Ｓ（108・109）、鍋（110）がある。皿Ｎは105が口径5.4㎝、器高1.2㎝、106が口径6.0㎝、器高1.4㎝。外面に成形時の指頭痕が残る。皿Ｓｂ（107）は口径9.6㎝、器高2.3㎝。口縁部はやや丸みを持って外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。皿Ｓは口径11㎝前後、器高2.3～2.4㎝。底部は平坦で、口縁部は外反気味に外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部内面に圏状凹線が廻る。108は口縁部に煤が付着し、燈明皿の可能性がある。鍋（110）は口径28.8㎝。底部から体部は丸みを持ち、口縁部は外反して、端部は内上方に突出する。

土坑10出土遺物は、11Ｂ段階にあてられ、17世紀前半に属する。

土坑１（113・114）

113は織部沓茶碗。口径9.0㎝で復元しているが、歪みが大きい。歪な輪高台を貼り付け、高台径6.0㎝。底部は外上方に持ち上がり、体部は屈曲して上方に折れ曲がる。体部は屈曲して内上方に延び、口縁端部は丸くおさめる。体部から口縁部外面に白色の釉薬を施し、鉄釉で絵付けを行う。内面には黒色の釉薬を施す。高台の内側にヘラ記号を入れる。114は唐津大皿。体部の立ち上がりが屈曲して折れ曲がり、段を設ける。高台を削り出し、高台径6.1㎝。褐灰色の釉薬を施し、内面に鉄釉で草文とみられる絵を描く。これらは17世紀前半の所産。

土坑35（115）

115は唐津向付。口径12.1㎝、高台径3.9㎝、器高3.3～4.0㎝。口縁部は外上方に立ち上がり、立ち上がりは段が付く。見込みに砂目が馬蹄状に残る。内面及び口縁部外面に灰白色の釉薬を施す。17世紀前半の所産。

第７層（116）

116は唐津向付。口径14.0㎝、高台径4.3㎝、器高4.1～4.6㎝。体部は丸みを持ち、口縁部は外反

して、端部は上方に突出する。見込みに砂目が４箇所残る。内面及び体部外面に灰白色の釉薬を施す。17世紀前半の所産。

土坑205（117）

117は唐津向付。高台径5.0㎝。体部は屈曲して折れ曲がった後、上方に立ち上がる。内面及び体部外面に灰黄褐色の釉薬を施す。内面には鉄釉で草文を描く。17世紀前半の所産。

土坑49（118～126）

土師器（118～120）、染付（121）、焼締陶器（122）、施釉陶器（123～125）、瓦質土器（126）がある。

土師器は皿Ｎ（118）、皿Ｓ（119）、釜（120）がある。118は皿Ｎで、口径6.6㎝、器高1.4㎝。外面に成形時の指頭痕が残る。119は皿Ｓで、口径11.8㎝、器高2.1㎝。底部は平坦で、口縁部はやや丸みを持って外上方に立ちあがり、端部は丸くおさめる。底部内面に圏状凹線が廻る。120は羽釜口縁部から体部片で、本来は下方に鍔が付く大和産の羽釜と考えられる。口径14.0㎝。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外上方に折れ曲がり、端部は上方に突出する。口縁部はナデ、体部はオサエの後ナデが施される。

121は染付皿で輸入品とみられる。口径13.5㎝、高台径8.0㎝、器高2.8㎝。内面に呉須による絵付けがなされる。

122は焼締陶器水指か。産地は備前か。体部は平坦で、体部の立ち上がりは屈曲する。体部は内傾して立ち上がる。

123・124は唐津向付。123は口縁の平面形を隅丸方形に整える。体部は屈曲して折れ曲がり、口縁部も屈曲しながら上方に立ち上がる。高台の２箇所に「M」字状の切込みがある。内面及び体部外面に灰黄色の釉薬を施し、内面に鉄絵で草花文を描く。124は底部は平坦で、体部の立ち上がりは屈曲して稜を持つ。体部は上方に立ち上がり、口縁端部は外側に肥厚し玉縁を呈する。内面及び体部外面に灰オリーブ色の釉薬を施し、内面に鉄釉で地面と草文とみられる絵を描く。125は志野向付。ロクロ成型後に型打ちされ、入隅四方形に整える。口径12.0㎝、器高6.4㎝。底部外面は径7.0㎝の円形に掘り窪め、碁笥底高台とする。全面に灰白色を呈する長石釉を施し、草文とみられる絵付けを施す。

126は瓦質土器火鉢。長方形に成形され、底部４隅に背の低い脚を貼り付ける。

土坑49出土遺物は11Ｂ段階にあてられ、17世紀前半に属する。

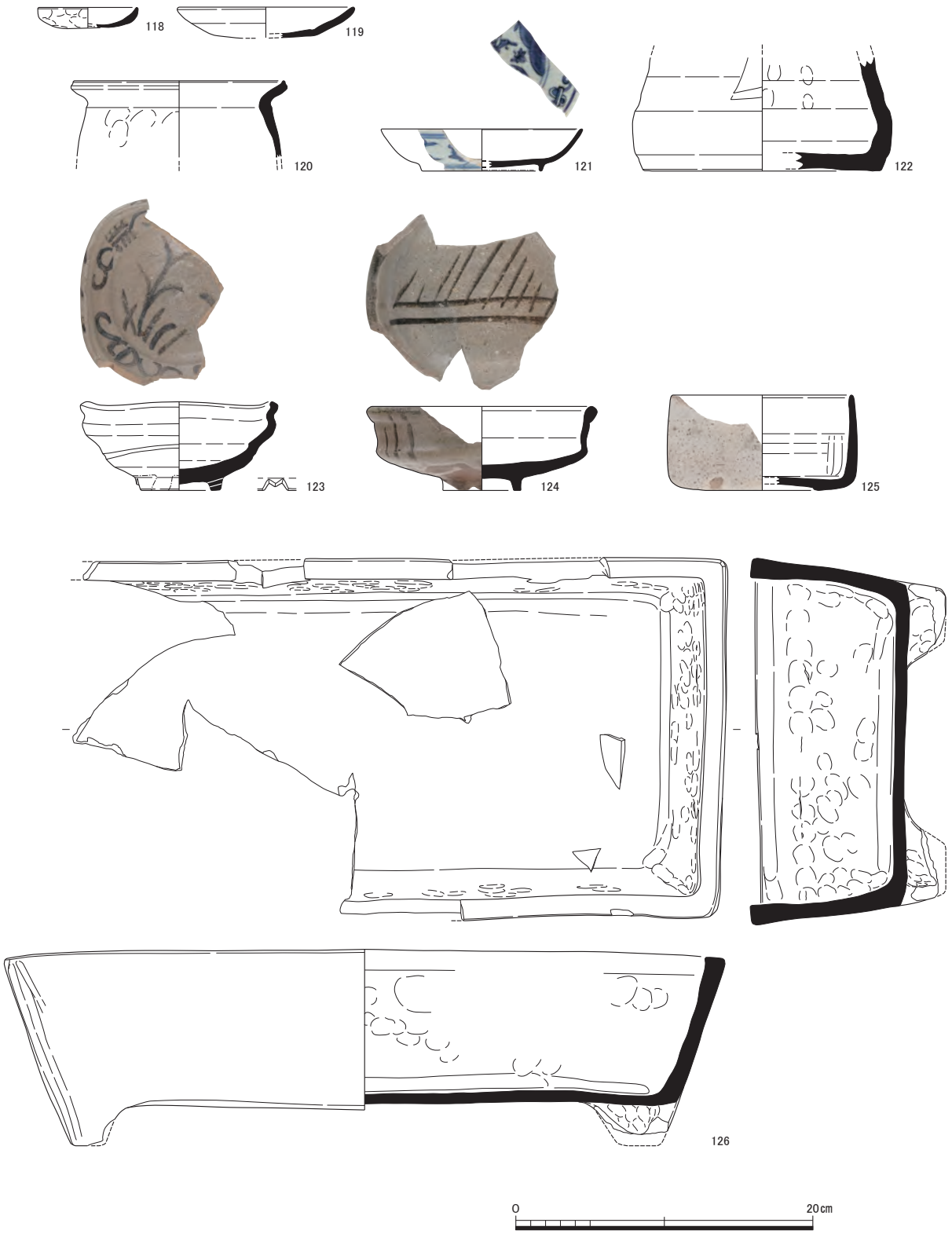
石組28（127～152）

石組28出土遺物は、127～132が掘形、133～152が石組内から出土している。

掘形出土遺物は土師器（127～129）、白磁（130）、染付（131・132）がある。

127は所謂つぼつぼ。口径2.6㎝、器高3.0㎝。手づくねで成形され、胎土は浅黄橙色を呈し精良である。128は焼塩壺蓋。口径4.7㎝、器高1.7㎝。内面に布目が残る。129は土師器皿Ｓ。口径12.0㎝、器高2.0㎝。底部はやや丸みを持ち、口縁部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり、端部は尖り気味になる。底部内面に圏状凹線が廻る。

130は白磁椀。口径10.8㎝、高台径3.8㎝、器高5.9㎝。体部の立ち上がりは丸みを持ち、口縁部



118～126:土坑49

図22　出土遺物－４（１：４）

は直線的に外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。灰白色の釉薬を全体に施し、高台接地面には重ね焼き時と考えられる砂が付着する。

131は染付椀。口径9.4㎝。体部外面に呉須により花文を描く。132は染付皿。口径13.4㎝、高台径6.0㎝、器高2.9㎝。体部の立ち上がりは丸みを持ち、口縁部はほぼ直線的に外上方に立ち上がる。内面に呉須により花文を描く。

石組内出土遺物は土師器（133～144）、土製品（145・146）、染付（147・148）、施釉陶器（149～151）、焼締陶器（152）がある。

133～143は土師器皿。133～136は皿Ｎ、137～139は皿Ｓｂ、140～143は皿Ｓ。皿Ｎは口径4.7～5.7㎝、器高1.0～1.4㎝。オサエで成形され、歪みが大きい。皿Ｓｂは口径8.0㎝、器高1.4～1.5㎝。底部は平坦で、体部はやや丸みを持って外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。皿Ｓは口径9.7～10.0㎝、器高1.6～2.7㎝。底部はやや丸みを持ち、口縁部は屈曲気味に立ち上がり、端部は外上方で丸くおさめる。底部内面に断面が鋭角な圏状凹線が廻る。144は小鉢。口径4.7㎝、器高3.0㎝。ロクロで成形される。底部は平坦で体部の立ち上がりは丸みを帯びる。体部は内傾して立ち上がり、口縁端部は上位に面を持つ。

145は土鈴。最大径5.2㎝、器高5.3㎝。球体部の上位が最大径となる。146は伏見人形。布袋尊とみられる。高さ3.25㎝、幅2.2㎝。

147は染付皿。口径7.6㎝、高台径4.0㎝、器高1.9㎝。体部から口縁部は丸みを持って立ち上がり、端部は丸くおさめる。内面に呉須により竹と花文が描かれる。148は染付瓶。御神酒徳利か。体部は直線的に立ち上がり、肩部は屈曲して稜を持つ。頸部は丸みを持って上方に立ち上がり、口縁部は外反する。肩部外面に蛸唐草文、体部外面に草花文を呉須で描く。

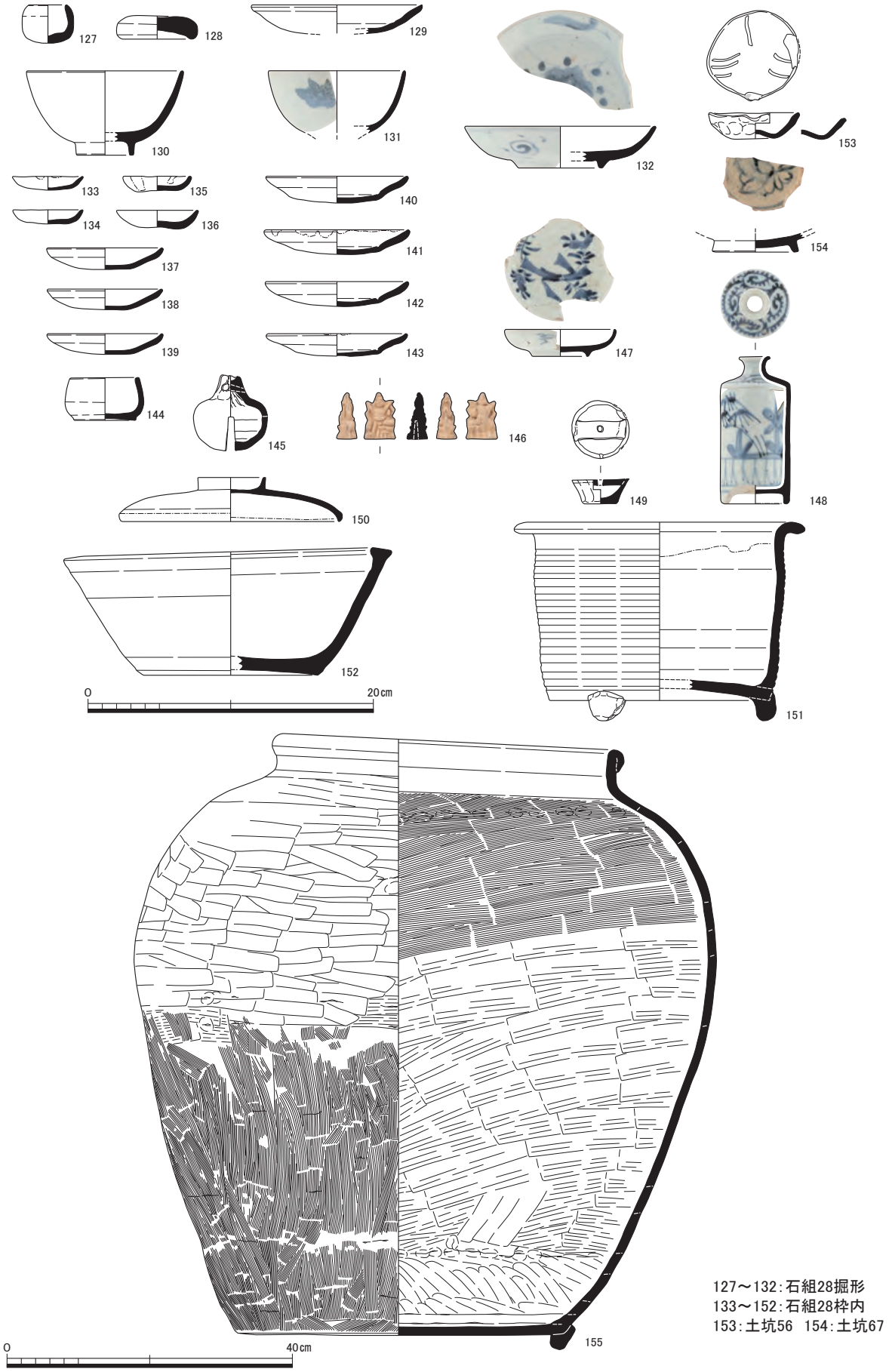
149は燈明具もしくは線香立てとみられる。口径4.0㎝、器高1.7㎝。口縁部に幅1.2㎝の板状粘土を貼り付け、中央に径４㎜の穴を穿つ。胎土は灰白色を呈し軟質で、全面に浅黄色の釉薬を薄く施す。150は施釉陶器蓋。口径15.1㎝、器高3.1㎝。天井部に径4.7㎝の輪高台状のつまみを削り出す。天井部は丸みを持ち、口縁部は下方に突出する。口縁部を除き、灰色を呈する釉薬を施す。151は施釉陶器鉢。口径18.4㎝、器高13.9㎝。底部端にこぶ状の脚が貼り付けられ、１箇所残存する。底部は平坦で、体部の立ち上がりは屈曲して稜を持つ。体部は上方に立ち上がり、口縁部はほぼ水平方向に外反する。体部外面に横方向の凹線が複数廻る。口縁部内外面及び体部外面に黒色の釉薬を施す。

152は焼締陶器鉢。口径20.2㎝、器高8.9㎝。底部は平坦で、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は内外に拡張して上部に面を持つ。底部外面にハナレ砂が付着し、内面には重ね焼き痕が残る。

石組28掘形と石組内出土遺物には大きな時期差は確認できず、12Ｂ段階にあてられ、18世紀前半に属する。

炉56（153）

153は土師器皿か。口径6.2㎝、器高1.8㎝を測るが、歪が大きい。皿Ｎの形状を呈しており、口縁部の１箇所を外側に僅かに突出させ、片口状に作る。片口状の周囲には鉄分が付着する。内面に摺目状の線刻を３箇所施す。



127～132:石組28掘形
133～152:石組28枠内
153:土坑56　154:土坑67

図23　出土遺物－５（１：４、１：８）

土坑67（154）

154は染付椀。断面方形の高台を削り出し、高台径5.4㎝。見込みに呉須により花弁を描く。

埋甕50（155）

155は備前大甕。埋甕として据えられていたものである。口径46.0㎝、器高90.2㎝、体部の最大径83.6㎝。体部上位に最大径がある。肩部は丸みがあり、頸部は屈曲して直立する。口縁端部は外側に折り曲げ玉縁とする。口縁部はナデ、体部外面上位は横方向の板ナデ、下位は縦方向のハケ、体部内面は底部付近は斜め方向の板ナデ、肩部付近までは横方向の板ナデ、肩部から頸部は横方向のハケを施す。底部端の１箇所に、焼成時の支えとみられる粘土片が付着する。

（２）瓦類（図24）

156・157は軒丸瓦。156は左巻き三巴文。巴頭は丸みを帯び、尾は長く伸び隣の尾と接続する。周囲に珠文が廻り、12個残存する。土坑341から出土。157は右巻き三巴文。巴頭は丸みを帯び、尾は長く伸びるが隣の尾には接続しない。周囲に12個の珠文が廻る。土坑49から出土。

158～162は軒平瓦。158・159は平安時代末～鎌倉時代初頭の軒平瓦。158は剣頭文で、中心飾は花弁を呈する。瓦頭部成形は折り曲げ技法で、瓦頭面に布目が残る。溝405から出土。159は巴文と花文を並べて配する。瓦頭部成形は折り曲げ技法か。整地326から出土。160～162は室町時代の軒平瓦で、瓦当文様は唐草文。160は中心飾は欠損し、唐草は強く巻き込み４反転する。土坑403から出土。161は中心飾は欠損し、唐草は３反転する。整地401から出土。162は中心飾は３葉で、唐草は外形が縁取られる。土坑６から出土。

163は塼。塼列203西面のもの。一辺25㎝前後の正方形を呈し、厚さ3.3㎝。片面はナデ調整が施される。

（３）鋳造関連資料（図25）

164は取鍋。小椀状を呈し、口径8.3㎝、器高3.8㎝。内面及び口縁部外面に金属が付着する。土坑７から出土。165は鏡鋳型。円盤状を呈し、片面に斜格子上の線刻を施す。中央に径1.5㎝程の穴を穿つ。第７層から出土。

（４）金属製品（図25）

166～169は銭貨。いずれも遺構には伴わず、後世の遺構もしくは整地層に混入したもの。166・167は元豊通寶。168は熙寧元寶。169は永楽通寶。

170は鉄砲玉。径1.2㎝の球状を呈し、重量は10.5ｇ。第６ｂ層から出土。171は銅製の蟹を模した蓋置とみられる。縦4.8㎝、横10.0㎝、重量150.6ｇ。土坑44から出土。

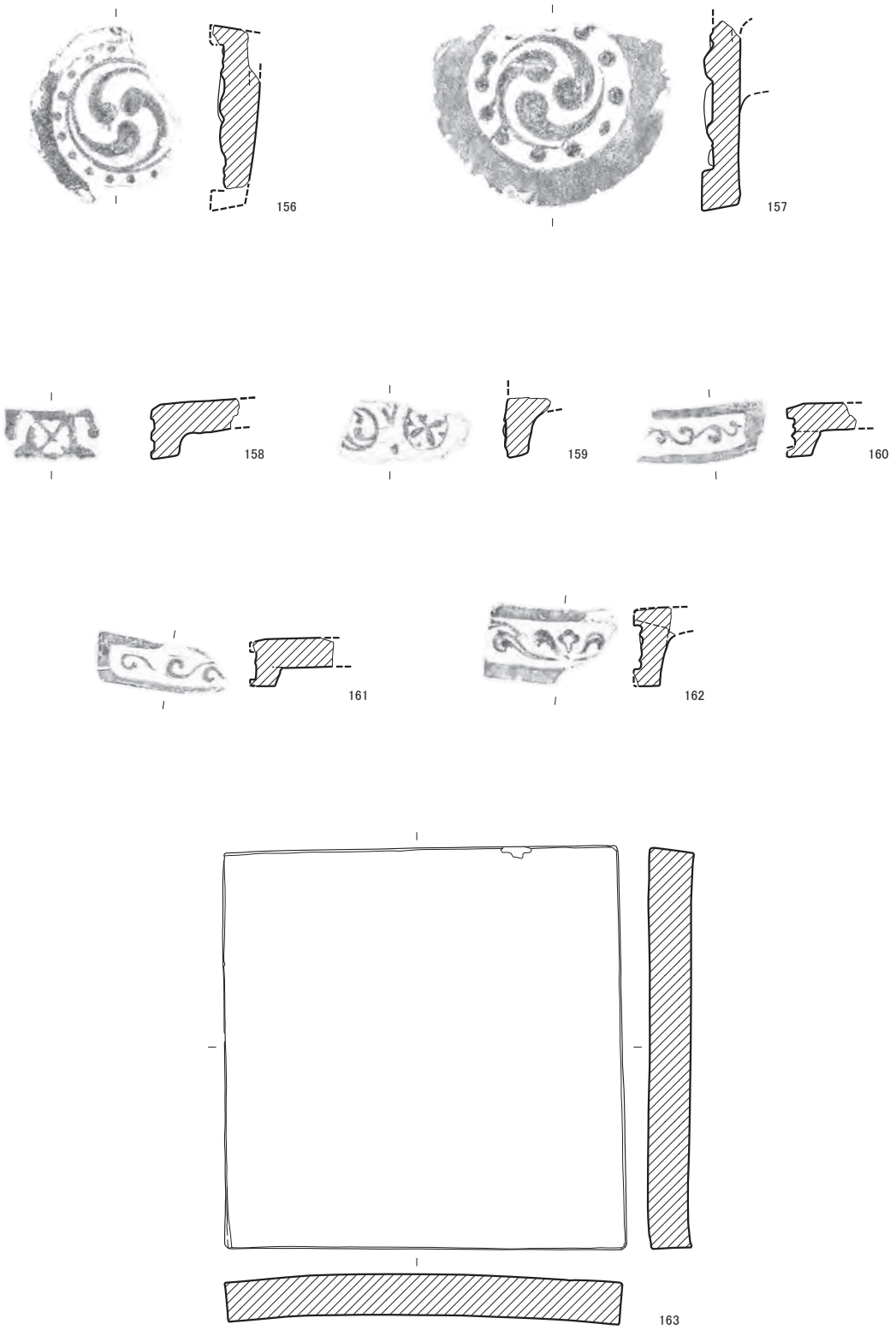
（５）石製品（図25）

172は硯。長さ14.6㎝、幅7.3㎝。陸部中央は大きく凹む。土坑10から出土。

註

（１）佐藤亜聖氏に御教示いただいた。
佐藤亜聖『石川土城遺跡－平成28年度調査報告書－』公益財団法人元興寺文化財研究所　2018年

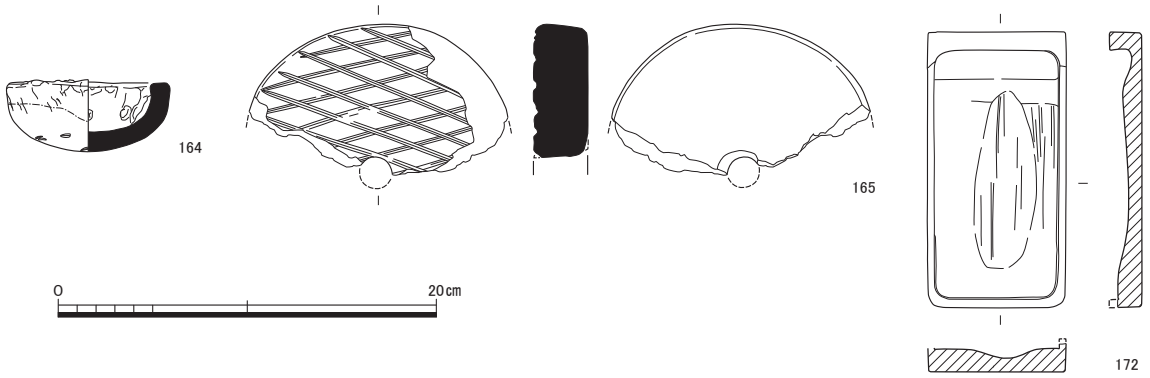
（２）上村和直・佐伯公子・モンペティ恭子・若林邦彦『同志社大学歴史資料館調査研究報告第12集　相国寺旧境内・上京遺跡発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館・公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2013年

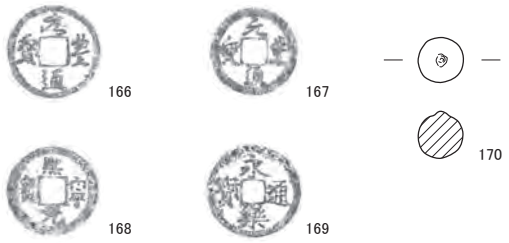


156:土坑341　157:土坑49　158:溝405　159:整地326
160:土坑403　161:整地401　162:土坑6　163:磚列203

0　20cm

図24　出土遺物－6（1：4）





0　5cm

164:土坑7　165:第7層　166・167:第7層上面精査時
168:土坑77　169:調査区南壁清掃時　170:第6b層
171:土坑44　172:土坑10

図25　出土遺物－７（１：２、１：４）

表４　遺物観察表

掲載No	器種	器形	出土遺構	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	色調	備考
1	緑釉	皿？	土坑 230	-	(1.5)	10.0	（釉）10Y6/2 オリーブ灰色 （胎）10YR7/2 にぶい黄橙色	
2	山茶碗	椀	土坑 317	-	(2.3)	7.6	N 7/0 灰白色	
3	土師器	皿 Ac	土坑 428	8.0	1.0	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
4	土師器	皿 N	土坑 428	8.4	1.4	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
5	土師器	皿 N	土坑 428	12.0	2.3	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
6	土師器	皿 N	土坑 428	14.0	3.1	-	10YR8/4 浅黄橙色	
7	山茶碗	椀	土坑 428	-	(2.3)	7.0	10YR8/3 浅黄橙色	
8	瓦器	羽釜（ミニチュア）	土坑 428	8.0	(4.5)	-	N 4/0 灰色	
9	土師器	皿 N	土坑 425	13.2	3.0	-	10YR8/4 浅黄橙色	
10	土師器	皿 N	土坑 427 上	8.9	1.6	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
11	土師器	皿 N	土坑 427 上	11.6	2.6	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
12	土師器	皿 N	土坑 427 上	13.7	2.5	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
13	土師器	皿 N	土坑 427 上	14.8	2.5	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
14	土師器	皿 N	土坑 427 上	14.7	2.5	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
15	山茶椀	椀	土坑 427 上	-	(1.8)	4.4	10YR7/1 灰白色	
16	土師器	皿 Sb	土坑 409	8.8	1.7	-	10YR8/2 灰白色	
17	青磁	椀	土坑 409	-	(3.7)	4.6	（釉）5GY7/1 明オリーブ灰色 （胎）N7/0 灰白色	
18	青磁	椀	土坑 409	-	(4.6)	5.6	（釉）2.5GY7/1 明オリーブ灰色 （胎）N8/0 灰白色	
19	土師器	皿 Sh	溝 405	6.6	1.7	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
20	土師器	皿 Sb	溝 405	11.3	(2.0)	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
21	土師器	皿 S	溝 405	14.8	(2.5)	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
22	土師器	皿 S	溝 405	-	(2.1)	-	10YR8/2 灰白色	
23	青磁	椀	溝 405	-	(2.9)	5.4	（釉）10Y7/2 灰白色 （胎）10YR7/1 灰白色	
24	土師器	皿 N	土坑 403	6.7	1.2	-	2.5Y8/1 灰白色	
25	土師器	皿 N	土坑 403	6.9	1.2	-	10YR8/2 灰白色	
26	土師器	皿 N	土坑 403	7.0	1.3	-	10YR8/3 浅黄橙色	
27	土師器	皿 N	土坑 403	7.0	1.4	-	10YR8/3 浅黄橙色	
28	土師器	皿 N	土坑 403	6.9	1.4	-	10YR8/2 灰白色	
29	土師器	皿 N	土坑 403	6.8	1.3	-	10YR8/3 浅黄橙色	
30	土師器	皿 N	土坑 403	7.0	1.4	-	10YR8/2 灰白色	
31	土師器	皿 N	土坑 403	6.9	1.1	-	10YR8/2 灰白色	
32	土師器	皿 N	土坑 403	6.6	1.3	-	2.5Y8/2 灰白色	
33	土師器	皿 N	土坑 403	6.8	1.4	-	2.5Y8/2 灰白色	

掲載No	器種	器形	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
34	土師器	皿 S	土坑 403	11.3	1.7	-	10YR8/2 灰白色	
35	土師器	皿 S	土坑 403	15.4	(2.2)	-	10YR8/2 灰白色	
36	青磁	小椀	土坑 403	7.7	(3.3)	-	(釉) 2.5GY7/1 明オリーブ灰色 (胎) 5Y8/1 灰白色	
37	青磁	鉢か	土坑 403	10.6	(2.5)	-	(釉) 10Y6/2 オリーブ灰 (胎) N 8/0 灰白色	
38	施釉陶器	蓋 (ミニチュア)	土坑 351	2.0	2.2	-	(釉) 5Y7/1 灰白色 (胎) 10YR8/1 灰白色	瀬戸美濃
39	土師器	皿 Sh	土坑 351	6.2	1.5	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
40	瓦質土器	火鉢	土坑 351	41.9	(5.4)	-	N 3/0 暗灰色	
41	瓦質土器	火鉢	土坑 351	-	(5.7)	38.0	N 3/1 暗灰色	
42	土師器	皿 Sb	石室 324	8.6	1.4	-	10YR8/2 灰白色	
43	土師器	皿 Sb	石室 324	9.0	1.4	-	2.5Y8/1 灰白色	
44	土師器	皿 S	石室 324	13.0	(2.1)	-	10YR8/2 灰白色	
45	土師器	皿 S	石室 324	13.0	(2.0)	-	10YR8/2 灰白色	
46	土師器	皿 N	土坑 350	6.7	1.3	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
47	土師器	皿 Sh	土坑 350	7.0	1.6	-	2.5Y8/2 灰白色	
48	土師器	皿 Sh	土坑 350	6.8	1.6	-	2.5Y8/1 灰白色	
49	土師器	皿 Sb	土坑 350	8.5	1.5	-	10YR8/4 浅黄橙色	
50	土師器	皿 S	土坑 350	10.5	1.8	-	10YR8/4 浅黄橙色	
51	土師器	皿 S	土坑 350	11.7	2.1	-	10YR8/2 灰白色	
52	土師器	皿 S	土坑 350	13.1	2.2	-	10YR8/2 灰白色	
53	土師器	皿 S	土坑 350	15.4	2.2	-	2.5Y8/1 灰白色	
54	土師器	皿 S	土坑 350	15.4	2.3	-	10YR8/2 灰白色	
55	土師器	皿 S	土坑 350	15.8	(2.4)	-	10YR8/2 灰白色	
56	土師器	皿 N	整地 401	6.5	1.1	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
57	土師器	皿 S	整地 401	10.5	1.7	-	2.5Y8/1 灰白色	
58	土師器	皿 S	整地 401	11.0	1.8	-	10YR8/2 灰白色	
59	青磁	椀	整地 401	-	(1.6)	3.3	(釉) 5GY7/1 明オリーブ灰色 (胎) N 8/1 灰白色	
60	染付	皿	整地 401	-	(1.1)	8.0	(釉) 呉須 (胎) N 8/0 灰白色	
61	土師器	皿 Sb	土坑 307	8.4	1.6	-	10YR8/3 浅黄橙色	
62	土師器	皿 Sb	土坑 307	8.5	1.8	-	10YR8/2 灰白色	
63	土師器	皿 Sb	土坑 307	8.8	1.6	-	2.5Y7/1 灰白色	
64	土師器	皿 Sb	土坑 307	9.4	1.7	-	10YR8/3 浅黄橙色	
65	土師器	皿 S	土坑 307	11.6	1.9	-	2.5Y8/3 淡黄色	
66	土師器	皿 S	土坑 307	13.8	2.2	-	10YR8/3 浅黄橙色	
67	土師器	皿 S	土坑 307	14.3	2.0	-	10YR6/2 灰黄褐色	
68	土師器	皿 S	土坑 307	15.4	(2.2)	-	10YR8/2 灰白色	

掲載No	器種	器形	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
69	青磁	椀	土坑 307	14.3	(4.2)	-	(釉) 5Y6/2 灰オリーブ色 (胎) 2.5Y6/1 黄灰色	
70	焼締陶器	擂鉢	土坑 307	28.8	10.2	11.8	7.5YR8/3 浅黄橙色	信楽
71	瓦器	羽釜	土坑 307	24.0	(12.6)	17.8	10YR8/2 灰白色	
72	瓦質土器	鉢	土坑 307	22.0	3.7	18.0	2.5Y6/1 黄灰色	
73	瓦質土器	鉢	土坑 307	30.0	6.0	19.6	2.5Y6/1 黄灰色	
74	瓦質土器	鉢	土坑 254	27.6	5.2	17.2	2.5Y5/1 黄灰色	
75	土師器	皿 Sb	井戸 402	8.5	(1.5)	-	10YR8/2 灰白色	
76	土師器	皿 Sb	井戸 402	8.6	1.4	-	10YR8/2 灰白色	
77	青磁	壺蓋	井戸 402	20.0	(1.9)	-	(釉) 7.5GY7/1 明緑灰色 (胎) N 7/0 灰白色	
78	瓦質土器	鍋	井戸 402	32.8	(7.9)	-	(内) N 6/0 灰色 (外) 2.5Y5/1 黄灰色	
79	土師器	皿 S	第 7 層上面精査時	縦 (3.7) 横 (3.5)	1.9	厚 0.5	2.5Y8/1 灰白色	表裏面に金箔
80	施釉陶器	水注	第 8 層上面精査時	1.5	2.6	3.0	(釉) 10Y7/2 灰白色 (胎) 5Y8/1 灰白色	瀬戸
81	焼締陶器	擂鉢	土坑 346	25.6	12.8	13.0	2.5YR5/4 にぶい赤褐色	備前
82	焼締陶器	甕	地業 201 北面	-	(14.5)	-	2.5YR5/3 にぶい赤褐色	常滑
83	青磁	椀	整地 326	13.7	5.7	4.7	(釉) 10Y6/2 オリーブ灰色 (胎) N 7/0 灰白色	
84	青磁	椀	整地 326	14.8	(6.1)	-	(釉) 10Y6/2 オリーブ灰色 (胎) N 7/0 灰白色	
85	青磁	椀	第 7 層	-	(4.7)	4.6	(釉) 10Y6/2 オリーブ灰色 (胎) N 6/0 灰色	
86	青磁	椀	土坑 226	-	(2.5)	4.7	(釉) 10Y6/2 オリーブ灰色 (胎) 10YR8/2 灰白色	
87	青磁	皿	土坑 1	-	(3.8)	8.0	(釉) 7.5GY7/1 明緑灰色 (胎) N 8/0 灰白色	
88	瓦質土器	香炉	整地 347	9.4	5.1	-	N 4/0 灰色	
89	瓦質土器	火鉢	土坑 348	高 (7.8)	幅 (8.1)	奥行 (6.5)	N 3/0 暗灰色	
90	土師器	皿 Sb	土坑 227	8.0	1.8	-	10YR8/2 灰白色	
91	土師器	皿 Sb	土坑 227	8.4	1.5	-	10YR8/2 灰白色	
92	土師器	皿 S	土坑 227	10.0	1.9	-	10YR8/3 浅黄橙色	
93	土師器	皿 S	土坑 227	11.8	(2.1)	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
94	土師器	皿 S	土坑 227	11.4	1.6	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
95	焼締陶器	擂鉢	土坑 227	-	(4.1)	-	10YR8/4 浅黄橙色	信楽
96	焼締陶器	甕	土坑 227	-	(6.5)	-	(釉) 7.5YR4/2 灰褐色 (胎) N 5/0 灰色	備前
97	土師器	皿 S	土坑 45	11.0	2.1	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
98	土師器	皿 S	土坑 45	11.4	2.1	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
99	土師器	皿 S	土坑 45	11.8	2.0	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
100	土師器	皿 S	土坑 45	11.8	2.1	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
101	土師器	皿 S	土坑 45	12.2	(2.3)	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
102	土師器	塩壺	土坑 45	5.1	8.7	4.5	5YR6/3 にぶい橙色	
103	土師器	鍋	土坑 45	28.7	(7.0)	-	7.5YR6/3 にぶい褐色	

掲載No	器種	器形	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
104	土師器	鍋	土坑 45	29.1	(5.6)	-	10YR8/4 浅黄橙色	
105	土師器	皿 N	土坑 10	5.4	1.2	-	10YR8/3 浅黄橙色	
106	土師器	皿 N	土坑 10	6.0	1.4	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
107	土師器	皿 Sb	土坑 10	9.6	2.3	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
108	土師器	皿 S	土坑 10	10.8	2.2	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
109	土師器	皿 S	土坑 10	11.4	2.3	-	7.5Y8/3 浅黄橙色	
110	土師器	鍋	土坑 10	28.8	(6.3)	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	
111	施釉陶器	小椀	土坑 10	6.0	3.4	1.5	(釉) 10YR2/1 黒色 (胎) 2.5Y8/1 灰白色	瀬戸美濃
112	施釉陶器	天目椀	土坑 10	11.6	(6.2)	-	(釉) 10YR2/1 黒色 (胎) 2.5Y8/1 灰白色	瀬戸美濃
113	施釉陶器	沓茶椀	土坑 1	9.0	7.0	6.0	(釉) 7.5YR3/1 黒褐色 (胎) 2.5Y8/1 灰白色	織部
114	施釉陶器	皿	土坑 1	-	(3.7)	6.1	(釉) 7.5YR5/2 灰褐色 (胎) 7.5YR6/4 にぶい橙色	唐津
115	施釉陶器	向付	土坑 35	12.1	4.0	3.9	(釉) N7/0 灰白色 (胎) 5YR6/6 橙色	唐津
116	施釉陶器	向付	第 7 層	14.0	4.6	4.3	(釉) 10YR8/2 灰白色 (胎) 7.5YR7/6 橙色	唐津
117	施釉陶器	向付	土坑 205	-	(5.3)	5.0	(釉) 2.5Y6/2 灰黄色・ 5Y4/2 灰オリーブ色 (胎) 10YR6/2 灰黄褐色	唐津
118	土師器	皿 N	土坑 49	6.6	1.4	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	
119	土師器	皿 S	土坑 49	11.8	2.1	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
120	土師器	釜	土坑 49	14.0	(5.1)	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	
121	染付	皿	土坑 49	13.5	2.8	8.0	(釉) 7.5GY8/1 明緑灰色・呉須 (胎) N9/0 白	
122	焼締陶器	水指か	土坑 49	-	(7.7)	15.8	10YR8/2 灰白色	備前か
123	施釉陶器	向付	土坑 49	11.6	6.0	5.4	(釉) 2.5Y6/2 灰黄色 (胎) 7.5YR5/4 にぶい褐色	唐津
124	施釉陶器	向付	土坑 49	14.8	5.7	5.2	(釉) 5Y6/2 灰オリーブ色・ 2.5Y3/2 黒褐色 (胎) 10YR6/2 灰黄褐色	唐津
125	施釉陶器	向付（四方）	土坑 49	12.0	6.4	12.2	(釉) 2.5Y7/1 灰白色 (胎) 2.5Y7/2 灰黄色	志野
126	瓦質土器	火鉢	土坑 49	長 24.5	幅 (44.2)	高 13.2	N 4/0 灰色	
127	土師器	つぼつぼ	石組 28 掘形	2.6	2.7	3.0	10YR8/3 浅黄橙色	
128	土師器	蓋	石組 28 掘形	4.7	1.7	-	5YR6/6 橙色	
129	土師器	皿 S	石組 28 掘形	12.0	(2.0)	-	10YR8/3 浅黄橙色	
130	白磁	椀	石組 28 掘形	10.8	5.9	3.8	(釉) 10Y8/1 灰白色 (胎) N9/0 白	
131	染付	椀	石組 28 掘形	9.4	(4.4)	-	(釉) うすい明青灰・呉須 (胎) N9/0 白	
132	染付	皿	石組 28 掘形	13.4	2.9	6.0	(釉) うすい明青灰・呉須 (胎) N9/0 白	
133	土師器	皿 N	石組 28 枠内	4.9	1.0	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
134	土師器	皿 N	石組 28 枠内	4.8	1.0	-	10YR8/3 浅黄橙色	
135	土師器	皿 N	石組 28 枠内	4.7	1.1	-	10YR8/4 浅黄橙色	
136	土師器	皿 N	石組 28 枠内	5.7	1.4	-	10YR8/4 浅黄橙色	
137	土師器	皿 Sb	石組 28 枠内	8.0	1.5	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	

掲載No	器種	器形	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
138	土師器	皿 Sb	石組 28 枠内	8.0	1.4	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
139	土師器	皿 Sb	石組 28 枠内	8.0	1.4	-	7.5YR6/3 にぶい褐色	
140	土師器	皿 S	石組 28 枠内	9.9	2.4	-	5YR7/4 にぶい橙色	
141	土師器	皿 S	石組 28 枠内	10.0	2.7	-	5YR7/4 にぶい橙色	
142	土師器	皿 S	石組 28 枠内	9.9	2.7	-	5YR7/4 にぶい橙色	
143	土師器	皿 S	石組 28 枠内	9.7	1.6	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
144	土師器	小鉢	石組 28 枠内	4.7	3.0	4.2	2.5Y8/2 灰白色	
145	土製品	土鈴	石組 28 枠内	高 5.3	幅 5.2	厚 5.2	10YR8/2 灰白色	
146	土製品	人形	石組 28 枠内	高 3.25	幅 2.2	厚 1.45	10YR8/3 浅黄橙色	
147	染付	皿	石組 28 枠内	7.6	1.9	4.0	(釉) 呉須 (胎) N 8/0 灰白色	
148	染付	瓶	石組 28 枠内	2.0	10.3	4.4	(釉) 呉須 (胎) N 8/0 灰白色	
149	施釉陶器	灯明具 線香立て	石組 28 枠内	4.0	1.7	2.2	(釉) 2.5Y8/4 淡黄色 (胎) 2.5Y8/1 灰白色	
150	施釉陶器	蓋	石組 28 枠内	15.1	3.1	-	(釉) 5Y6/1 灰色 (胎) 10YR8/1 灰白色	
151	施釉陶器	鉢	石組 28 枠内	18.4	13.9	15.4	(釉) 7.5YR2/1 黒色 (胎) 2.5Y6/1 黄灰色	
152	焼締陶器	鉢	石組 28 枠内	20.2	8.9	12.2	5YR5/2 灰褐色	
153	土師器	皿 N	炉 56	6.2	1.8	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	口縁部に片口、内面に摺目のような線刻
154	磁器	椀	土坑 67	-	(1.3)	5.4	(釉) 5B4/1 暗青灰色 (胎) 10YR8/3 浅黄橙色	
155	焼締陶器	大甕	埋甕 50	46.0	90.2	45.6	5YR5/3 にぶい褐色	
156	瓦	軒丸瓦	土坑 341	長 (3.1)	-	径 (10.1)	7.5YR7/4 にぶい橙色	
157	瓦	軒丸瓦	土坑 49	長 (3.3)	-	瓦当径 15.0	N 3/0 暗灰色	
158	瓦	軒平瓦	溝 405	長 (5.4)	幅 (6.4)	瓦当厚 3.4	N 3/0 暗灰色	
159	瓦	軒平瓦	整地 326	長 (3.5)	幅 (7.5)	瓦当厚 (3.6)	7.5YR6/4 にぶい橙色	
160	瓦	軒平瓦	土坑 403	長 (4.3)	幅 (8.1)	瓦当厚 3.0	N 5/0 灰色	
161	瓦	軒平瓦	整地 401	長 (5.6)	幅 (8.5)	瓦当厚 2.7 程度	N 5/0 灰色～ 7.5YR7/4 にぶい橙色	
162	瓦	軒平瓦	土坑 6	長 (4.8)	幅 (9.6)	瓦当厚 4.6	N 3/0 暗灰色	
163	瓦	塼	塼列 203 西面	長 25.0	幅 25.0	厚 3.3	N 6/0 灰色	
164	土製品	取鍋	土坑 7	8.3	3.8	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
165	土製品	鋳型	第 7 層	長 (8.0)	幅 (13.7)	厚 2.9	7.5YR7/3 にぶい橙色	鏡鋳型
166	金属	銭貨	第 7 層上面	径 2.55	-	厚 0.14		重量 2.9 g 元豊通寶
167	金属	銭貨	第 7 層上面	径 2.4	-	厚 0.16		重量 3.2 g 元豊通寶
168	金属	銭貨	土坑 77	径 2.45	-	厚 0.15		重量 3.4 g 熙寧元寶
169	金属	銭貨	南壁清掃時	径 2.5	-	厚 0.17		重量 3.3 g 永樂通寶
170	金属製品	鉄砲玉	第 6 b 層	直径 1.2	-	-		重量 10.5 g
171	金属製品	蓋置	土坑 44	長 (4.8)	幅 10.0	厚 (3.3)		重量 150.6 g
172	石製品	硯	土坑 10	長 14.6	幅 7.3	厚 1.2		重量 305.0 g

第Ⅳ章　まとめ

1　遺跡の変遷

平安時代

平安時代の遺構は検出されず、後世の遺構や整地層から少量の遺物が出土した。周辺の調査でも調査39で12世紀後半の溝が確認されたのみで、活発な土地利用は伺えない。

平安時代末～鎌倉時代前半

調査区北部で３基の土坑を検出した。いずれの土坑からも６Ａ段階の土師器が出土しており、12世紀後半～末に属する土坑である。遺物はこれら３基の土坑の他に後世の遺構や整地層から一定数出土しており、周辺に当該期の遺構が存在していたことが示唆される。

周辺の調査では、本調査地より西の同志社大学新創館地点で実施された調査24では、東西方向の溝が検出されており、最下層から12世紀末～13世紀初頭の土師器が出土している。本調査地北東の同志社大学烏丸キャンパス地点で実施された調査27では、12世紀後半～13世紀前半の区画溝・建物跡・井戸・土坑群などが検出され、一定の面積を持った屋敷地とみられている。出土遺物に輸入磁器の優品が含まれることから、一般の町家ではなく公家や上級武士の屋敷地であったと想定されている。

第Ⅱ章でも述べた通り、調査地周辺は10世紀後半以降に開発が進み、11世紀代には公家の屋敷地が展開することになる。12世紀前半には、調査地の北西に位置する持明院殿が拡張整備され、持明院殿は仙洞御所や里内裏として鎌倉時代を通じて発展していく。調査24で検出された東西溝は持明院殿の周辺整備の一つとして開削された可能性が指摘されている。今回検出した土坑３基もほぼ同時期の遺構であるが、持明院殿との関連を指摘するには根拠が乏しい。しかしながら、持明院殿をはじめとした公家や上級武士の邸宅が周辺に展開したことが周辺調査の成果から想定され、今回の調査成果も当該期の土地開発の状況を示すものと考えられる。

室町時代

室町殿は３代将軍義満による創建以来、屋敷の規模や構造が変化を繰り返し、山田邦和氏はその変遷を６次に区分している[(1)]。今回の調査では第４面で15世紀後半～16世紀初頭、第３面で16世紀前半～中頃の遺構を検出しており、山田氏の区分では第４次（義政）～第６次（義晴）に相当すると考えられる。本調査地は室町殿北西隅にあたり、成立時の敷地境界や構造物の検出が期待されたが、それらは検出されなかった。14世紀～15世紀前半の遺物もほぼ出土しておらず、成立期の様相は不明である。

第４面で検出した主な遺構は、溝405、柱列429、井戸402などがある。

調査区北部を東西に延びる溝405は、９Ｃ段階の遺物が出土し、15世紀後半～末頃に埋没したと考えられる。８代将軍義政の時期にあたり、応仁の乱による罹災に伴って埋没した可能性も考えられよう。溝405の性格や、本調査地東側の同志社大学寒梅館地点で実施された調査２で検出された溝13～15との関係については、次項で記述する。

溝405埋没後に、上位と溝の周囲には10～20㎝の礫が混じる暗褐色砂泥による整地401が堆積する。検出時には土塀地業の可能性も考えたが、調査２で検出された塀地業とみられる礫敷と比べ礫の密度が低いことから、地業と断定することはできなかった。溝405を埋めた後に沈下を防止するためとも考えられるが、礫混じりの土で整地を行った理由は判然としない。

第３面は、第８層による整地の上面で成立する。調査区西半では主に小規模な土坑、東半では礎石列、石室、礫敷、土坑を検出した。遺構密度は高くはなく、特に西半では土器溜りを含め、処理坑とみられる土坑を検出したのみである。出土遺物は10Ａ～Ｂ段階にあてられ、16世紀前半の遺構面である。室町殿は応仁の乱で罹災した後に、数度の小規模な再建を経て、12代将軍義晴により天文十一年（1542）に再建されるが、第３面で検出した遺構は義晴期に属する可能性が考えられる。上述の調査２では、東西溝13～15埋没後その上位に塀地業とみられる石敷２が構築されているが、本調査では石敷などは検出できなかった。調査２で検出された石敷２を西に延長すると本調査地に北隣する上立売通にあたることから、この時期における室町殿北西部の敷地北限は上立売通に位置すると考えられる。

安土桃山時代～江戸時代初頭

本調査の第２面は10Ｃ～11Ａ段階の遺構が展開し、16世紀半ば以降に室町殿が廃絶した後の遺構面と考えられる。調査区の中央に土蔵跡とみられる地業・塼列が南北に並び、その西には小規模な土坑群、東には比較的大型の土坑群が分布する。調査区北西には礎石の根固めの可能性がある小型の集石が東西に並ぶが、その他に建物や塀の痕跡は確認できない。第３面で検出した東西溝335は、本来は当該期に属するものと考えられ、町家の区画溝であったと考えられる。時代は下るが、『洛中絵図　寛永後萬冶前』（京都大学附属図書館蔵　中井家旧蔵）では、調査地の周辺に聖護院とその周りを囲む町家が描かれており、本調査地は町家の北西にあたる。

調査区中央で検出した土蔵跡とみられる地業・塼列は、切り合いの状況から同位置で建て替えがあったことが確認できる。地業の構造は石組を構築し、土を充填した後に地覆石とみられる礫敷を設けることはほぼ共通するが、地業外面の瓦列の有無や隅部に用いられる石材の大きさなど細部には違いがみられる。同志社大学新創館地点で実施された調査24では、今回とほぼ同時期の土蔵とみられる塼列建物が複数検出されている。外壁部分を廻る石組地業や地覆石とみられる礫敷などは本調査で検出した地業と共通するが、調査24では地業外面には塼列が設けられ、用いられる塼も本調査で検出した塼列203で用いられる塼より厚みがある。

調査区東半は複数の土坑が切り合う状況である。炭・焼土を含む火災処理坑や廃棄物の処理坑が大半であるが、黒色シルトが地山となる調査区中央付近では土取坑とみられる平面方形の土坑が複数検出された。土取坑からは10Ｃ～11Ａ段階の遺物が出土し、室町殿廃絶後に新たに周辺の整備を行うにあたって土が採取されたものと考えられる。

江戸時代前半

第１面では主に17世紀前半の遺構を検出した。遺構の配置状況は、調査区西部に建物や塀とみられる礎石列、中央に土蔵跡とみられる地業や塼列、東部に土坑群となる。その他、東区では水溜

とみられる小型の石組を２基検出したが、これらは12Ｂ段階の遺物が出土することから上位層から切り込む遺構であると考えられる。遺構の配置状況から、本調査区では室町通に面した建物の裏に土蔵が建てられていたと考えられる。

調査区中央で検出した土蔵跡は、第２面で検出した地業201・202の上位に第６層上面から切り込む石積が構築されていることから、下層の地業を用いて同位置に建て替えを行ったものと考えられる。地業201は褐色シルトによる土間敷となっているが、土間が複数回敷設されており被熱痕も確認できたことから、火事による焼失と再建が行われたと考えられる。

西区南部では炉56を検出した。調査では鏡鋳型や取鍋などが出土しており、小規模な鋳造が行われていた可能性がある。調査２においても炉跡や鏡鋳型などが複数確認されており、周辺に鋳造工房が存在した可能性も考えられよう。

主に東区で複数の火災処理坑を検出した。いずれも炭・焼土を多く含み、処理坑からは土器・陶磁器類、瓦、金属製品などと共に焼けた壁土も出土している。遺物の時期は11Ｂ段階にあてられ17世紀前半に属すると考えられる。元和六年（1620）年に発生した上京大火に伴う処理坑の可能性が高いと考えられ、周辺の調査でも同時期の火災処理坑が複数検出されている。

２　室町殿の範囲について（図26）

室町殿の四至については、これまでの調査で溝・塀地業とみられる石敷などが確認されている（表５）。南限に関しては、調査７・８・11で堀状の溝が３条検出されており、時期により南限位置が異なっていたと考えられる。調査７で検出された２条の東西堀については、西延長にあたる調査10で検出されていないことなど、全体像は未だ不明な点が多い。

本調査では、調査区北部を東西に伸びる溝405を検出した。幅1.0ｍ前後、深さ0.4～0.7ｍを測り、断面形は逆台形を呈している。室町殿北限に開削された溝の可能性もあり、調査区西部で南に折れる可能性も考えられたが、調査区西壁まで直線的に伸びる。調査２では上立売通の南５ｍの地点で東西方向に伸びる溝13～15（同一溝の延長）が検出され、この溝は出土遺物の年代観から14世紀に属するものと報告されている。今回検出した溝405は15世紀後半～末に属すると考えられ、時期の開きがみられる。溝405と溝13～15をそれぞれの方向に延長すると、完全な同一線上とはならず溝１条程のずれが生じるが、これは溝405と溝14の距離が約９ｍ離れることから誤差の範囲であるかもしれない。両溝の時期差について考慮する必要はあるが、一時期の室町殿北限を示す同一の溝である可能性も考えられる。溝405埋没後は礫を含む土により整地が

表５　室町殿四至対応表

位置	調査地点	遺構	時期
北限	調査２	石敷２	16 世紀中葉
		溝 13 ～ 15	14 世紀
東限	調査 20	溝２	室町時代末
南限	調査７	東西溝（北）	14 ～ 15 世紀前半
		東西溝（南）	15 世紀中葉
	調査 11	溝 271	15 世紀前半
西限	調査 10	濠 124	室町時代

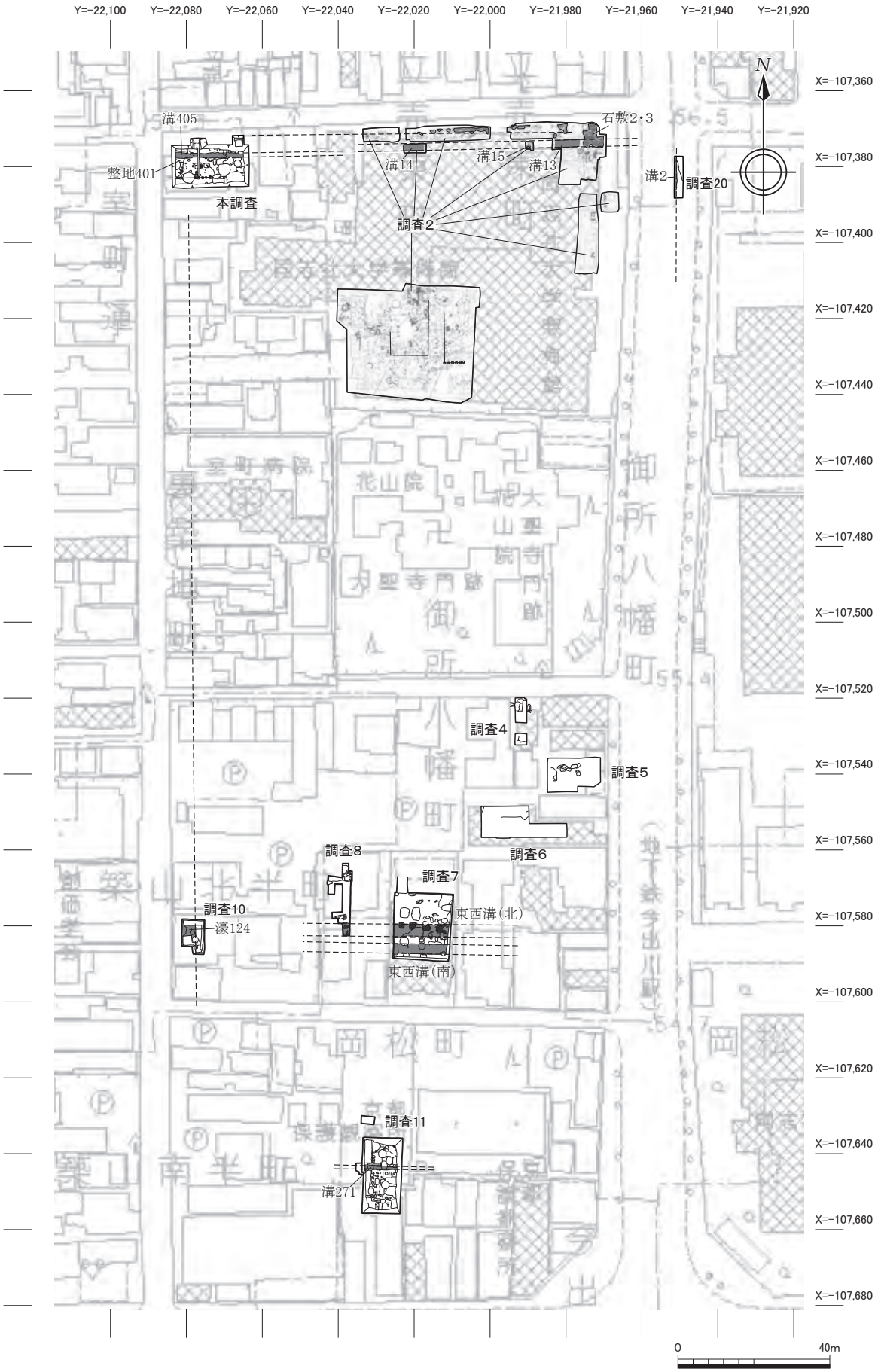


図26　室町殿主要遺構配置図（1：1,500）

なされ、16世紀前半の石室や土坑が成立していることから、北限が北に移動した可能性も考えられる。

西限については、調査10で濠124が検出され、その東肩ラインの延長は、溝405埋没後に敷設された整地401の屈曲部とほぼ一致する。しかし、整地401は地山を0.2ｍ程掘り下げた箇所に礫混じりの暗褐色砂泥で施された整地であり、濠124の様な深く掘り込まれたものとは異なる。先述のように、本調査で検出した溝405は調査区西壁まで直線的に伸びており、南に折れる状況は確認できていない。調査区西端から室町通までは２ｍ程の間隔があるため、その区間に室町殿西限を示す遺構が存在する可能性はあるが、濠124東肩ライン延長からは３ｍ以上西に位置することになる。

本調査では、室町殿西限に関する遺構を検出できず、室町殿北西角の確定には至らなかった。北限の可能性のある溝405を検出したが、調査２で検出された溝13～15との関係も明確ではない。室町殿の四至はこれまで断片的に確認されており、狭い範囲の調査で確認された遺構も多い。さらに、室町殿の敷地が時期によって拡張・縮小を繰り返すことから、検出した遺構の評価や、それを基にして室町殿の復元を進めていく事は、非常に難しい作業であるといえる。今後も調査成果を積上げ、本調査を含めた既往調査の成果を合わせて継続的に検討していく必要がある。

註

（１）山田邦和「足利将軍御所の変遷－室町殿およびその他の御所」『「武家拠点科研」大阪研究集会　中世後期から近世初頭における武家拠点形成の研究』「武家拠点科研」事務局　2022年

参考文献

『学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書－室町殿と近世西立売町の調査－』同志社大学歴史資料館調査研究報告第４集　同志社大学歴史資料館　2005年

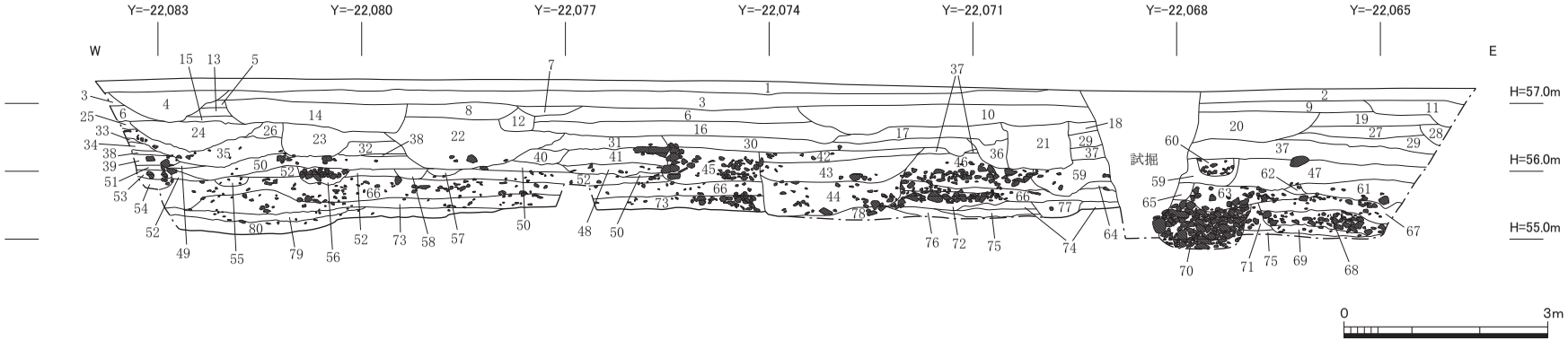
若林邦彦・浜中邦弘・佐伯公子・手島美香『上京遺跡・新町校地遺跡発掘調査報告書－同志社大学新創館（旧育真館）建替え工事に伴う発掘調査－』同志社大学歴史資料館調査研究報告第20集　同志社大学歴史資料館　2024年

山本雅和「中世京都のクラについて」『研究紀要第８号（財）－京都市埋蔵文化財研究所設立25周年記念号－』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年

『京の城－洛中洛外の城郭－』京都市文化財ブックス第20集　京都市文化市民局文化部文化財保護課　2006年

『天下人の城［改版］』京都市文化財ブックス第31集　京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課　2023年

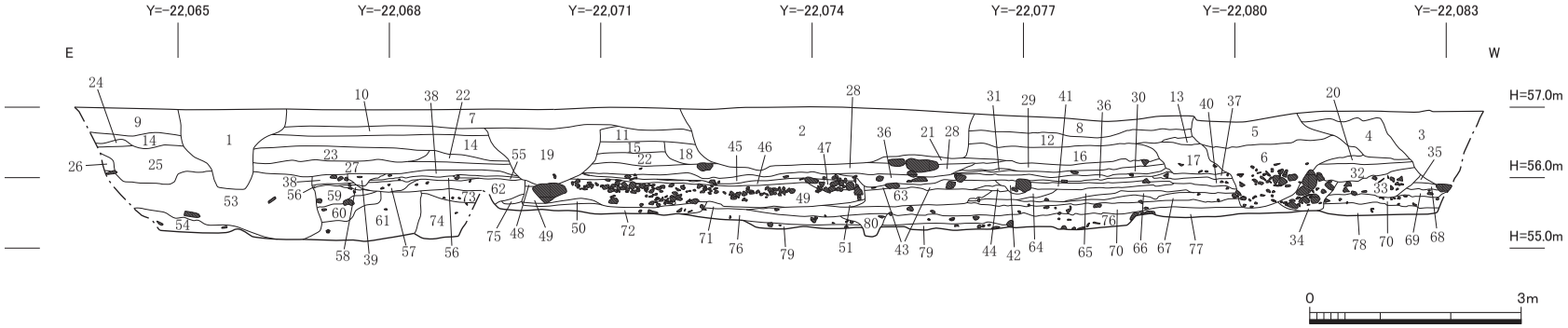
図　　版



1 10YR8/2灰白色砂礫
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 ［第1層］
3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
4 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ10cm前後の礫含む
5 10YR3/3暗褐色砂泥
6 10YR4/2灰黄褐色泥砂
7 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 ［第2層］
8 10YR2/2黒褐色泥砂 炭・焼土多量含む
9 10YR3/3暗褐色砂泥
10 10YR3/3暗褐色砂泥 φ10cm前後の礫含む
11 10YR4/2灰黄褐色砂泥
12 10YR7/2にぶい黄橙色泥砂
13 10YR3/2黒褐色泥砂 炭少量含む ［第2層］
14 10YR3/1黒褐色泥砂 炭・焼土含む
15 5YR4/6赤褐色焼土
16 10YR3/1黒褐色砂泥 炭少量含む
17 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土含む ［第3層］
18 10YR3/4暗褐色砂泥 炭・焼土含む
19 10YR4/2灰黄褐色砂泥
20 10YR3/4暗褐色砂泥 炭・焼土多量に含む
21 10YR3/3暗褐色泥砂+φ10～15cmの礫
22 10YR2/2黒褐色泥砂 炭・焼土多量に含む
23 10YR6/2灰黄褐色細砂 締りあり
24 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 φ5cm前後の小礫含む
25 10YR3/3暗褐色泥砂 炭・焼土含む
26 10YR3/4暗褐色泥砂 炭・焼土多量に含む ［第4層］
27 10YR3/3暗褐色砂泥 焼土少量含む
28 10YR3/3暗褐色泥砂 炭・焼土含む
29 10YR3/4暗褐色砂泥 焼土多量に含む
30 10YR4/4褐色砂泥
31 10YR3/4暗褐色砂泥 炭・焼土含む
32 10YR3/2黒褐色砂泥 炭・焼土含む ［第5層］
33 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
34 10YR3/1黒褐色泥砂 炭多量に含む
35 10YR4/2灰黄褐色泥砂 φ5～10cmの小礫含む
36 10YR3/4暗褐色砂泥 炭・焼土多量に含む
37 10YR3/2黒褐色砂泥 炭・焼土含む
38 10YR4/4褐色シルト ［第6層］
39 10YR3/2黒褐色泥砂
40 10YR3/2黒褐色砂泥 炭・焼土含む
41 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥［第6層］
42 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土含む
43 10YR3/2黒褐色砂泥 炭・焼土少量含む ［土坑230］
44 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土含む
45 10YR3/2黒褐色泥砂 φ10～15cmの礫多量に含む ［地業202充填土］
46 10YR3/3暗褐色泥砂 φ10～15cmの礫多量に含む
47 10YR3/2黒褐色砂泥 ［第7層］
48 10YR3/2黒褐色砂泥 上位に10YR4/4黄褐色シルトが堆積
49 10YR5/2灰黄褐色泥砂 ［第6層］
50 10YR3/2黒褐色泥砂 炭・焼土多量に含む ［整地240］
51 10YR3/3暗褐色泥砂 炭・焼土多量に含む
52 10YR3/2黒褐色砂泥 ［第7層］
53 10YR3/2黒褐色泥砂 φ10cm前後の礫含む ［土坑236］
54 10YR3/2黒褐色泥砂
55 10YR3/2黒褐色泥砂 φ10cm前後の礫少量含む［土坑252］
56 10YR3/2黒褐色泥砂 φ10cm前後の礫含む［土坑237］
57 10YR3/2黒褐色泥砂 φ10cm前後の礫含む［土坑251］
58 10YR3/3暗褐色泥砂 φ10cm前後の礫少量含む［土坑238］
59 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土多量に含む ［土坑209］
60 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土・φ5cm前後の小礫含む［土坑27］
61 10YR3/2黒褐色砂泥 炭・焼土少量含む ［土坑315］
62 10YR3/3暗褐色砂泥
63 10YR3/3暗褐色泥砂 炭・焼土多量含む ［土坑313］
64 10YR3/4暗褐色砂泥 炭・焼土含む ［第7層］
65 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土含む
66 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土少量含む φ5～15cmの礫含む ［整地326］
67 10YR3/3暗褐色砂泥 φ10～15cmの礫・焼土含む
68 10YR3/4暗褐色砂泥 φ10～15cmの礫含む ［土坑325］
69 10YR3/3暗褐色砂泥 φ10cm前後の礫少量含む
70 10YR3/3暗褐色砂泥＋φ15cm前後の礫 ［土坑321］
71 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土少量含む ［第8層］
72 10YR3/1黒褐色泥砂 φ10cm前後の礫含む ［整地326］
73 10YR2/2黒褐色泥砂 φ2～5cmの小石多量含む ［整地401］
74 10YR3/2黒褐色泥砂 ［整地401］
75 10YR4/2灰黄褐色泥砂 ［地山］
76 10YR3/2黒褐色泥砂
77 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土少量含む ［土坑403］
78 10YR3/1黒褐色泥砂［地山］
79 10YR2/2黒褐色砂泥 炭化物少量含む ［土坑425］
80 10YR3/2黒褐色砂泥 炭化物含む

調査区北壁断面図（1：100）

図版 1



1 10YR3/1黒褐色砂泥 φ10～30cmの礫・炭など含む
2 10YR3/2黒褐色砂泥 φ20～30cmの礫含む
3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ10～30cmの礫・炭・土管片など含む
4 10YR3/4暗褐色砂泥 焼土多量に含む
5 10YR3/3暗褐色砂泥+焼土 焼け瓦多く含む
6 10YR3/2黒褐色砂泥 炭・焼土多量に含む
［現代攪乱］

7 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
8 10YR3/2黒褐色砂泥
9 10YR3/1黒褐色砂泥
［第1層］

10 10YR3/2黒褐色砂泥
11 10YR3/3暗褐色砂泥
12 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
13 10YR3/3暗褐色砂泥
［第2層］

14 10YR4/2灰黄褐色砂泥
15 10YR3/2黒褐色砂泥 炭・焼土少量含む
16 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 炭・焼土多量に含む
［第3層］

17 10YR3/1黒褐色泥砂 焼土少量含む
18 10YR3/4暗褐色砂泥 炭・焼土多量に含む
19 10YR3/3暗褐色砂泥 ［土坑34］

20 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
21 10YR4/4褐色シルト
22 10YR3/3暗褐色泥砂 炭・焼土含む
23 10YR3/4暗褐色砂泥 炭・焼土少量含む
24 10YR3/3暗褐色シルト
［第4層］

25 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
26 10YR3/4暗褐色泥砂 炭・焼土多量に含む
27 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土多量に含む
28 10YR4/2灰黄褐色泥砂
［第5層］

29 10YR4/6褐色砂泥
30 10YR2/2黒褐色泥砂 炭多量に含む
31 10YR4/4褐色シルト
［第5層］

32 10YR3/3暗褐色シルト 炭多量に含む
33 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 φ10cm前後の礫含む
34 10YR3/2黒褐色泥砂 φ10～20cmの礫多く含む ［土坑337］

35 10YR3/2黒褐色泥砂 炭・焼土含む
36 10YR4/4褐色シルト 炭・焼土含む
37 10YR4/4褐色シルト
38 10YR4/6褐色シルト
［第6層］

39 10YR3/4暗褐色砂泥 炭・焼土含む ［ピット41］

40 10YR2/2黒褐色泥砂 炭多量に含む
41 10YR2/3黒褐色砂泥 炭・焼土多量に含む
42 10YR2/2黒褐色砂泥 炭・焼土含む
43 10YR3/2黒褐色砂泥 炭・焼土含む
44 10YR4/2灰黄褐色泥砂
［第6層］

45 10YR4/4褐色シルト
46 10YR4/4褐色シルト 表面に被熱痕が部分的にあり
47 10YR3/3暗褐色砂泥 φ10cm前後の礫含む
48 10YR3/2黒褐色泥砂
49 10YR3/2黒褐色砂泥 上位にφ10～15cmの礫多量に含む
50 10YR3/1黒褐色泥砂
51 10YR3/2黒褐色砂泥
52 10YR3/3暗褐色泥砂
［地業201］

53 10YR3/4暗褐色泥砂 炭・焼土多量に含む
54 10YR3/3暗褐色泥砂 炭・焼土多量に含む
［土坑44］

55 10YR4/6シルト
56 10YR4/4シルト
［第7層］

57 10YR3/4暗褐色泥砂 炭・焼土含む
58 10YR3/3暗褐色泥砂 炭・焼土含む
59 10YR3/4暗褐色砂泥 炭・焼土多量に含む
60 10YR3/2黒褐色砂泥 炭・焼土少量含む
［土坑303］

61 10YR3/2黒褐色砂泥 炭・焼土含む ［土坑303］
62 10YR3/3暗褐色砂泥

63 10YR3/2黒褐色泥砂 炭・焼土多量に含む
64 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土含む
65 10YR3/1黒褐色砂泥 炭・焼土含む
66 10YR3/2黒褐色砂泥
67 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
68 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土含む
［第7層］

69 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土少量含む ［整地326］

70 10YR3/3暗褐色泥砂 炭・焼土含む
71 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・焼土少量含む
［第7層］

72 10YR3/2黒褐色砂泥 同色粗砂含む［地業261］

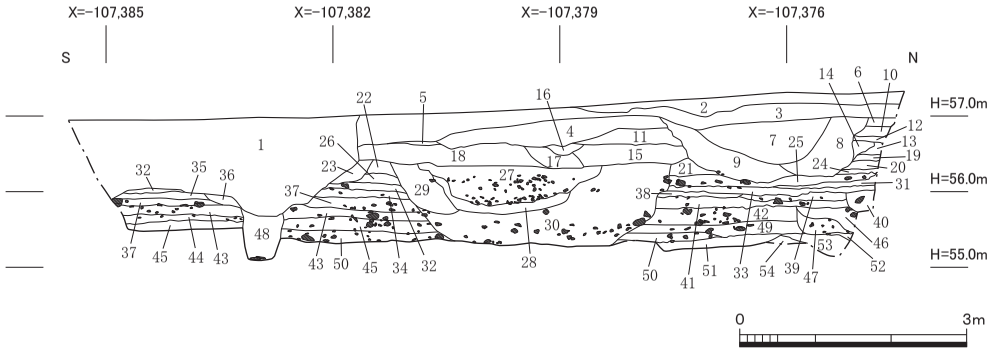
73 10YR3/4暗褐色砂泥 炭少量含む
74 10YR3/3暗褐色泥砂
［土坑305］

75 10YR3/3暗褐色泥砂 ［地業261］

76 10YR3/1黒褐色泥砂
77 10YR3/2黒褐色砂泥 炭・焼土少量含む
78 10YR3/2黒褐色泥砂 炭・焼土少量含む
［第8層］

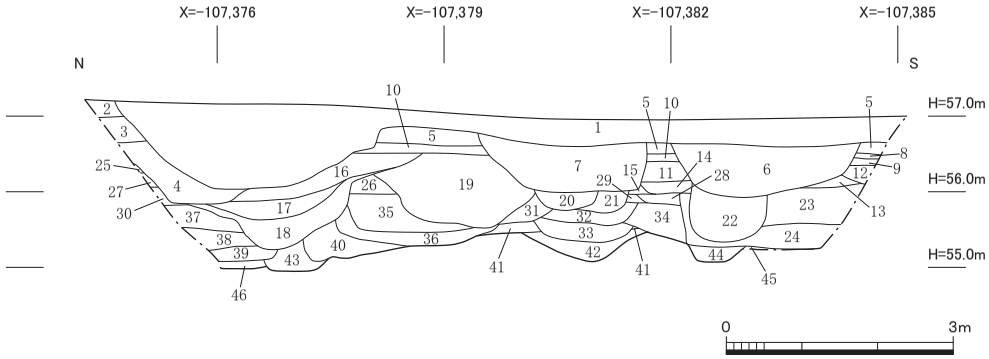
79 10YR3/2黒褐色泥砂 炭化物少量含む ［土坑409］
80 10YR3/2黒褐色砂泥 炭化物含む ［ピット342］

調査区南壁断面図（1：100）



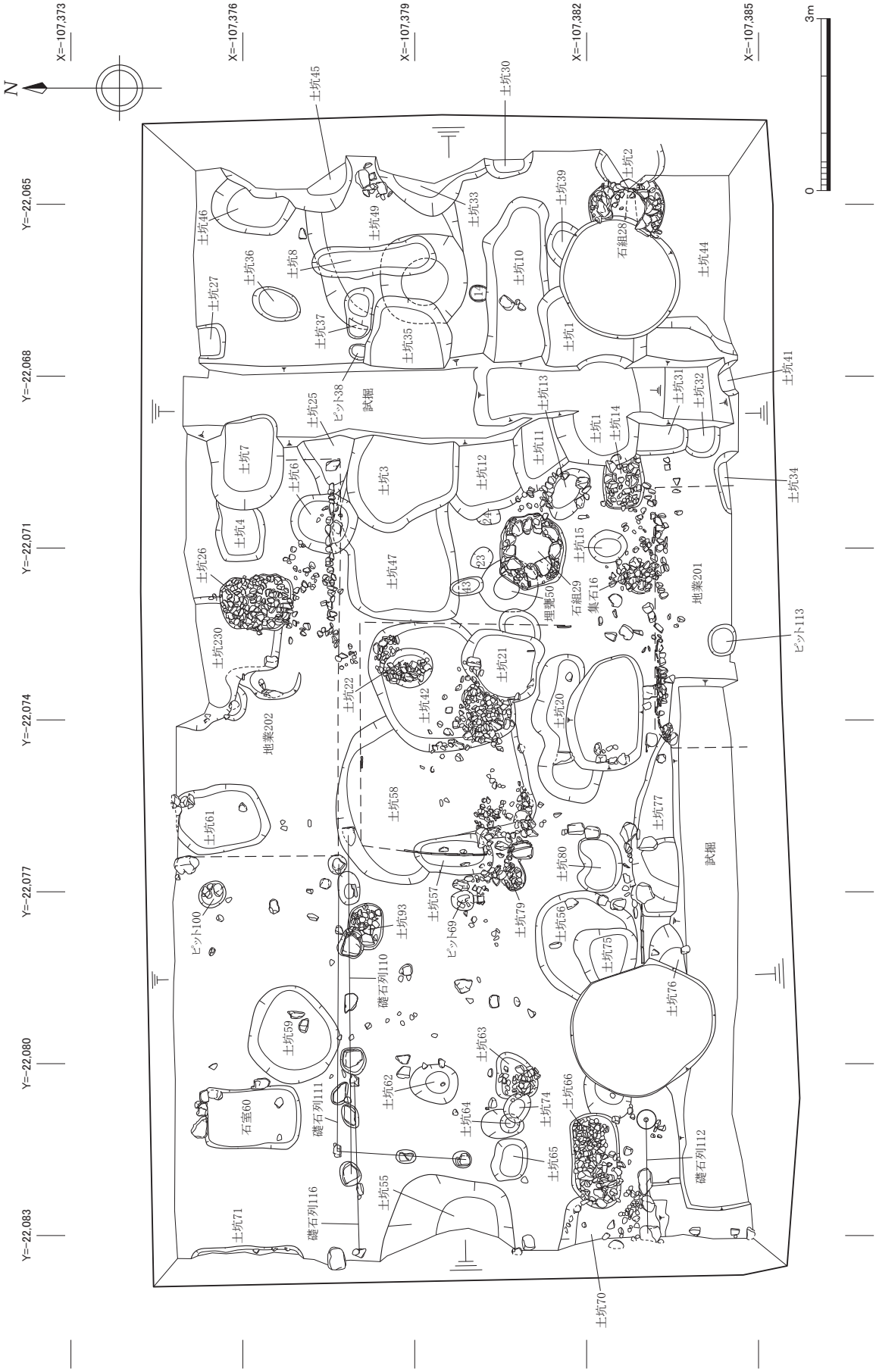
1　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　φ10～30cmの礫・炭・土管片など含む［現代攪乱］
2　10YR8/2灰白色砂礫
3　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　［第1層］
4　10YR5/3にぶい黄褐色砂泥　φ10～20cm前後の礫含む
5　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土多量に含む
6　10YR4/2灰黄褐色泥砂［第2層］
7　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂　φ10～25cmの礫多く含む
8　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土含む
9　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土多量に含む
10　10YR3/3暗褐色泥砂　炭・焼土含む［第3層］
11　10YR3/4暗褐色砂泥　炭・焼土含む［近現代整地層］
12　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂［第4層］
13　10YR4/2灰黄褐色泥砂　φ5～10cmの小礫含む［第4層］
14　10YR4/2灰黄褐色砂泥　炭・焼土含む
15　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土含む
16　10YR3/2黒褐色砂泥　炭少量含む
17　10YR4/2灰黄褐色泥砂　φ5～10cmの小礫多く含む
18　10YR3/4暗褐色砂泥　炭・焼土多量に含む
［近現代整地層］
19　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥［第5層］
20　10YR3/1黒褐色泥砂　炭多量に含む［第5層］
21　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
22　10YR3/2黒褐色泥砂　炭・焼土少量含む　［第6層］
23　10YR3/1黒褐色砂泥　炭・焼土少量含む
24　10YR4/4褐色シルト
25　10YR2/2黒褐色泥砂　炭・焼土含む　［第6層］
26　10YR3/4暗褐色泥砂　炭・焼土多量に含む
27　2.5Y7/2灰黄色砂礫
28　10YR4/4褐色シルト　［土坑55］
29　10YR3/1黒褐色砂泥　炭・焼土含む
30　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土少量含む　［土坑255］
31　10YR3/2黒褐色泥砂［第6層］
32　10YR4/4褐色シルト　炭・焼土少量含む［第7層］
33　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土多量に含む［整地240］
34　10YR3/1黒褐色砂泥　炭多量に含む
35　10YR2/2黒褐色砂泥　炭・焼土含む
36　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土多量に含む
37　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土含む
38　10YR4/4褐色シルト
39　10YR3/2黒褐色泥砂
［第7層］
40　10YR3/2黒褐色泥砂　φ10cm前後の礫含む［土坑236］
41　10YR3/1黒褐色砂泥［第7層］
42　10YR3/1黒褐色泥砂　φ10cm前後の礫含む［整地326］
43　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土少量含む［整地326］
44　10YR3/3暗褐色泥砂　炭・焼土含む［第7層］
45　10YR3/2黒褐色泥砂　炭・焼土少量含む［第8層］
46　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土少量含む　φ5～15cmの礫含む
47　10YR3/1黒褐色泥砂　φ10cm前後の礫少量含む
48　10YR2/2黒褐色砂泥　炭・焼土含む［溝335］
49　10YR3/1黒褐色泥砂　φ10cm前後の礫含む［整地401］
50　10YR2/2黒褐色泥砂　φ2～5cmの小石多量含む［整地401］
51　10YR3/2黒褐色泥砂　φ2～5cmの小石含む［溝405］
52　10YR2/2黒褐色砂泥　炭化物少量含む
53　10YR3/2黒褐色砂泥　炭化物含む　［土坑425］
54　10YR3/1黒褐色泥砂［地山］

調査区西壁断面図（1：100）

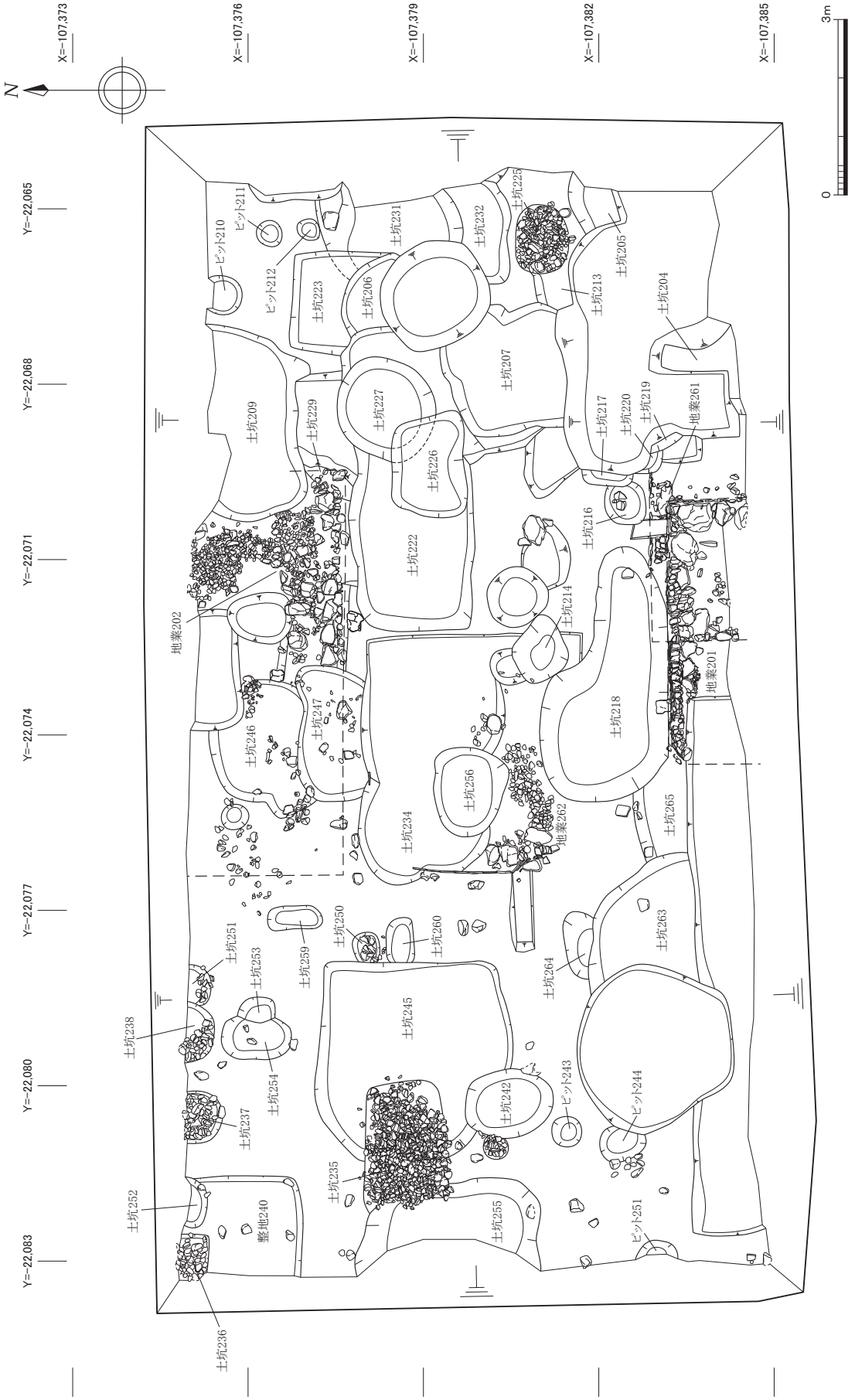


1　10YR3/1黒褐色砂泥
2　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
3　10YR4/2灰黄褐色砂泥
4　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　φ10cm前後の礫含む
5　10YR4/2灰黄褐色砂泥［第3層］
6　10YR3/3暗褐色泥砂　φ10～20cmの礫・炭・焼土含む
7　10YR3/2黒褐色泥砂　φ10～15cmの礫含む
8　10YR3/3暗褐色シルト
9　10YR4/3にぶい黄褐色シルト
10　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土含む　［第4層］
11　10YR3/4暗褐色砂泥　炭・焼土多量に含む
12　10YR3/4暗褐色泥砂　炭・焼土多量に含む
13　10YR3/3暗褐色泥砂　炭・焼土多量に含む　［第5層］
14　10YR3/2黒褐色泥砂　炭・焼土含む
15　10YR3/3暗褐色砂泥
16　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土含む
17　10YR3/4暗褐色砂泥　炭・焼土含む　［土坑45］
18　10YR2/2黒褐色砂泥　炭・焼土多量に含む
19　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土少量含む［土坑33］
20　10YR3/4暗褐色砂泥　炭・焼土含む［土坑30］
21　10YR3/3暗褐色砂泥　φ20cm前後の礫含む［土坑30］
22　10YR3/3暗褐色泥砂+φ10～30cmの礫［土坑2］
23　10YR3/4暗褐色泥砂　炭・焼土多量に含む
24　10YR3/3暗褐色泥砂　炭・焼土多量に含む　［土坑44］
25　110YR3/4暗褐色砂泥　焼土多量に含む
26　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土多量に含む　［第5層］
27　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土含む［土坑49］
28　10YR3/2黒褐色泥砂
29　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土含む　［第6層］
30　10YR3/2黒褐色砂泥［第7層］
31　10YR3/4暗褐色砂泥　炭・焼土含む［土坑か］
32　10YR3/3暗褐色シルト　φ10～20cmの礫含む
33　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土少量含む　［土坑266］
34　10YR3/2黒褐色泥砂　炭・焼土少量含む［土坑205］
35　10YR3/3暗褐色泥砂　炭・焼土多量に含む
36　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土含む　［土坑231］
37　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・焼土少量含む［土坑315］
38　10YR3/3暗褐色砂泥　φ10～15cmの礫・焼土含む
39　10YR3/4暗褐色砂泥　φ10～15cmの礫含む　［土坑325］
40　10YR2/2黒褐色泥砂　10YR4/2灰黄褐色砂泥含む［土坑408］
41　10YR3/2黒褐色砂泥［第8層］
42　10YR3/2黒褐色泥砂　炭・焼土少量含む［土坑401］
43　10YR3/2黒褐色泥砂　粗砂多く含む［溝405］
44　10YR3/3暗褐色泥砂　炭・焼土含む［溝335か］
45　10YR3/2黒褐色泥砂
46　10YR4/2灰黄褐色泥砂　［地山］

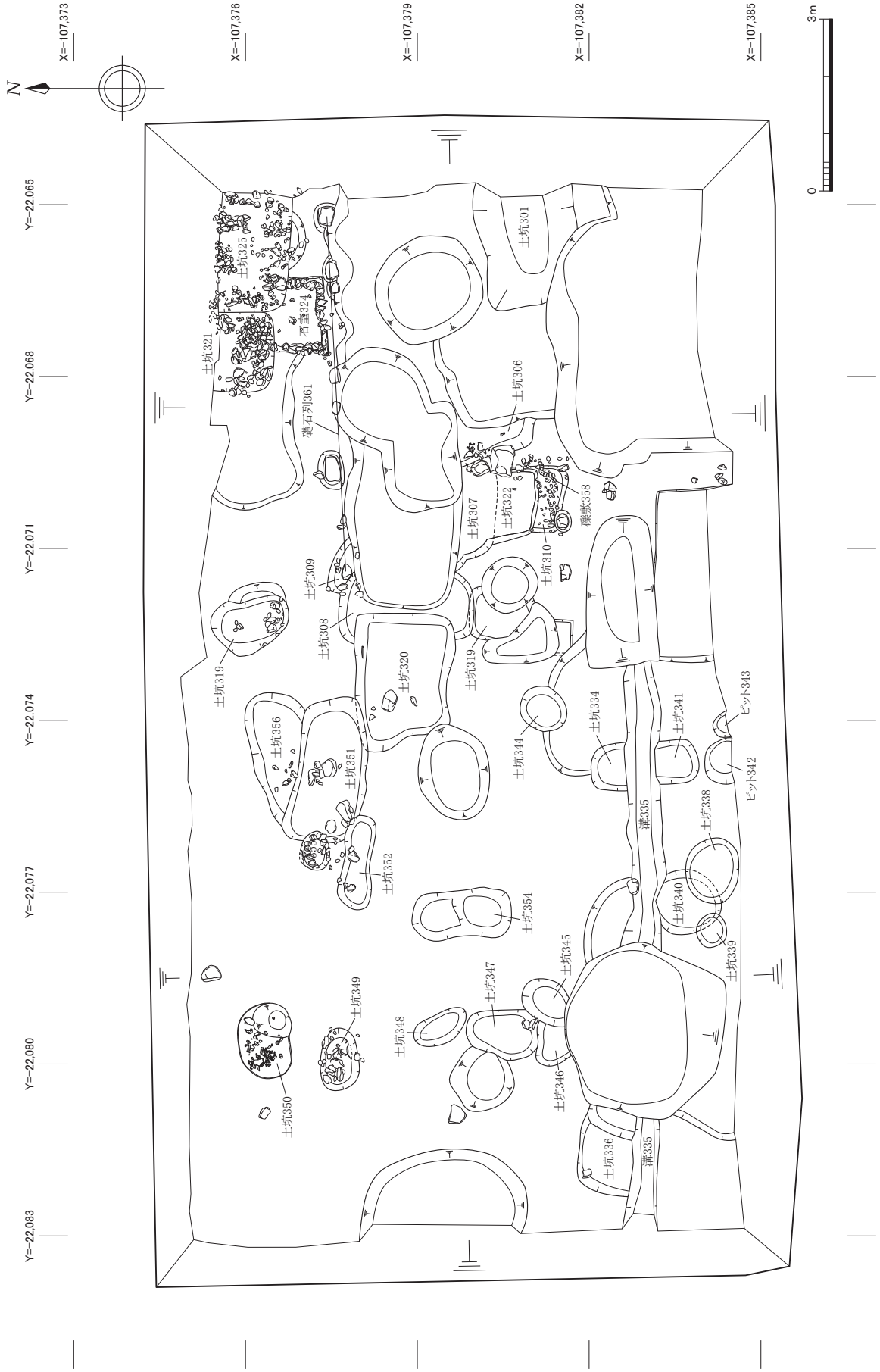
調査区東壁断面図（1：100）


X=-107,373
X=-107,376
X=-107,379
X=-107,382
X=-107,385
Y=-22,065
Y=-22,068
Y=-22,071
Y=-22,074
Y=-22,077
Y=-22,080
Y=-22,083
N
0
3m
土坑45
土坑30
土坑46
土坑49
土坑33
土坑39
土坑2
石組28
土坑44
土坑36
土坑8
土坑10
土坑27
土坑37
土坑35
土坑1
土坑41
土坑38
試掘
土坑25
土坑13
土坑31
土坑32
土坑7
土坑6
土坑3
土坑12
土坑11
土坑14
土坑34
土坑4
土坑47
土坑15
土坑26
石組29
集石16
埋甕50
地業201
ピット113
土坑230
土坑22
土坑42
土坑21
土坑20
地業202
土坑58
土坑77
土坑61
土坑80
試掘
ピット100
土坑93
土坑57
ピット69
土坑79
土坑56
土坑75
礎石列110
土坑76
土坑59
土坑63
土坑62
土坑66
石室60
礎石列111
土坑64
土坑74
土坑65
礎石列112
土坑55
礎石列116
土坑71
土坑70

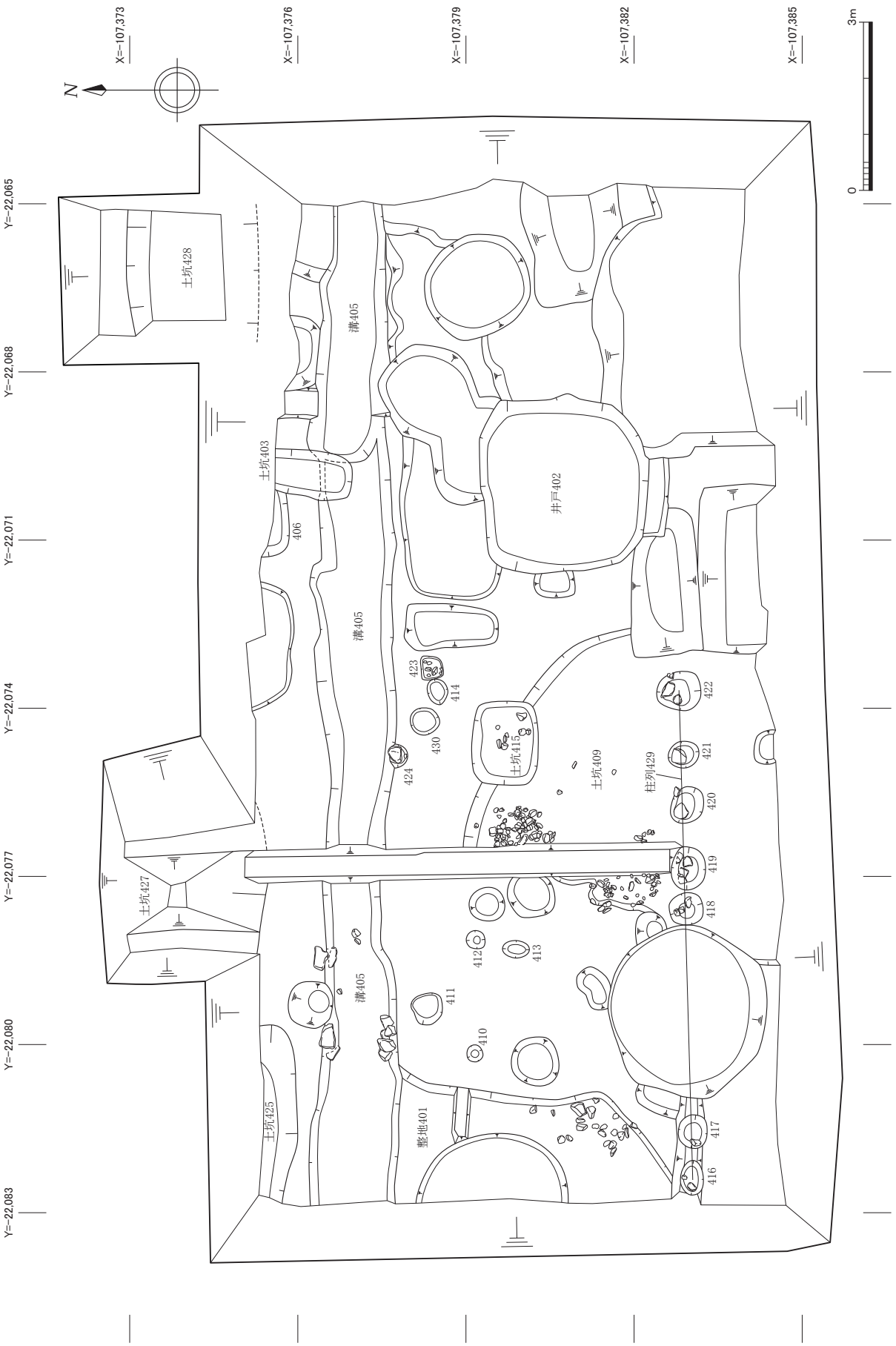
第１面平面図（１：100）


X=-107,373
X=-107,376
X=-107,379
X=-107,382
X=-107,385
Y=-22,065
Y=-22,068
Y=-22,071
Y=-22,074
Y=-22,077
Y=-22,080
Y=-22,083
N
0
3m
ピット210
ピット211
ピット212
土坑223
土坑206
土坑231
土坑232
土坑225
土坑205
土坑213
土坑204
土坑207
土坑209
土坑229
土坑227
土坑226
土坑222
土坑217
土坑220
土坑219
地業261
土坑216
土坑214
地業202
土坑218
地業201
土坑246
土坑247
土坑256
土坑234
地業262
土坑265
土坑263
土坑251
土坑253
土坑259
土坑250
土坑260
土坑264
土坑238
土坑245
土坑254
土坑237
土坑242
ピット243
ピット244
土坑235
土坑252
整地240
土坑255
ピット251
土坑236

第２面平面図（１：100）


X=-107,373
X=-107,376
X=-107,379
X=-107,382
X=-107,385
Y=-22,065
Y=-22,068
Y=-22,071
Y=-22,074
Y=-22,077
Y=-22,080
Y=-22,083
N
0
3m
土坑301
土坑306
土坑307
土坑308
土坑309
土坑310
土坑319
土坑320
土坑321
土坑322
土坑325
土坑334
土坑336
土坑338
土坑339
土坑340
土坑341
土坑344
土坑345
土坑346
土坑347
土坑348
土坑349
土坑350
土坑351
土坑352
土坑354
土坑356
礫敷358
礫石列361
ピット342
ピット343
溝335
溝335

第３面平面図（１：100）


X=-107,373
X=-107,376
X=-107,379
X=-107,382
X=-107,385
Y=-22,065
Y=-22,068
Y=-22,071
Y=-22,074
Y=-22,077
Y=-22,080
Y=-22,083
N
0
3m
土坑428
溝405
土坑403
406
井戸402
423
414
430
424
土坑415
土坑409
柱列429
422
421
420
419
418
417
416
土坑427
412
413
411
410
土坑425
整地401

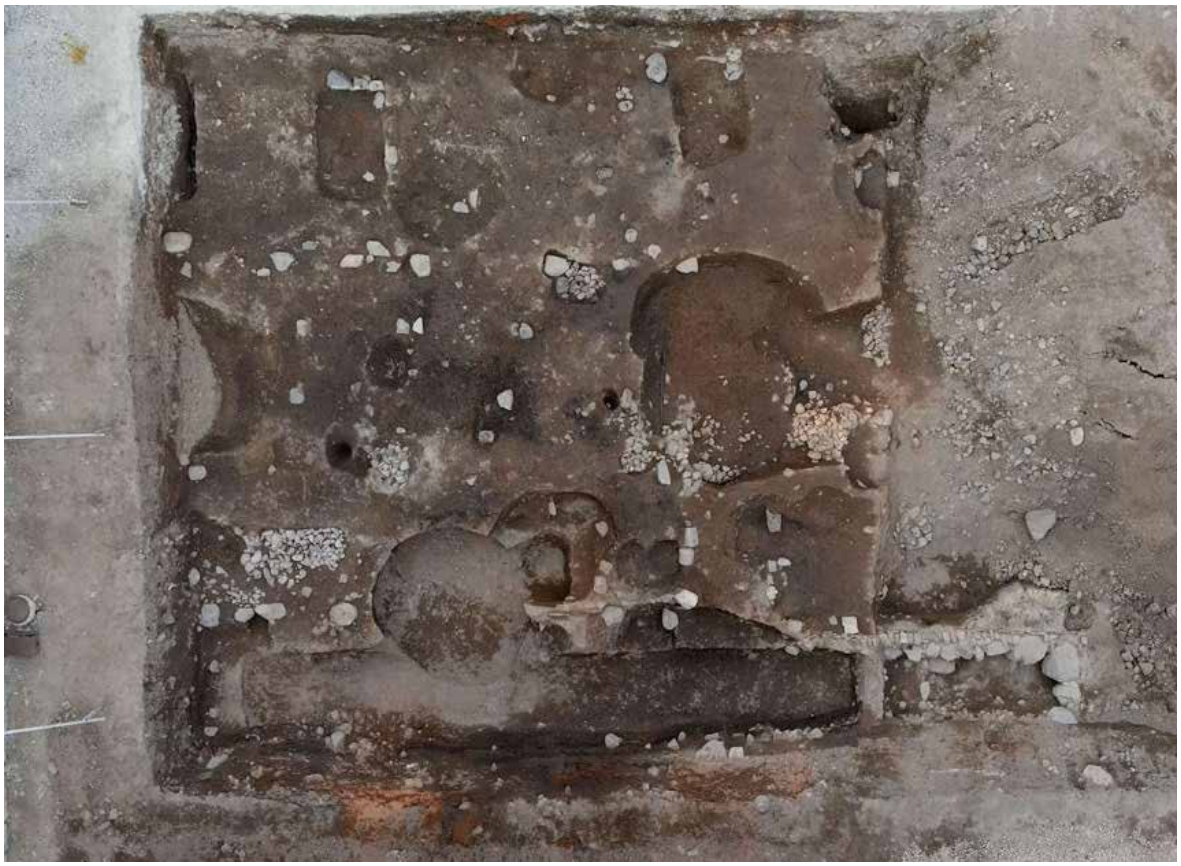
第４面平面図（１：100）

1．東区第１面全景（火災処理坑掘削前　東から）

2．東区第１面全景（火災処理坑掘削後　東から）

図版10　遺構

１．西区第１面全景（東から）



２．西区第１面俯瞰写真（上が北）

1．石組28（西から）

2．石組28枠内遺物出土状況（北から）

3．石組29（南から）

4．埋甕50（南から）

5．土坑56（西から）

6．土坑56断面（西から）

7．土坑56硬化面除去後石組検出状況（北西から）

8．土坑26（西から）

図版12　遺構

1．地業201・202・262、塼列203（西区　南から）

2．地業201・202、塼列203（東区　南から）

3．地業201地覆石検出状況（西から）

4．地業201石組内充填土除去後（西から）

１．地業201東面の状況（北東から）

２．地業201北西隅部の状況（西から）

３．地業201断面（調査区南壁　北から）

図版14　遺構

1．地業202地覆石検出状況（東区　東から）

2．地業202石組内充填土掘削後（東区　北西から）

3．地業202検出状況（西区　東から）

1．塼列203（東区　南西から）

2．塼列203、地業262（西区　東から）

3．塼列203、地業262南西隅部の状況（南から）

1．西区第２面全景（東から）

2．東区第２面全景（東から）

1．地業261（北から）

2．土坑236・237・238・251（南西から）

3．土坑235（西から）

図版18　遺構

１．西区第３面全景（東から）

２．東区第３面全景（東から）

1．石室324（北から）

2．土坑350遺物出土状況（東から）

図版20　遺構

１．西区第４面全景（東から）

２．東区第４面全景（東から）

1．整地401検出状況（西区　南から）

2．整地401掘削後（西区　南から）

図版22　遺構

1．柱列429（東から）

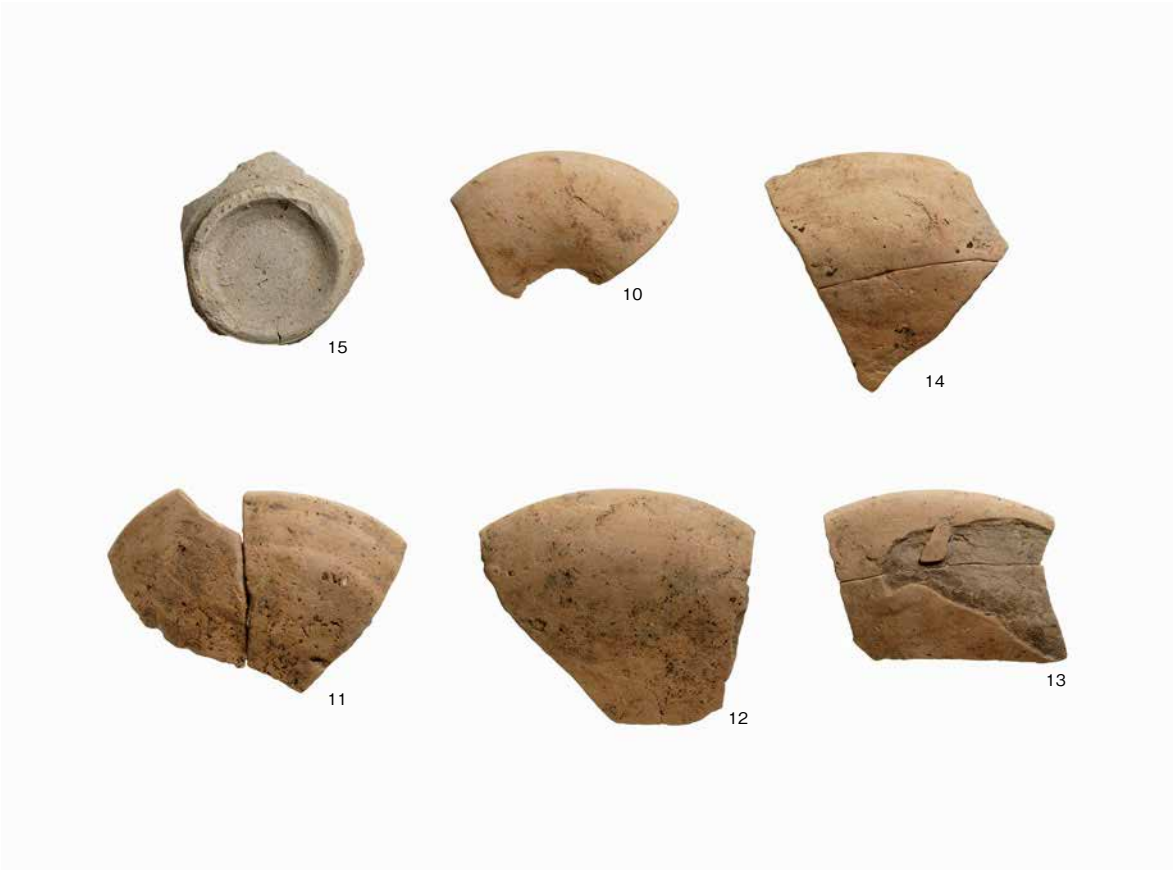
2．溝405東セクション（東から）

3．溝405西セクション（東から）

1．土坑425（南東から）

2．西拡張区全景（東から）

3．東拡張区全景（東から）



1．出土遺物－1（土坑427）

2．出土遺物－2（土坑425・428）

1．出土遺物－３（緑釉、山茶碗）

2．出土遺物－４（古瀬戸）

3．出土遺物－５（溝405）

1．出土遺物－６（土坑403）

2．出土遺物－７（土坑350）

1．出土遺物－８（土坑307）

2．出土遺物－９（瓦質土器）

1．出土遺物－10（青磁）

2．出土遺物－11（焼締陶器）

1．出土遺物－12（土坑10）

2．出土遺物－13（土坑49）

1．出土遺物－14（織部、唐津）

2．出土遺物－15（瓦質土器）

1．出土遺物－16（焼締陶器）

1．出土遺物－17（石組28　土師器、土製品）

2．出土遺物－18（石組28　染付、施釉陶器、焼締陶器）

1．出土遺物－19（軒瓦）

2．出土遺物－20（塼）

1．出土遺物－21（土師器）

2．出土遺物－22（鋳造関連）

—

3．出土遺物－23（金属製品　蓋置）

4．出土遺物－24（金属製品　鉄砲玉）

5．出土遺物－25（銭貨）

報 告 書 抄 録

ふりがな	むろまちどのあと・かみぎょういせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	室町殿跡・上京遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書
シリーズ番号	第33集
編著者名	大西晃靖・興梠千春
編集機関	株式会社 文化財サービス
所在地	〒601-8127 京都市南区上鳥羽北花名町８番地
発行所	株式会社 文化財サービス
発行年月日	2025年2月28日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むろまちどのあと 室町殿跡 かみぎょういせき 上京遺跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 むろまちどおりかみだちうりくだる 室町通上立売下る うらついじちょう69ばん・ 裏築地町69番・ 69ばん1・71ばん 69番1・71番 どうくかみだちうりどおり 同区上立売通 むろまちひがしいるかみだちうり 室町東入上立売 ひがしまち30ばん 東町30番	26100	230 224	35度 01分 55秒	135度 45分 29秒	2024年 5月27日 ～ 2024年 9月19日	234.5 ㎡	集合住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
室町殿跡 上京遺跡	邸宅跡 都城跡	平安時代		緑釉陶器・山茶碗	・調査区北部で平安時代末～鎌倉時代初頭の土坑を３基検出した。 ・調査区北部で室町時代後半の東西溝を検出した。出土遺物は15世紀後半に属し、応仁の乱前後の時期とみられる。 ・東西溝埋没後、その上位に石室や土坑が成立する。これらは出土遺物から16世紀前半の遺構とみられる。 ・江戸時代前半の石組地業を４基、塼列を１基検出した。これらは土蔵の基礎と考えられる。 　江戸時代前半の火災処理坑を複数検出し、出土遺物には茶陶も含まれていた。
		鎌倉時代	土坑	土師器・山茶碗・瓦器・瓦	
		室町時代	柱列・溝・井戸・石室・土坑	土師器・青磁・白磁・染付・瓦質土器・焼締陶器・施釉陶器・瓦・塼・金属製品	
		江戸時代	礎石列・建物地業・塼列・溝・石組・埋甕・土坑	土師器・施釉陶器・焼締陶器・染付・土製品・鋳造関連・瓦・塼・金属製品・石製品	

文化財サービス発掘調査報告書 第33集

室町殿跡・上京遺跡発掘調査報告書

発行日　2025年２月28日

株式会社　文化財サービス
編　集　〒601-8127 京都市南区上鳥羽北花名町８番地
TEL 075-672-6800

三星商事印刷株式会社
印　刷　〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
TEL 075-467-5151